

Digitized by the Internet Archive  
in 2012

ORIENTAL  
COLLECTION



UNIVERSITY OF CALIFORNIA  
MEDICAL CENTER LIBRARY  
SAN FRANCISCO



江戸のついで





長崎と海外文化

日-1932

しか  
あ





供するに在るを以て、各編に共同的に措ける大著述にて、一時の旅客然りと雖ども市史はそれの目的とする所豊富なる参考資料を提つてある所以なり。

止まらんや。是れ我が市が年々巨資を投じて市史の編修に従ひ果して然らば我が長崎の郷土史は豈獨り市民百年の鑑たる一にいて我が長崎市に於てその呱呱の聲をあげざるはなかり。徳川幕府三百年の治世を通じて海外より輸入せられたる文化は、史の要ある所以なり。然るに我が長崎市近世文化の搖籃にして、詳にせんことすに必要は必ず先づ郷土の沿革を知らず。而して父祖の事蹟を必ず先づ父祖の事蹟を欲せば

1823

本草綱目

DS897  
N273  
N147472  
1926  
O.C.



# 長崎と海外文化上編 目次

## 第一期 葡萄牙貿易時代

第一章	葡萄牙人の初渡來と薩摩及び平戸に於ける葡萄牙貿易	一
第二章	横瀬浦の葡萄牙貿易	六
第三章	福田浦の葡萄牙貿易	九
第四章	長崎に於ける基督教の開始	二二
第五章	トマス・オ・サントス寺の建立	四
第六章	開港前の長崎町	六
第七章	長崎の開港	六
第八章	耶穌會の全盛期と三侯使節の渡歐	三三
第九章	吉吉利支丹禁制	六
第十章	三侯使節の歸朝と長崎	三三
第十一章	西班牙領比律賓使節の來朝と長崎	六



大正十五年四月

長崎市長 錦織 幹

足れり。幸に刊に臨み本書編修の來歴を叙して序文に代ふと云爾。  
文化[二]君に託して之を公にするに今やその稿成るを告げ、茲に長崎と海外  
の二年の暮は此意見たる文化史の郷土史を編む必要を感じたる所以に  
り。昨年の要を得たる文化史の郷土史を編む必要を感じたる所以に簡  
に。さて、要を得たる文化史の郷土史を編む必要を感じたる所以に簡  
は勿論、僅少の時間を以て概括的知識を要求するもの、對外に對しては、

第八章	戊辰の役と長崎	.....	二五
第七章	自由互市	.....	二四
第六章	初度の日蘭條約	.....	二四
第五章	長崎海軍の傳習所と長崎製鐵所	.....	二五
第四章	和親條約の締結	.....	二三
第三章	和蘭國王再度の開港忠告	.....	二二
第二章	和蘭國王初度の開港忠告	.....	二二
第一章	洋式陸軍の濫觴と高島秋帆	.....	二七
第二期 幕末時代			
第十章	和蘭船の日本貿易復興策とシーボルトの渡來	.....	一〇一
第九章	佛國革命の影響	.....	一〇〇

第八章	支那文化の輸入	五
第七章	貿易方法の變遷	八
第六章	唐人屋敷	七
第五章	長崎の唐貿易と朱印船貿易	九
第四章	出島のと蘭商館	七
第三章	平戸のと蘭商館の長崎移轉	七
第二章	平戸のと蘭貿易	七
第一章	和蘭船の初渡來	五

## 第二期 唐蘭貿易時代

第十六章	佛教の復興	二六
第十五章	鎖國	五
第十四章	徳川幕府の吉利支丹禁制と長崎	四
第十三章	絲割符商法	四
第十二章	二十六聖徒の殉教	四〇





葡 萄 牙 上 陸 の 圖

長崎砲の浦製鐵所より長崎を望むの景	三二
長崎西役所の景	三三
武州徳丸原に於ける砲術演習の圖	三二
唐人屋敷	三七
出島和蘭商館	三七
長崎港全景	三五
葡萄牙人上陸之圖	一

## 圖 版 目 次

に依つて俄に賑ふた。何故に葡萄牙貿易はかく俄に盛になつたかといふに、日本國は風土に 포르コボ  
 人等の間に傳はるや、彼等は先づ競争ふて渡來し、薩摩の坊ノ津、山川、鹿兒島等の諸港は葡萄牙貿易  
 人の初渡來は天文二十二年(千五百四十四年)で、場所は薩摩の種子島であつた。日本發見の報一たび葡  
 牙あるけれども、その研究は本書の目的でないから之を略する。一般に承認する所によれば葡萄牙  
 葡萄牙人初渡來の年月に就いては種々の異説がある。そして學問上から見れば興味ある問題

ぬ。

であつた。夫故に長崎開港の由來を述べるに少くとも筆を葡萄牙人の初渡來に起さねばなら  
 シアリエルの流を酌量し宜教師等であつた。そして長崎を開いて世界の港と爲したのも亦葡萄牙人  
 長崎開港の先驅者は葡萄牙王ジョゼ第三世によりて派遣せられたる耶穌會の高僧フラシスコ・

## 戸に於ける葡萄牙貿易

### 第一章 葡萄牙の初渡來と薩摩及び

#### 第一期 葡萄牙貿易時代

## 長崎と海外文化 上 編







らんと考へたものであつた。

その南部には基督敎國があるといふ傳説があつたので、それと聯合してイスマム敎徒を夾撃せば妙な洋への航路を發見せんとした計畫も亦その頃アフリカの北岸にはイスマム敎徒が住んで居るけれども企てたものもイスマム敎徒を征服して基督敎を宣傳せんが爲めであつた。そのアフリカを迂回して東征の心であつた。夫故に葡萄牙人の活動には何時も宗教的の意味が含まれて居た。そのアフリカに遠征に非常なる壓迫を加へ、彼等をして一時に國の慘狀を見んとするに至らしめた所の異敎徒に對する敵抑葡萄牙國陸興の因を爲したものは、久しくエニマス半島を占領して同半島内に在る基督敎國民禁ぜらるゝの結果を將來した。

精神界に惹起し、當に我國の平和を擾亂したばかりでなく、葡萄牙人自身も亦爲めに我國への通商をその後幾もなくして輸入された所の基督敎と精神的武器は、更に一層恐るべき一大革命を我國民の鐵砲で新鋭なる武器の輸入も我國の兵制上から見れば由々しき一大事件であつたに相違ないが、歡迎せられた爲めに貿易の利が莫大のものであつたからである。

日本探險隊の偶然的發見であつた位であるのみならず、葡萄牙の輸入した鐵砲が大に我國の武人に富める仙境として早く歐洲探險隊の目的となつて居て、コロバスの亞米利加大陸發見も實の東洋旅行記によりてジッパング（日本國）名によりて廣く歐洲人に紹介せられ、金銀珠寶

葡萄牙商人の慰撫方を依頼した。併し此間に大村純忠の機敏な運動が効を奏して、降信の苦心も水泡に長老コスモ・ゾ・ラトレスに送つて大に辟咎に努め、平戸に會堂建設の約束をして、トレスに松浦隆信はここの悲むべき事變の爲めに葡萄牙貿易に陸の害の起らんことを恐れ、書を豊なる耶蘇會が始まり、葡萄牙船の船長以下四名の葡萄牙人が爲めに非常の死を遂げた一件であつた。

商船或水夫と平戸の或町人との間些々から喧嘩が本となつて、言語不通の爲めに一大争闘然るに永祿四年に至りては、平戸貿易の爲めに更に一層悲むべき一大事件が起つた。それは葡萄牙

氏に對して痛く不快の念を懷くやになつた。

を憂へ、永祿元年（千五百五十八年）遂に宣教師等に諭して領外に退去せしめた。是から宣教師等は松浦に分れて互に鎗を削り、遂には兩黨各武器をとつて戦はんとするに至つたので、松浦降信は大之にも甚く猛烈であつたので、間もなく佛基兩教徒の間に烈しい軋轢が始まり、松浦の重臣等も兩黨も平戸の布教はその初め成績であつた。併しその他宗排斥振りが依然として餘りに絶對的で、か

の言によつて遂に終焉を告げた。

せしめた。かくて平戸が獨り葡萄牙貿易の利を占むることとなり、薩摩の葡萄牙貿易はシヤサエルトに宗教家の威嚴を示すは正に此時に在りて爲し、平戸着早々葡萄牙商人等に説いて薩摩貿易を停止シヤサエルトは薩人の彼に對する冷淡を非常に不快に感じつつあつたので、その怨を報ふると同時



を歓迎し請にまかせて領内の布教を許した。

發せしめ、その布教上に利する所あらしめんとしたのであつたが、松浦隆信も亦その意中察して之を  
や、儀仗兵を上陸せしめて威儀を整へしめた。それは松浦氏をしてシサエルをして尊崇するの念を  
の船員等はシサエルの來着を聞て大に喜び、祝砲を放つて歡迎の意を表し、その松浦氏を訪す  
シサエル平着の當時、平戸には二ヶ月前から碇泊して居る一隻の葡萄牙商船があつたが、そ  
から考へて、それこそが事實らしく思はる。

天連を薩摩に招き鹿兒島市内に屋敷を興へてここに住はしたことが、上井覺兼の日記にあることな  
が思はしくなかつた爲であつた。其後間もなく宣教師等が薩摩に出懸けたとや天正八年に態々伴  
と述べて居る。之によればシサエルの薩摩を去つたのは退を命ぜられたのでなく、布教の成績  
を見て、更に百レケを距てたる平戸と稱する地に移ることになつた。

廿九日附、山口發の書翰の節に

天文十九年九月平戸に到着した。コスモ・デ・トルマスは翌千五百五十二年(天文二十一年)九月  
城であるといふ説があるが不明である(に立寄つて多少の收穫を得たる後、川内河口から舟に乘つて、  
はコスモ・デ・トルマス等を従へて鹿兒島を發し、川内の方面に向つて進み、途中イカノ殿の城(市來

家の先代大村純前には庶長子貴明といふものがあつたにも拘はらず、之を出して後藤氏を繼承かしめた。對し奉りて最早黙止すべきにあらざると憤慨するものが多かつた。ところが、是に至つては主家の歴代の尊靈に對した。老臣等の内には早くから純忠の舉動を快とせぬものもあつた。ところが、大村家の歴代の尊靈に至く之を破するの方針をとり、永祿六年の于蘭の益の時には大村家の歴代の尊靈をも之を火中に投するに至つた。爾來純忠は痛く基督教に心疼して絶對的に他宗教を排斥し、神佛の像などは布教の際害物として悉く破した。純忠は遂に重臣五十二人と共に、トマスから洗禮を受け、教名をトマスと稱した。純忠はこの有様を見て大に喜び、しばし横瀬浦に遊んでトマス等の教を受けたが、永祿六年に至り横瀬浦は俄ににぎやかな港となつた。

横濱浦は俄ににぎやかになつた。港又になつた。

横瀬浦に建てた。領地の半分を大村氏に保留したの蓋しこれが爲めであつた。横瀬浦の會堂や住宅など建築は、大村氏が森林を寄附して大に之を援助したので其後間もなく來上り、葡萄牙船も亦相踵で入津するやうになつたので、商人及び吉利支丹等が四方から集つて

横瀬浦に建てた。領地の半分を大村氏に保留したのは蓋しこれが爲であつた。のみは大村氏と教會と半分宛之を領するところとにしたとダネルスは報告して居る。是時純忠は別邸をの約の堅めた。是時大村氏は右の書面中に掲げた總ての條件を實施するところとを承諾したが大村氏が會見して牙船の船長に説き、平戸を去つて横瀬浦に移らしめ、已も亦親しく横瀬浦に至り、大村氏と會見して葡萄牙村に派遣し、大村氏と談判して各種の準備を整へしめ、尋で自ら平戸に赴いて其の頃渡來した葡萄牙

に歸し、葡萄牙貿易は遂に大村領内に奪はるゝことになつた。

## 第二章 横瀬浦の葡萄牙貿易

大村侯大村純忠は夙に葡萄牙船をその領内に誘致せんとするの志があつたが、永祿四年(千五百六十二年)に至り、平戸に一大不詳事件が起り、葡萄牙の商人や宣教師などが松浦氏に對して大反感を懷くやうになつたといふ情報に接したので、同年の冬、書を豊後なる耶蘇會長モスコ・デ・アルマスに送り、之に喰はすに利を以てして、葡萄牙船の誘招を試みた。千五百六十二年(永祿五年)十月十五日送附アルマス・デ・アルマス・ガルシアス・アルマス・ガルシアス・ガルシアス横瀬浦を經て大村純忠は尊師がアルマソ一人を大村に遣はして眞の神の道を傳へしめられんと希望する。若し此願叶ふに於てはすは數ヶ所に會堂を建て、その經費に充てん爲めに、横瀬浦と其の周圍二レクアルマス・デ・アルマス・ガルシアス・ガルシアス・ガルシアス横瀬浦を經て大村純忠は尊師がアルマソ一人を大村に遣はして眞の神の道を傳へしめられんと希望する。若し此願叶ふに於てはすは數ヶ所に會堂を建て、その經費に充てん爲めに、横瀬浦と其の周圍二レクアルマス・デ・アルマス・ガルシアス・ガルシアス・ガルシアス横瀬浦を經て大村純忠は尊師がアルマソ一人を大村に遣はして眞の神の道を傳へしめられんと希望する。若し此願叶ふに於てはすは數ヶ所に會堂を建て、その經費に充てん爲めに、横瀬浦と其の周圍二レク



葡牙商船は實は立派に武裝した軍艦で、殊に海戦にはなれて居たので、平戸の水軍は遂に二百六七十試みた。然るにペレウラは頑として之に應ぜず、遂に干戈を以て相見ゆることになつたが、當時の葡はめした。松浦隆信は之を見て大に怒り、兵船五十隻に命じて之を追ふて平戸につれ還らしめんと向。タタは書面をペレウラに送つて松浦氏の背信行爲を告げ、俄に方向を轉じて大村領なる福田港に向。コ・ペレウラの船長たる一隻の葡牙商船が平戸港外に來たので、バード・ル・サル・ザ・ダ・マ・ソ・永禄八年には聖像侮辱事件などがあつて、宣教師等の松浦氏の宣教師等に對する態度は依然として頗る冷淡なりしのみならず、津するところになつた。然るに松浦氏の宣教師等に對する態度は依然として頗る冷淡なりしのみならず、津するところになつた。宣教師等は對して、葡牙商船は再び平戸に入

横瀬浦全滅後大村領内では吉利支丹反對黨の勢力が甚盛であつたので、葡牙商船は再び平戸に入

ゐられて、葡牙商船は再び大村領内に入津することになつた。

忠が漸次その勢力を恢復するに及び、彼が多葡牙商人や宣教師などに對して盡した所の好意が報酬

右の如き有様であつたから、其後葡牙船は心ならずも一時平戸に入津することになつた。併し純

は、純忠の身邊が甚危険であつたからであつた。

も大村領内の布教は之を斷念するの外はなかつた。何となれば若し宣教師が大村領内に踏入に於て



吉利支丹反對の氣運は其後尙ほ久しく領内に横溢して、永祿八年に至るまでは、コスモ・テ・ラ・トルマス其後父有馬晴純の來援によつて重圍を脱し漸次反徒を鎮定することから出来るやうになつたけれども、宣教師や葡萄牙人などは皆葡萄牙船によつて難を他に避けた。

出來上つたばかりの會堂は勿論、軒をならべた商家なども皆一一朝にして烏有に歸し、トルマス以下の出來上つた隊は勝に乘して横瀬浦に至り火を放つて之を燒いた。是に於てトルマス等は努力によつて反徒から起つて施すに策なく僅に身を以て運れた。

内から然るにトルマスは故あつた純忠の招に應じなかつた爲めに幸に其難を免れたが、純忠は事俄になつた。之を殺し、一手は直に大村城下迫り、純忠を幽閉し、貴明を擁せんとするが陰謀の筋書であつた。トルマスは大村に招かめ、兵を二手に分ち、一手は横瀬浦道に出で、トルマス来るを待ち、トルマスは永祿六年（千五百六十六年）八月十七日を以て愈決行せられた。先づ純忠にすゝめてコスモ・テ・ラ・トルマスを企つてゐた。

を擁立し、コスモ・テ・ラ・トルマスを殺して基督教の宣傳を防止せんとするの陰謀を企つてゐた。特に深くしめた。是に於て吉利支丹反對黨と貴明擁護黨とは直に同盟を作り、純忠を廢して、貴明を特有馬晴純の第二子をして以て入つて大村家の正統を嗣いだしたのであつたことが、老臣等の反感をして



鎮靜して平和に復歸してある。

を得、その敵は商船がその港に入津せざるが爲めに大なる損失を蒙つた。かくして大村領内は漸次  
シ、ペルトヲヲマヲ助けんことを欲して其所領せる定航商船が、本年支那から來たが、葡萄牙人等は  
（中略）シ、ペルトヲヲマヲ以て彼を保護し給ひ、彼をして再び彼の船長たるシ、ペルトヲヲマヲ助けんことを欲して其所領せる定航商船が、本年支那から來たが、葡萄牙人等は  
別の恩惠を以て彼を保護し給ひ、彼をして再び彼の船長たるシ、ペルトヲヲマヲ助けんことを欲して其所領せる定航商船が、本年支那から來たが、葡萄牙人等は  
特別の恩惠を以て彼を保護し給ひ、彼をして再び彼の船長たるシ、ペルトヲヲマヲ助けんことを欲して其所領せる定航商船が、本年支那から來たが、葡萄牙人等は  
別

一五五八年(永祿八年)十月廿二日、福田發の書面で左の通り報告して居る。

ト等々を福田に遣はし、尋でイルワルン・ルイ・ス・ギルイグをして大村を訪せしめた。フイグイレド  
是に至つて葡萄牙船が福田に入津するやうになつたので、バード・ペルヨール・ヂ・フイグイレ  
去りながらイルマスは宣教師の派遣のことは却つて反亂の因たらんことを恐れて之に應じなかつたが、  
祈禱を乞ふことを怠らなかつたのみならず、宣教師の派遣を乞ふたことも亦一再止まらなかつた。  
非常な逆境時代にも善くその信仰を保持し、絶えず音信をコスモ・ヂ・トルスに通じて彼のため  
を収むることを得てその勢力を恢復し、内爲めに漸次鎮定するに至つた。是より先、大村純忠は益  
かゝって葡萄牙商船が入津することになつた爲めに、大村純忠は大なる利益を得た。



村の形勢はトルスマスに對して尙頗る不利であつて、その大村滯留が却つて反亂の因となさんとしたのが、かくして永祿十一年からモスコ・デ・トルスマスは會堂を大村に建て、布教することになつたが、大で一同も之に賛成した。そして共に之を乞ふたので師は遂に大村に留ることになつた。

に滯留せられんことを乞ひ、會堂の敷地をも寄附したいと思ふが、汝等の意見は如何。「と諦めた村を訪れた。師は直に福田に歸還せらるる豫定のやうであるけれども、余は汝等と共に長く大村を聞き、モスコ・デ・トルスマスは師は余が過日師を福田に訪問した答禮の爲め、此度當地に來訪を聞き、モスコ・デ・トルスマスが福田を經て大村にトルスマスを訪問するや、トルスマスは評議と推すべきである。

注意を拂つたことが記載してあるのを見れば、大村の吉利支丹反對黨の勢力は尙ほ相當かつたもの、に明記する所であるが、併し同書中に左記の如く、純忠がトルスマスを大村に留むるに就いて細心の六十九年（永祿二十二年）八月十五日附日本發、氏名不詳の「葡萄牙人より本國の耶穌會に送つた手紙」は自ら大村に純忠を訪問し、遂に留つて會堂を建て布教に従事することになつた。それは千五百一十一年には大村の町でも布教することが出来るやうになつたと見えて、同年モスコ・デ・トルスマスに受けつゝある。

を持續して好まき生活の模範と爲し、此附近に數ヶ所の小村があるが、これにも多數









①頃から葡萄牙船が長崎に入津し、之は如何なる史料に據つたものであらうか。







を長崎まで廻航して堂々に見送つたかと思はる。そして一國の主たる大村純忠が態々之を長崎に送りしめ、葡商人等の之に随伴したものゝ相當かつたことは思ふに過ぐることがある。或は態々葡船葡ける基督教の柱石たるド・ペルトラウを初めて訪問するといふのであるから、宣教師等は勿論葡人の葡萄牙商人が之に隨行したことが當時の報告に見えて居る。況して此度は新來の長老が日本に於てモ・デ・トルマスが横瀬全滅の後初めて福田を経て純忠を大村に訪問した時には、宣教師等は勿論多めた。此時カブラハは何れ舟で來たか、又何人が之に隨伴したか不明である。併し去歲十一年、スコス忠即ド・ペルトラウを訪せんが爲めであつた。大村純忠は之を長崎に出迎え懇に遠來の勞を慰めて出發したる後、福田を経りて長崎に渡來した。それは日本に於ける基督教の柱石とも稱すべき大村純忠（こ）でカブラハは全國の宣教師を志岐に集めて協議する所があつたが、宣教師等が各その任地向つて出發したる後、福田を経りて長崎に渡來し、病を接し、報の報に接し、病を推して志岐に至り、萬事をカブラハに引繼いた。

この時モ・デ・トルマスが其の後任として天草の志岐に渡來した。當時モ・デ・トルマスの志があつて度々後任者の渡來を請求したのであつたが、元龜元年（千五百七十七年）の六月に至り耶蘇會の志が耶蘇會長老コ・モ・デ・トルマスの上になく、多年過勞した結果、痛く老衰したので、風に退隱す。





る爲めである。そして余は之を行ふにうつき懸念すべく、寧ろ之を行ふてテマス畏れ敬な  
思はるゝを以て、彼等洗禮を受けしめんことを決心した。是れが爲め、又彼等の救の爲めに適當な  
つたが、是に至りて家人を集め、又領内にも争鬭の起ること恐れて、時機のを待つ居たのであ  
主及び臣下が我聖教のこと解せずして、其歸依すること反對したで、ペルトラマサは  
目せし所であつたからである。ペルトラマサの家人が此の如く洗禮を受けざりしは隣國の領  
それは其の母が異教徒であつて、その嗣子、夫人及び女子も未だ洗禮を受けざることが諸人の注  
ポシキリタムは其の家人の教化に関するところに就き考慮せし既に七ヶ月内外に及んだ。  
他多數のキリシタン等は共に大村の町に赴き、ペルトラマサを訪問した。(中略)

バブラザル・ダコスタ、バルザル・ヘスノ、両バードレヴィアル・ポシタル・ダスマイグ、其  
町でペルトラマサに出會ふた。(中略)ペルトラマサが大村に歸りたる後、カブラルは  
使を出すことに於ても、亦自訪問する事に於ても、悉くカブラルに先にした。カブラルは長崎の  
ラルは當地からペン・ペルトラマサを訪問して敬意を表する筈であつたが、ペルトラマサは挨拶の  
ルは宣教師等各々其任地に向つて出發したる後、商船の碇泊する當港(福田)に來た。(中略)カブラ

此港と附近の一ヶ所（この一ヶ所といふが茂木を指すものなることは千五百八十八年二月廿日頃ル第二）教會（は海港長崎に在るが、ポル・ポルトラクスは本會から受けた利益の大なるを認め、貴翰の一節に左の文句がある。

寄附したことは、千五百八十年（天正八年）十月廿日附、ポル・ポルトラクスから耶穌會總長宛の羅馬法皇領に出顯したか如き奇觀を呈するに至つた。長崎及び茂木の地上權を、大村純忠が耶穌會の二年の頃には浦上の地上權をも獲得したので、遂に政の實權を握ることとなり、日本帝國の一一部に精神の支配者であつたが、天正八年（千五百八十年）に至りては長崎及び茂木の地上權を得、同二十二年の如き有様であつたから、長崎に於ける耶穌會の宣教師等は開港の當初からその住民に對してはやうに思はる。

されば長崎開港の當時來り集つた人々も總て吉利支丹であつたことと斷定してても敢て過言ではあるまい。い町に（<sup>長崎</sup>）即（<sup>長崎</sup>）は、迫害を受けた吉利支丹が多く移住して來たので、本年多數の人口を得た「である。すべし理由がある。加之元龜二年のイヌ・ミケル・バスの報告書には「ポル・ポルトラクス」の新定地方の民が重に移住し來つたのであるから、その大部分は移住前已に吉利支丹であつたものと推定し得る如く、島原、平戸、横瀬浦などいふが如き、鳳に葡萄牙船が出入して、基督教が宣傳せられた六ヶ町が出來て、其翌年から長崎は葡萄牙船の貿易港となつたが、この新なる町には、町名でも推知

に萬歲町と改稱、大村町、外浦町、平戸町、文知町、横瀨浦町、後平戸町合併に併合する。

元龜元年（千五百七十九年）には今の長崎縣廳附近の高臺に六區の市街地が劃せられ、島原町（明治五年から、長崎の元來の住民は開港前に已に皆吉利支丹となつて居たもの考へらる。）

造してトマス・オス・サントマス寺を建て、附近の佛寺は總て信徒等が破壊したといふのである。

二十年（千五百九十九年）にはザイレラが千五百人の信者を得て之に洗禮を授け、領主から貰つた佛寺を改

祿十年の冬、長崎に於ては名譽の地位にあるもの一同が五百人の平民と共に基督教に歸依し、永祿十

始めて基督教の福音に接したの永祿十年であつた。そして第四章及び第五章に於て述へたる如く永

大村純忠と共に横瀨浦で洗禮を受けた二十五人の重臣の一人であつたかも知ぬが、長崎の住民が

の命によつて初めて此に布教した時、已に基督教者であつたといふのであるから、或は永祿六年

## 第八章 耶蘇會の全盛期と三侯使節の渡歐

た。

着いた。この港にはは虐待せられて放逐された吉利支丹等が來り集まつたので、本年多數の人口を得

時節到來して支那から商船とジャシク船一隻が、長崎と稱するポル・ベトラマウの新しい港に



事なきを得たといふことが、次に述ふる如く伴天連等の報告書にも見えて出る。

従つて舊領安堵の御墨附を頂戴した吾々から之を沒收せらるべき理由がないといふことを陳情して、寄附した譯でないから伴天連退去の今日に於ては、地上權も當然主權に復歸したものと認むべきで、領地權を」として、大村、有馬の二氏はこの事情を申立て、伴天連に寄附したの地上權のみで、長崎を沒收せ

説ではあるまいか。現に天正五年六月九日、秀吉が伴天連放令を出すと同時に、長崎を沒收せ

ら、長崎を耶蘇會に寄進したとあつては、御家の爲めに良くないか、考へざるやうになつてか

あつたに於てをやである。この抵當流の説は、徳川幕府が吉利支丹禁の方針をとるやうになつて

ルスガ純忠の安全と利益の爲めに常に細心の注意を拂ひつゝあつたことは、前章にも述べた通りで

ない所である。況して耶蘇會長老コスモ・テ・ルスと大村純忠とは非常に親密なる間柄で、

の高僧等が、彼等の最も賤める猶太人等しき強慾非道の行まで敢へて長崎を奪つたとは考へ得

何に「目的」の爲めには手段を選ばず」とは耶蘇會のモットーであつたにしても、清貧を誓へる耶蘇會

の頃或は五十五年遂に心ならずも之を耶蘇會に割譲した。是れが從來の傳説である。併しなが

債鬼等の横暴を怒つたけれども彼も兄弟、有馬、義貞が其の間に斡旋して大に調停を試みたので、天正元年

び、之を返却すること能はざればその擔保たる長崎其他の土地を提せよと迫つた。大村純忠は大に

めたので甚左門は遂に債鬼の難を時津津に避けた。それから宣教師は直接大村純忠に對して嚴談及



た爲めに、延期を請ひしに、耶蘇會の宣教師等は布教資金なればとて之を許さず、督促頗る嚴重を極  
た爲めに、延期を請ひしに、耶蘇會の宣教師等は布教資金なればとて之を許さず、督促頗る嚴重を極  
所を擔保として耶蘇會から巨額の金銭を借用せしめた。然るに期に至つて之を償するが餘力が無かつ  
年打續きたる戦亂の結果、財政上頗る不如意であつたので、長崎基左門をして長崎及び附近の三ヶ  
長崎の傳説には長崎が耶蘇會の知行となつた由來を次の如く云つて居る。開港の當初大村純忠は多  
ふ長崎に程遠からぬ地を我等に寄附した。

を得たるのみならず、尙ほ進んで古賀其他の數城をも回收したる際、豫ての立願によりて浦上とい  
有馬の王は龍造寺氏に對して勝利を得て、敵が高來領内に占領しつゝあつた土地を回收すること  
附の年月は天正二十二、三年頃であつたに相違ない。

正十二年に有馬氏が島津義久の援兵を得て、龍造寺隆信を島原に殺した時を指すに相違ないから、寄  
しこの手紙ではその寄附の年月は分らぬが、有馬氏が龍造寺氏に對して大勝利を得た時と云へば、天  
津佐發、ルイス、フロイスより耶蘇會總長宛の書翰の左の一節によつて之を知ることが出来る。併  
浦上を有馬家から耶蘇會に寄附したことを就ては、千五百八十九年（天正十七年）二月廿四日附、加  
るといふであつた。

るや大に満足の意を表した。但し此港に入津する船々と商品とに課する税金は之を大村氏に保留す  
イ・フロイスより耶蘇會總長宛の書翰によつて明である。（とを本會に寄附し、本會が之を受納す

反對するや、之を主<sup>キリヤ</sup>に轉勤せしめ、エコエリを以てその後任となし、同年先づ有馬に宗敎學校を開く。人の如き傲慢なる民族に高等敎育を施すに於ては遂に御すべからざるに至るべしとて、大に之に當らしめざるべからずとなし、日本に宗敎的高等敎育機關設置の必要を主張し、長老カブラルが日教師會議を開き、日本布教方法の大方針を議し、日本の布敎は日本の事情に精通せる日本人をして之に師會談を請ふこととし、日本布教の推進に日本祝敎官として渡來し、津に宣

、耶蘇會本部などが出來たのは開港後間もないことではなかつたか。  
在地にあつたところを稱せらるるサンジュアン、パレンプ、マサタマ寺や今の長崎縣廳所在地附近にあつたところ云はる。あつたから、其の他の會堂や慈善院なども早くから出來たかと思はるが、少くとも本蓮寺の所で長崎に於ける基督教の勢は右の如く甚盛で、トマス・オ・サント・マスの寺の如きは開港前に出來たので存<sup>在</sup>を許したといふことは決してあり得べからざる所である。

の地方の實例でも明であるから、耶蘇會の知行となつた長崎、浦上、茂木の三村内に神社佛閣などとして、當時の宣敎師等他の宗派は全く絶對的で、神社佛閣など存在を許さなかつたことは、他等が長崎内の寺院を悉く破壊したなどがないが、既に通過であつたからである。ままたなんな記録が無いに、佛教寺院をガスパル・サイレイに寄贈して之を會堂に改造せしめたことや、同年、長崎の吉利支丹あるのか、長崎の領主長崎甚左エ門が開港以前から既に基督教を奉じし、永祿二十二年(千五百九十六年)

て領内に宣傳せしめ、總ての佛寺を基督教の會堂に變更せしめたことではウツセーなどの傳ふる所でして、自今領内には一人も異教徒の存在を許さざる旨を宣言し、基督教傳道隊を組織し護衛兵を附し再び盛に之を實行し、天正二年(千五百七十四年)に至つては、正月元旦賀の爲めに參殿した人々に對佛像を破却燒棄したが、永祿六年の反亂後は一時之を憚らんとせざるやうであるけれども、二年の頃から所である。何となれば、大村純忠は永祿五年(千五百六十二年)の頃から已に盛に神社間を破壊し、神も、天正以後特に天正八年以後に長崎に神社や佛閣の存在が許されたといふことは殆く信ずからざる、神通寺は慶長十七年(井氏譜に長崎は慶長十七年に天正二年とす)、同じく吉利支丹の爲めに燒かれたとあるけれども、公園内にあった神宮寺は天正九年(長崎圖説に慶長十七年に天正二年とす)、吉利支丹の爲めに燒かれ、岩屋山つたとすれば、それ位の迫害を受けたことは事實であつたに相違ない。去りながら長崎の傳説に今の誤課せられたとあるが、その頃長崎に異教徒があつたといふことが已に疑問であるけれども、若しあ基督教に歸依すべく強要せられ、之に従はざるものは領外に退去を命ぜられ、尙ほ従はざれば體刑を在住を許さなかつたことは想像するに餘りある所である。長崎の從來の傳説では此頃長崎の住民は皆の政教の實權が悉く耶穌宣教師等の手に移つた以上、耶穌會の知行内に神社佛閣は勿論、異教徒の年(千五百八十年)の頃長崎は大村家から耶穌會に寄贈せられた。長崎が一旦耶穌會の知行となり、その内部の事情はさうであつたか、之を詳にすることは出来ぬけれども、表面上に於ては、天正



を發して、宣教師等に二十日間を限りて退去すべきを命ずると同時に、コリエリヨに對しても亦詰問した秀吉が如何で斯かる屈辱を甘受すべきや。彼は烈火の如くに怒つた。そして直に左記の如き嚴命果その事實を確めた。勿論であつた。然るに六十餘州を統一して、將に武威を四隣州に輝かさんと期しつつあつた持たなかつたのは勿論であつた。然るに遠く長崎の實狀を告ぐるものがあつた。そして調査の結果謁するや、大に喜んで之を引見し、懇う遠來の勞を慰めた。當時彼が基督教に對して何等の反感を感ずるや、彼は之に就いては何等知る所がなかつたので、耶蘇會長コリエリヨが博多に赴いて秀吉が初め、大望をいだき、大望を博多に移した頃の長崎の輸出の盛なりたる如き狀態にあつた。去りた。天正十五年秀吉九州を征して之を統一し、大宰府に於て諸大名の封土を定め、同年六月心に征韓の心を生したと稱せられた程であつたけれども、誰一人として之に制裁を加ふるものもなかつた。

葡萄牙の商人等は盛に我が同胞を奴隸として海外に輸出し、其の輸出の盛なるコリエリヨの相場に狂會の宣教師等が政教の實權を握つて、我帝國の一部に羅馬法皇領が出現したかの如き奇觀を呈し、葡據して互に於ける耶蘇會全盛期に於ては、我國は尙ほ戰國の時代で、殊に九州の如きは、群雄各地に割



教の大敵たるべき運命を有したる豊臣秀吉が天下の實權を握るこゝになつた。  
行の長崎出發後、六ヶ月には、中央に本能寺の變があつて、織田信長が非命の死を遂げ、將來基督  
利支丹大名の熱心に之を獎勵するありて、基督教の勢は正に旭日中天の觀があつたが、遣歐使一  
には織田信長の西教に多大の同情を寄するあり、九州では大友宗麟、大村純忠、有馬晴信等の如き吉  
丹等の數はとて夥しいもので、長崎町の賑は前古未曾有であつたかと思はる。是時に當り中央  
であつたから、親族縁者の見送りには云ふに及ばず、之を見送らなかり、歐羅巴といふ異域の地に旅立せんとする  
が爲めに、萬里の波濤を冒してまた日本人の足跡になき歐羅巴といふ異域の地に旅立せんとする  
も亦皆十六歳以下の貴公子の身を以て、現世の神と仰ぐ羅馬のバツ尊者に拜謁の目的を達せん  
下四人の正副使節を載せて長崎を出帆した。四人の正副使節中、伊藤滿所は當年僅に十三歳、その他  
其の正月卅日に葡萄牙船「ニヤ・ス・リマ」が、大友、有馬三吉利支丹大名の使節たる伊藤滿所以  
天正十年には「レキペン・フロ・ニヤ・ニー」の勸めに依つて羅馬に使節派遣のこゝと決行せられ、  
證を得ないこゝとを遺憾とする。

書の印刷などをやつた長崎のコレジオなど、この頃設立せられたものでないかと思はるが、まだ傍  
であるから、その頃長崎にも何かの宗教教育の機關が設けられた筈であるので、後に至り盛に宗教圖  
き、同八年豊後に、同九年安土に、並にセミナリヨを設け、大宗教教育に努めたことは周知の事實

然るにユエリヨの熱心なる解禁運動もその効なく猶豫期もいつしか過ぎるつたので、更に有馬領内  
の至るを待つこととなつた。

手田、毛利(秀包)、有馬諸氏の如き熱心なる吉利支丹大名の領内に潜伏して、密に傳道に従事し、時  
俱ある行動を避けて、神が秀吉の思想を變化し給はんとを熱心に祈禱すべき旨を決議し、大村、體  
を議し、猶豫期限中は悉く會堂を閉ちて公然宗務をせざるは勿論、成るべく吉の怒を挑するの  
耶蘇會の長老ユエリヨはかく六ヶ月間猶豫の許可を得たので、宣教師會議を平戸に開いて善後策  
を受けて居たこととて、その理に服したるは昨年報告した通りであつた。

今日に於ては領土權は勿論使用權も我等の有なりと主張したので、彼人等は當時稍ある命令を  
その領内に居せる天連等使用權を讓與したるは事實なるも、關白卿が彼等を放逐せられたる  
村の領主はこの財産を収せしかば爲めに來りたる人々に對し、この地は我等の世襲財産なり、故に  
今我等に對しこの迫害起るや、關白殿は直にこの三ヶヶ所を占する爲め人を派遣した。有馬及び大  
村の事勸諭の一節に當時の事情を左の如く述べて居る。<sup>關白卿の御手紙</sup>

一の時そのまゝに差置かれた。千五百八十九年(天正十七年)二月廿四日附、加津佐發、ルイス・フロ  
上權のかなれば、吉利支丹伴天連去の後は、地上に權も亦當然舊主に復歸すべきなりと主張した  
有馬の二氏が長崎、浦上、茂木の三ヶヶ所を耶蘇會に寄附した時の事情を具陳し、その寄附したるは地

こが出來た。是時秀吉は人を長崎に遣はして伴天連の知行たりし長崎を歿せんとした。併し大村  
んと試みしもの効が無かつたので便なきを理由として伴天連の日本退去を僅に六ヶ月延期する  
右の嚴命を發するや、コエリヨは大に驚き秀吉の左右なる吉利支丹大名にすがつてその怒を緩和せ

天正十五年六月十九日

已上

しからず候條可成其意事

一、自今以後佛法のまじけを不成輩は商人之儀は不及申いづれにてともきりしたん國より往還くる

天連に不謂族中懸もの有之は曲事たるべき事

條伴天連儀日本之地にはおかせられ間敷候間今日より廿日之間に用意仕可歸國候其中に下々作

一、伴天連其知惠之法を以心さし次第に檀那を持候と被思へば如右日域之佛法を相破事曲候

座之事候天下より御法度を相守諸事可得其意處々として猥曲事

一、其國郡之者々近付門徒になし神社佛閣を打破らせ前代未聞國郡在所知行等給人に被下儀者當

一、日本は神國たる處きりしたん國より邪法を授候儀太以可然事

定

する所があつた。時に天正十五年六月十九日であつた。

と共に來朝したか、彼は遣歐使のこのことを、始め之をを派遣した吉利支丹大名の私事とせず、天下の公事と歸着した。是時バード・レブ・アキペン・フロ・ニヤニは葡萄牙印度總督の使者として遣歐使一行に歸着した。是所は伊藤滿所等遣歐使の一行が足掛九年の歲月を旅行に費し、天正十八年七月を以て長崎に

## 第十章 三侯使節の歸朝と長崎

各地に潜伏しつゝあることは知つても別に大なる迫害を之に加ふる如き舉には出でなかつた。その服を脱して公然宗務を執ることを憤み、従つてその他宗排斥の所も餘り立たぬ様になつて以來は、その國より往還苦しからず候條其の意を成すべき事「事とあるにても明である。さば秀吉は宣教師等が法なかつたことは「自今以後佛法を爲さる輩は商人之儀は申すに及ばず、何にてもきりしたんでし、絶對的に神佛二教を排斥せるを怒つた爲であつて、後の徳川時代の禁令の如く絶對的なもので、併し秀吉の禁教の動機も亦、その禁令中にも明記せる如く、宣教師等が長崎に於て神佛閣を破壊くその影を潜められたるも、その宣傳振りは益熱烈を極めたので、布教の成績は却つて良好であつた。傳道に盡瘁せんことを誓つた。かくて天正十五年六月以來各會堂は閉鎖せられ、制装せる宣教師は悉く是歲宣教師等は再び有馬領内に集會し、各自殉教の決心を以て日本に留り最後に信者を保護して彈守を指すことには勿論である。



右の書簡中龍造寺の子であるは、隆信の實政家にならずして、隆信の所領の後繼者たりし鍋島飛  
た。

に關白殿を憤らしめたので、關白殿は此等の地を我等及び大村、有馬の領主より歿收して彼に與へ  
今年には龍造寺の子、關白殿に多額の贈物を爲すと同時に、我等のことに就き種々訴ふる所あつて大  
耶蘇會總長宛の書翰の一節に左の通り報告して居る。

官任に就いた。此時の事情を千五百八十九年（天正十六年）一月廿四日附加津佐發、ルイス・フロイスより  
長崎を歿收して公領を爲し、佐賀の鍋島侯爵家の祖鍋島飛騨守信生（後加賀守重茂）を以て長崎の代  
を奏せざりしを以て、秀吉は大に怒り、先づ近畿會堂二十二ヶ所を毀ち、淺野長政を長崎に遣はし、  
かくて天連放の命令は吉利支丹大名等の堅き決心によつて、全く其の効力  
港に遊學の目的を以て旅行するのみであつた。

たりと屈出でた。然るもその若干名といふも實は僅に三名で、而かも皆祭司の資格を得んが爲めに憚  
と能はざれば、先づ十人を入を退去せしめ、殘餘の送還は之を來年に延期する已を得ざることとなり  
べく秘密に之を行はんと申合せ、秀吉の怒を挑發せざらんが爲めに、法服を脱して各地に潜伏し、その傳道も成る  
去りながら成るべく宣教師會議を開き、各自殉教の決心を以て日本に留りに、陰に陽に信者を保護すべしと決議した。

むるゝとに決心したが、宣教師等の大部分は小西行長の指揮によつて其の所領たる天草に逃れた。鳥

重に取締りその宣傳を防止せんことを試みたので、吉利支丹大名等は宣教師を各領内に避難せしが、果して葡萄牙印東の總督の使節たるやつに就いても疑問とすべし二氏の事情を具申し、且つ再び宣教師等

公然之に出入するやうになつたといはれて居る。

ひその活動を開始したか、殊に長崎に於ては曾益は極分發布、又空襲に開いた、吉刺支母等は治

大名家士庶人の之を訪問して基督の福音を聴くもの多かつた。そこで各地方に傳道士を遣はし、宣教師も亦毎

かゝるアフリカには、二、三の幕府の行は各地方を巡訪し、自ら入可にも面して談話するところから出て来たのである。

らゝの贈物を交付して、天皇の勅令を奉り、

間平戸に立寄つて之を慰め、  
 父純忠の贈物を交付し、  
 最に大友義統を訪問して  
 同達し、  
 大村純忠の女(な)を訪問  
 大村純忠の女(な)を訪問

て許されないので、随員中、ススキタ一人を京都に留め置き、遣歐使の一同行と共に京都を發し、途中先づ、

秀吉の京都に歸着するや、ワリニヤニハ先づ長崎に歸つて秀吉の答書の成るを寺に二とてを寄

の人民を棄教に歸來せしめんことをめつた。「吉利支母大名」の署名は、書いて居る。

等の基督教に關する談話は、大に聽者を感動せしめ、宗義智の如きは密に洗禮を受け、歸封の上は全島を、その説話を聽き又その齋する所の地圖其他の珍品を見て大に啓發する所があつた。就中伊藤滿所赴いて不在となつたので、諸大名等は何憚る所なく伊藤以下の新歸朝者やワリニヤニヤなど面會したので、ワリニヤニヤは暫らく京都に留るゝことになつた。然るに其後間もなく秀吉はその生地中村に是時秀吉はワリニヤニヤに向つて、己の返信が出来るまでの間に、その好む所に滞在することを得た。樂の第に迎へ、伊藤滿所など秀吉の面前で旅行中の視察を試み、ことを得るの光榮に浴した。會した。一行はその後接待掛なる増田長盛に迎へられ、京都に入つたが、秀吉は盛儀を設けて之を聚如きは、一行が室ノ津を通するのを待て之に面會し、大阪では高山右近が密に來りて一行に面會した。一行が東上の途に就いた頃には賀正の爲めに京都に赴き、ある大名が多かつたので、途中でワリニヤニヤ等を訪問するものも多かつたが、毛利輝元、黒田長政、大友義統及び島の宗義智の爲すことを希望したので、來著早々秀吉に向つてその到着を届出た。併し時恰も小田原役の最中

上京の途に着いた。

が自ら病氣に罹つて更にその東上が遅れ、天正十八年の十二月に至つて、始めて一行は長崎を出發してあつたので、ワリニヤニヤは暫らく出發を見合せたが、秀吉の歸洛するに及びては、ワリニヤニヤ



請ふて許された。それから一一行は秀吉の許可を得て京都に赴いたが、京都では彼等が清貧に甘んじ、かつたので、船長を本國に還して請訓し、その返事の来るまでは人質となつて日本に留まらんとすることを渡來した。此一行の秀吉に名護屋に謁するや、秀吉の要求が餘りに重大で之に即答することが出来なて九十九年（一六〇三年）三月に會合のバード・ロバ・マスチア等が比律實太守の第二回の使節として長崎郊外の稅務などを掌らしむることとし、村山等安を以て初代長崎代官に任じ、文祿二年（一六〇五年）に鍋島氏の長崎代官を罷め、寺澤志摩守廣高を長崎のこゝのみに關係させて置く譯にも行かなかつた爲めに、同年就いては鍋島氏の如き大諸侯を長崎のこゝのみに關係させて置く譯にも行かなかつた爲めに、同年の心を悩ましたので、長崎の事などは餘り深く注意せられなかつたらしい。そして征韓の大軍を起すの相踵に至り、天下の人心を此方面に引つけたと全時に、七月には大政所として征去があつた痛く秀吉が大軍を起した當年で、四月には京城が陥り、七月には朝鮮の王子を捕虜と爲したといふやうな吉報の右に述べた如く、文祿元年（一六〇五年）には種々の大事件があつたけれども、時も秀吉が征韓の苦しい暗闘が彼等の間につづけられた。

る禍事を及ぼしたけれども、彼等は尚ほ之を悟らざりしにや、慶長十九年大追放の最後の瞬間まで見その後益々激烈になつて、互にその短所と横暴振りとを事實以上に暴露して基督教全體に大なる秀吉の怒を挑發せんと試みた。かくして西班牙派の教團と葡萄牙派の教團の暗闘が始つた。此暗闘は







長崎奉行寺澤志摩守が秀吉に上申して、長崎に渡來する葡萄牙人は多く浮浪無頼の徒にして、之を大なる民屋に集り、晝夜交代して四十時間祈禱を爲し、各自熱烈なる信仰を顯はした。

の間は彌撒を拜む事を公許し、信者は相互に自宅に於て通夜祈念し、又男はミゼリコルチャに女は廣歐羅巴の信者も及ばぬ程の盛大なる祭式を行ひ、長崎の外ヶ所に於て彌撒の式を舉げ、奉行も七日までも鳴り響き、新に洗禮を受けんと勇み立ち、人より人に語傳へ、竟に豊前、豊後、肥後、薩摩の諸國説教を聞かん、洗禮を行ひ、密に之を行ひつゝあつたが、京都の情報を耳にするに及んで、長崎の信者は我々も公然所に潜伏して密に之を行ひつゝあつたが、京都の情報を耳にするに及んで、長崎の信者は我々も公然所に残るものも公然説教すること、洗禮すること、洗禮を受けること、出來なかつたので、宣教師は各長崎では秀吉の禁教以來總て會堂は閉鎖せられて、ミゼリコルチャのみは慈恵院のこととして、公然説教をなし、専ら布教に勉め、幾くもなくして萬人の歸依を得て之に洗禮を授けた。で、全年十月四日聖フラシスコの祝日に開院式を舉げ爾來ミラミラから贈り來たる大釣鐘を打鳴來た。それをして全七月に又呂宋からバードレー入ルマソ二人が來着して布教を助くることになつたので之に倣つて寄附する者も多く、文祿三年八月一日には遂に落成してその献堂式を舉ぐるこゝろが出た。秀吉は歸洛の後、之に會堂を建設すべき地所を與へ、且つ建築費の内に苦干の寄附金をもなした。驚くべき克己力を以て日夜修法を怠らざること、衆人賞嘆の的となり、秀次其他名門の尊敬を受け



た。長崎奉行は途中で之を出迎たが、博多の邊から教団の足が非常に早になつたので、怪んで其ことを乞ひ、如何にして之をも去らしむるにしようかと出来なかつたので、教団の數は遂に二十六人になつて二十四人の教団は陸路長崎に護送せられ、途中二人の信徒が自ら殉難者の内に加へられんオルカチノ大にもその好意に感動して抗議を取り下げたといふことである。

オルカチノ全體に及ぼさるべきこと必せり。是れ余が小を殺して大を生さんとする所以なりと釋明したので、閣の命令を蔑視しつゝありしことを裏書するものである。この事若し太閤殿下の聽に達せんか、果を太閤の命令を蔑視しつゝありしことを裏書するに三人の耶蘇會員が在留したることを公にせんか、是明に耶蘇會員があるのみである、三成は乃ち之に答へて、耶蘇會員にして大阪に在留を許されたるはハロツグ師一人あるに抗議した。三成は乃ち之に答へて、三木の内に三木バロ以下二人の耶蘇會員があつたので、オルカチノ直に之を石田三成に於てアラシマスカソ會宣教師ヘベラロ・バ・チマス以下二十四人を捕へて之を京都の一條の獄に投じた。然るにその内三木バロ以下二人の耶蘇會員があつたので、オルカチノ直に之を石田三成に於てアラシマスカソ會宣教師ヘベラロ・バ・チマス以下二十四人を捕へて之を京都の一條の獄に投じた。是に歸疏したので、秀吉は其後宣教師の捕縛は西班牙より來りたるに限るべき命令を下した。是れんとしたたが、秀吉の左右なる小西行長、黒田如水等の如き吉利支丹大名等が大に耶蘇會員の爲めは大怒り、命じて京阪地方に在る宣教師等の居室を監視せしめ、且つ宣教師及び教徒の名稱を作らせしめた。時に慶長元年十月廿日（一五九六年九月）であつた。かく總ての宣教師等は皆將に檢舉せられ、これその大を致せる所以なりと答へた。長盛は之を聞いて大に驚き、歸りて之を復命したので、秀吉



## 第二十章 聖徒の殉教

土人を教化せしめ、然る後始めて軍隊を派遣す、故に攻めて取らざるなく、征して従はざるなし。  
なる領地を機得せしやと尋ぬるに及び、彼は不謹慎にもいと誇り顔に、我皇帝は先づ宣教師を遣はし  
あるこゝとを覺悟せざるべからずと脅した。而して長盛が西班牙王は如何なる手段を以てかゝる廣大  
土の廣大なるを誇りたる後、かゝる大國の臣民に向つて斯の如き侮を加ふる以上は、他日不測の禍  
い。それは兎に角、船長マ・ラ・グは秀吉の暴舉を怒るの餘、世界地圖を長盛に示して西班牙國の領  
に來りたるものなりと譏議した爲めであつたといふのであるけれども、未だ傍證を得な  
教師及び葡萄牙商人等で、彼等が秀吉にサ・ン・エ・リ・ノ號は漂流を名として、謀反を煽せんが爲め  
其の頃比律賓で出版されたサ・ン・エ・リ・ノ號の沒收事件の件、此の沒收事件の發頭人は耶蘇會の宣  
盛に申告した。然るに如何なる理由ありしにや、秀吉は長盛を遣はして悉くその貨物を沒收せしめた。  
會我部元親は取調の結果、同船比律賓から新西班牙へ航行中、暴風の爲めに漂着したた西班牙船で、  
慶長元年九月廿七日(一五九六年十一月十八日)、土佐國浦戸港の沖合に一隻の黒船が漂着した。國主長

ては別に迫害を加ふる如きこととはなかつた。けれども慶長三年には秀吉が再び九州に下向するといふては大に傳道に勉めつつも、表面に謹愼の態度をとつて秀吉の怒れざらんことを勉めたものに對し「す」とは彼が天正十五年の禁令於ても言明した所であつたから、耶穌會宣教師等の如く、裏面に於るが「佛は教の妨を爲さるる輩は商人の儀は申すに及ばす何れにてもきりし國より住還苦しからに述べて如くサク・ソ・フエリ事件以來秀吉の基督教に對する態度は再び嚴重になつた。去りな六聖人記念會堂である。

するることになつた。今の大浦天主堂は之を記念するが爲めに建立せられたものでその眞の稱號は二十諸國の司教を集めて、日本聖人の大儀式を行ふた。それからこの二十六人の殉教者を二十六聖人と稱人の祝日を新に公會の公曆に記載し、千八百六十二年（即文久二年）六月八日聖靈降臨の大祝日に當り、聖人が、安政の條約成り、我日本も亦廣く世界各國と交を結ぶことになつたので、羅馬法皇は日本聖に去りながら我日本が寛永以後國の方針をとつた爲めに、萬國に布告して祭典を行ふには至らなかつたが、儀に適ひ、天主の忠臣なれば、公會の風俗に由りて聖人の數に加ふべき者也。

日本殉教者廿六名の行事を審査詮議するに、公會の聖人の善徳を調ふる法律に照せば、能く教皇に寛永年中羅馬の裁判所で左の通り決定された。

典を行はしめ、尋で殉教者の原籍を調査し、その後此殉教者の位を定むることになりて就て會議を開き、遂

此處刑の情報呂宋に達するや、大司教は直に令を發して媽港、マツカ、マフ、印度等に於て大祭に處せらるものなり。

此者共呂宋の使者と詐り、日本に來り御禁制のきりうしたん宗門を弘めたる科により長崎に於て磔刑に處せらる。

刑に處せられた。處刑の場所は明確に分らないけれども長崎附近なる西坂の内であつたことは間違ないことである。死の宣告文は大略左の意味のものであつたといふのである。

此二十六人の教囚は途中恙なく長崎に着し、慶長元年十二月十九日（西九月二日）長崎に於て磔つゝ長崎に著いたといふことである。

ス・クリストと同様の刑に處せられて世を去ることを得ることをかゝ、途すがら隨喜の涙にくれた。故に此二十六人の教囚等は「我等賤しき身を以て、如何なればかく廣大なる恩恵に浴し、主を地獄に落つるの外なし」と衷心より信じて居たので、教の爲めに死するにこそは彼等の最も喜ぶ所であつた。行かずして、直にバラキ即天國に往生して無上の快樂を受け、棄教したる者はソフエ即之を論したけれども、彼等は頭として之に應じなかつた。此頃の教徒等は教の爲めに死すれば、練獄に供が加はり居るを見て不憫に思ひ、棄教せざれば直に武士に取立てゝ立派なる教育を施すべしとて、人に見え、自ら足の進むを覺ぬのであるといふのが彼等の答であつた。又長崎奉行は教囚の内に二人の兒の理由を尋ねしに、天國に往生して無上の快樂を受くるのが、一刻一刻に近づきつゝあることを思入



## 第十四章 徳川幕府の吉利支丹禁制と長崎

加へて之を五ヶ所商人と稱することになつた。

外浦町(今の縣廳所在地)に設けられた。その後寛永八年(千七百三一年)に至り、之に江戸、大阪の商人を  
堺及び長崎の商人等はまた請ふて之を引く。是から生糸は此等の商人の専賣となり、その會所が  
を脱することが出たが、翌慶長九年にも亦多量の生糸を輸入したので、前年生糸を引けた京都、  
堺及び長崎の商人等が、之を論議して之を買はしめた。かくて葡萄牙人等は辛ふじてその京都、  
なかつた。たゞ、依てて葡萄牙商人等は之を長崎奉行に愁訴したので、長崎奉行小笠原一庵は幕府の命を受け

隨意上人を有馬に遣はし、教徒教誨の事に從つて之を援助せしめた。又頃セウ・チア・マ・ソ・ウ・カ  
士を之に與へて歸國せしめ、長崎奉行と力を協せて有馬領内の吉利支丹を禁ぜしめ、別に淨土僧幡  
甲斐に流し、尋で之に死を賜ふたが、晴信の子、直純が家康の曾孫女と婚であつた爲めに有馬舊領  
の決心を發表し、先づ旗下の士に對して嚴之を禁するに至つた。是日家康は有馬晴信の獄を斷じて教  
つて、家康も亦之を面白からぬ宗旨と考ふるやうになり、慶長十七年三月廿一日に至つては遂に禁起  
秀吉薨去の後、該教の宣傳は殆ど黙計の有様であつた。然るに其後該教の爲めに不祥なる事件が屢起  
家康は爲政の初には専ら力を對外貿易の獎勵に用ゐて、基督教に對しては頗る寛大であつたので、



が甚面白からず。慶長八年の頃には葡萄牙船は長崎留二年に及んでも、猶ほ之を賣扱くことが出来た。東西兩軍の大戦等があつて、國內が疲弊しその需要が減じたので、葡萄牙船の輸入した生糸の賣行外に仰がねばならぬ。葡萄牙船は年々多くの生糸を輸入した。然るに征韓の役に引き續きて海と久しに及んだ結果各種の産業大衰へ、養蠶業の如き亦甚振はなかつた爲めに、生糸は之を海とこゝになつた。今その由來を尋ぬるに應仁の兵亂後、戦亂相續で起り、百姓その業に安ざること易であつたが、慶長九年（千六百四年）に至り生糸に對しては絲割符法と稱する一種の專賣法が行はれ、貿易の自由は代に於ける商賣の方法如何と尋ねるに、長崎に於ける對外貿易は總て初めは相自由

### 第十三章 絲割符商法と五箇所商人

校に集り、布教上にも非常に好都合であつた。

隆盛に赴き、上流社會の子弟が多く之に入學することになつた關係上、その父兄の同情がこの神學に宣教師等は各地で大活動を開始した。殊に長崎には多くの教師が集つて居たので、長崎の神學校は日徳川家康に移つたが、家康は基督教をこの處置をとつたので、基督教はここに再び復活して迫害の兆が顯はれたので、教師等は多く長崎に集つた。然るに間もなく秀吉が薨して、天下の實權は風説があつたので、長崎奉行はその意を迎へたるにや、島原、天草等に在る神學校に閉鎖を命じ漸く

れた。傳ふる所によればその秘書類の内に異國の兵を案内して日本を攻めしめんとする密通の文書、に訴認が起り、家宅搜索の結果、秘蔵の箱の中から多くの秘密書類が出て、長安の罪狀が悉く露はたが、慶長十八年四月二十五日、その枉死するや、遺産分配の事から藤十郎と長安の諸妾との間つた三萬石を領した。長安は多侈に耽り、多く公金を私したけれども、存命中にはその事が露見しなかつ豆の金山から多量の金を産出した爲めに、家康の寵遇を蒙り、累進して石見守に任し、入王子に於つたが、武田氏滅亡の後には家康に事へ鑛山探掘の策を献じて用ゐられ、金山奉行に任ぜられ、伊久保右見守長安の金山奉行事件であつた。今その概要を述べ、長安も武田信玄の猿樂師は大去なりながら従來史家の傳ふる所では、家康をして吉利支丹禁制の最後の決心をなさしめたものと大たる旨を答へた。此事件は家康の吉利支丹宗門に對する感情を益々惡しめられた。

且つ、歐洲に於ても新教國に於てはその弊に堪はずして到る所既に舊教の宣教師を放逐し、西班牙、葡萄牙兩國人等の奉する吉利支丹宗、即舊教に反對して起りたる全く異宗派なる吉利支丹國にあらずやと反問したので、スペインは蘭人の奉する所を吉利支丹宗は新教と稱するも亦ツクスは更に本多上野介に面會し、國王の書面を布衍して説明を加へた。是時上野介は貴國も亦亂を起しめ、機を熟する待つて國土を奪はんとするものなりと断言した。そをして平戸商館長ハ内實は宗教の變化によりて善良なる日本臣民の間に自然に不和を起さしめ、黨派を作らしめ、終には内

其内に隣交通商は希望する所なるも、吉利支丹宗の宣傳は許しがたので節々あつた。是れ家康が護を求めつつあるたので、家康は慶長七十六年六月附を以て之に返書(二獻文又七月十八日は書簡を日千六百六十)を興へて宣教師の保



と慶長元年十二月に於ける二十六聖人の殉教の時にもあつたことで、少しも珍らしいことではない。教徒等は競ふてその遺體又は遺物を分配して持歸り、神聖なる記念物として之を崇拜した。かくて、不埒な教と考へたのは無理からぬことであつた。又有馬純命に従はざる教徒を死刑に處した時、に過ぎなかつたうけれども、宗門以外の人には、心解するに由なく、一筋に罪人を崇拜するより磔に處せられた時、教徒等は集て之を禮拜した。これは固より本人の爲めに天の救を求めたのであつた。例は慶長七十年頃、長崎の治郎兵衛といふものが官の極印なき銀塊を買取りたる罪に就いて、第三の善惡を顛倒し罪人を崇拜する教なりとの疑を起さしめた。是は、重に習慣の相違から起つた誤がその通りであつた。

第二の基督教の宣教師が神佛を誹謗排斥して之を滅絶せざれば已まざるの決心をしたことは事實村喜前に告げたとや、和蘭國王の書翰など益々この疑念を深からしめた。

滯在中に西班牙人の日本に對する領土的野望あることを探知したと公言し、尋で大村に來つて之を大民をして之を信せしめたが、伴天荒木マサカズが歐洲から歸朝の途次、マドリードに於て、彼が先づ我國に所が甚久かつた。前に述べた蘇會の長崎占領とサント・エリヤ號船長の放言とは、先づ我國第一の人民を迷はし、國を奪はんとするものなりとの疑を我國の當路者に起さしめたのは其の由來(三)



(二) 吉利支丹宗が我國の國教たる神道で佛教を絶對的に排斥し且つ誹謗する。

(一) 吉利支丹宗は邪法を以て人民を迷はし、國土を奪はんとするものなる。

是時家康がその大布令に列舉した禁教の理由は要するに左の三條であつた。

送せしめたが、京都には特に大久保忠隣を遣はし、吉利支丹寺院を毀ち、伴天連等を追放せしめた。

禁制の大布告を發表し、全國の諸大名に命じて教徒を禁壓し、宣教師其他の重なる長崎に護

かく家康は愈々禁教の必要を痛切に感じたので、慶長十八年二月、遂に全國に向つて吉利支丹

彼の復命が決して基督教の爲めに有利なるもので無かつたことは想像するに難からざる所である。

ある。復命した言葉は傳らざるも當時歐洲は宗教戦争の真最中であつたから、その慘禍を撃したる

ことであつた。西宗眞は家康の命を奉じて、慶長十四年、五年の頃宗眞を視察の爲め西洋に渡航した人

で西宗眞が三年の歳月を費して歐洲の宗教状態を視察し、歸朝して之を家康に復命したのも亦此頃の

件であつたかのように云ひ傳へらるに至つたのであると推定する人が多くなつて來た。

は軍に金山に關する不正事件であつたのを、一部の下僚の輩の憶測で、恰かも吉利支丹關係の隠謀事件

は所謂長安の金山事件といふのであつて、古來事實として信ぜられた事柄であるが、近來この事件

の遺族を死に處し、連判帳に名を連ねた大名は皆他の罪名で其所領を沒したといふところである。

一 味徒黨の連判帳及び吉利支丹宣傳の文書などがあつたので、家康は大に怒り、同年五月六日、長安



を巡訪した。その有様は實に悲壯を極め、奉行所の役人等をして大に不穩を感せしめた。

同月廿一日までの間に十度行はれ、數千の教徒が殉教者の装をなして街々を練り廻り、各吉利支丹寺に別祈禱と非常の告解を行はんと欲し、大々的の教行別を行ふた。行列は四月一日(陽曆五月九日)から

長崎では、方赦免の運動を試みられたが、長崎は一時全國から集つた宣教師等の集合所となつた。是に於て特

此等の人々は慶長十九年二月頃から相前後して長崎に到着したが、その海外追放は便船の都合上

品川右京(千五百石)柴山權兵衛(千五百石)の如き名門の士や其の家族も多かつた。

元丹波山城主内藤飛騨守忠俊如安(萬一千七百七十三州志)及(一)其子采女、前田家の家臣宇喜田久閑

敬庭等亦各地大名から長崎に護送さるゝにたつた。その内には高山右近、南坊（七元）播磨州石山（石城）の城主

に長崎に向つて出發し、同所から直に本國に歸還すべしとの命を受けたる。各地に在る宣教師や重なる

かくて禁教の令下るや、慶長十九年正月十三日、京都、大阪、伏見に在留した宣教師等は七日以内に

また、原田であつたところ、雪はぬぐへぬ所である。

禁教の理由に於いては種々の推測を下す人があつた。併しなにか一つに列擧される三ヶ條が張非人を崇敬する不母な宗旨と思はれたのであつた。

つた。此等の人々は信者の目で罪人ではなく殉教者であつたけれども、宗門以外の目から見ると時は矢



船に行達ひ、船中に作天連とおほしきものあるを認めたので、平戸に曳き來り之を松浦氏に訴へた。同年たまたまポルトガル・ジョルジエ事件が起つた。長崎志によれば元和三年に蘭船が洋中唐船造りの描て之を問はなかつた。

したので、長崎奉行は一時その處置に窮したが、遂に巨魁と認むべきも七十八人を死刑に處し他は悔改を促したので、純頼は怒つて之を殺した。そこで信徒等は憤然として蹶起し、頗る不穩の狀を呈し五日、その潜伏所を發して大村に向ひ、行々教を試みて信徒を激勵し且つ書を純頼に送つてその頼が嘗て受洗したる身を以てかへら出たるを怒り、その背信を責めんが爲めに、元和三年五月廿遂にその二人人を死刑に處した。ポルトガルのナヴァレツトとオカサチス會のジョセフ二人は速に宣教師を海外に放逐すべと命じた。依て純頼は宣教師等に退却を命じたけれども從はぬので、發した。そして翌元和三年正月旦、大村純頼(純忠の孫、享章)の登城するや、その取締の寛慢を責め、督教の爲めに集會したものの、信者の徽章を帶ふ者、又は聖像を飾る者は極刑に處すべとの命を發した。元和二年(千六百七十年)十月、二代將軍秀忠は重ねて基督教を禁制し、宣教師を止宿せしめたもの、基



の時代には日本在留の宣教師の數は家康時代よりも却つて多かつた云はるゝ位であつた。そして耶  
又は水夫などに變装して再び入國したのもあり、又新に渡來したのもあつたので、二代將軍秀忠  
とは既述の通りであつたが、その時追放を免れたものもあり、又一旦ミラマは媽港に到着の後商人  
慶長十九年に追放せられた宣教師等の内、途中から小船に乘つて内地に引還したものがあつたこ  
之を地中に埋めめた。

の五大名に傳へ、長崎の吉利支丹寺院を破壊してその祭具を燒き、金屬製の聖像等の如きものは竊に  
かくて宣教師を着せて内地に引還した。耶蘇會の宣教師數名も亦媽港の船から下つて上陸した。云々。  
に日本服を着せて内地に引還した。耶蘇會の宣教師二名並に説教師等に乗せ、之  
ら出でサレンボ・ゴ・ユ・サレンボ・ユ・サレンボ・ユ・サレンボの宣教師二名並に説教師等に乗せ、之  
十一月七、八日に一行は愈々出發した。船が海上二リークの所に達するや、小舟三艘、突然島の間に  
その夜はイサシシジに過でし、説教師は木鉢に送られ、平戸、大村の領主はその監督を命ぜられた。  
命じた。宣教師は之に従つて福田に向つて出發した。併しその日そこで行くことの出來ぬものは、  
兵衛は追放者に次の日曜日には必ず出發せよ若し船の準備が出来ずば福田に至つて出帆を待てよと  
に納めてあつた司教その他の伴天連等の遣骨を他の安全の地に移した云々。二十五日(九月廿二日)左  
祭式の器具と共に之を燒き棄てた。耶蘇會の宣教師はトドロ・スロ・サ・ス・トマス寺の會堂と外ケ一所

所にあらずしのみならず、却つて非常の光榮として之を歓迎したことは二十六聖人殉教の條に於ていふ、當時の教徒等の一般的傾向は非常に厭世的にして宗教の爲めに殺さるゝことは彼等の惡く考按し得ざる所である。然るに吉利支丹を處する場合に之を實施したのは何故であつたか火刑といふが如き慘酷なる刑罰は、その性質から見ても日本人の如き溫良なる性格の民族の決して他の傳道者等及び之を匿した家族等合計五十五人を火刑し人若くは斬罪に處した。

ニカ、ル、イ、フ、ロ、スの二伴天連と船長平山とを火刑に處し、その後三週を經て先に述べた常陳の船で渡來したと傳へらる伴天連カ、ル、イ、フ、ロ、ス等を始め久しく長崎及び大村の獄に在つた伴天連其の根を滅せざるべからずとの一大決心をなした。そこで秀忠は元和八年七月十三日先に先ハ、ロ、ト、スのかくて基督教に對する徳川幕府の警戒は益嚴重となり、遂に秀忠をして如何なる犠牲を拂ふとも之を食を忘れて之に傾聽したといふことである。

是又榭斐半右衛門が歸朝して詳に歐洲の狀況に就き復命する所があつた。彼は元和の初頃將軍秀忠が歐洲視察の爲め彼の地に派遣したのであつたが、三十年戦争の最中に親しく宗教戦争の慘禍を目撃し、宗教の國政に及ぼしたる大弊害に就きて審に復命する所があつたので、秀忠は三日三夜の間に寢あつた。

日本征服軍の先驅として派遣せられて派遣されたものとこの風説が専ら行はれたので、幕府は大に警戒する所が

ことを秘して云はなかつたが、元和七年に至り遂に之を目を白した。此頃スニガは西班牙の庶子で、ふて日本へ渡來の途中であつた。スニガの取調は嚴重を極めたけれども、彼は久しくその伴天連たる子、オササチソウの伴天連であつたが、彼は日本信者の懇請に應じ、伴天連ス・フロマスを伴つた。二人の宣教師の内一人はペトロ・スニガと云ひ、第六代の新西班牙總督サイラヤリガ侯の船中には俗人に假装した二人の宣教師が居て、その船長はジョアム・サマ・デ・平山といふ吉利支丹で、元和六年七月七日、一蘭船は英艦エリス・ス號が臺灣沖で捕獲した日本船を曳いて平戸に入津した。にも密に入國したものが六人に達したが、その内に平山スニガ事件といふがあつた。

其後も宣教師の入國が絶えぬので、徳川幕府は大に警戒して居たけれども、元和六年(千六百二十年)中爲めにかゝる不穩の書面を送つたのであらうと論断して居る。

士は當時日本を逐はれて呂宋に流浪した日本人が、不平の餘り、日本に残留せる宣教師を激せんが葡萄牙で本名をフミシヤ・ジョルジュ・エド云ひ、日本人を娶つて常陳と稱した人であつた。リス博は本が過半吉利支丹とならば通知次第の山艦を差向くべしといふのであつた。此常陳といふは森助右門といふに命じて和解せしめて和船であることであつたが、船中葡萄牙の紙が數通あつたので、平通商買の爲めに行く船であることであつたが、船中葡萄牙の紙が數通あつたので、平通商長崎奉行長谷川權六は此報に接し平戸に出張して取調へしに、泉州堺の常陳といふ者の船で、呂宋に





平戸に設け、同十八年(千八百三十三年)には英吉利東印度會社も亦商館を平戸に設けたので、我國の對外貿易に従事しつゝあつたことは既に述の通りであつたが、慶長十四年(千六百九十年)には和蘭東印度會社が商館を葡萄牙、西班牙及び支那の商船が早くから我國に渡來し、我國の商船も亦早くから盛に海外貿易に

## 第十五章 鎖國

であつた。

この不可能なることが事實の上に證據立てられた。是れ幕府が漸次鎖國の方針を取るに至つた所利支丹國の商人に自由の通商を許し置く限りには如何に採取を嚴にしても、之を絶対に防止することは不可能であつた。それ故に宣教師の輸入國を防止せんが爲めに幕府はあらゆる手段を試みたが、吉・併し如何なる方法を以て禁教を勵行したりと宣傳者の跡を絶たざる以上は禁教の目的を達すること之を用ゐないとした。

笑し、苦痛に堪へずして棄教するの已を得ざるに至らしむるの方法をとり、死刑の如きは成るべくあるには尙ほ甚だ微力であつたので幕府は其後段々と倒懸の如き非常なる苦痛を與ふる苛責の方法を去りながら其後の經驗によれば如何なる方法を用ゐても、死刑は教徒等を脅威してその信仰を棄てしめ述べた通りで、單に死刑なる死刑は彼等に對しては懲罰の目的を達することには出来なかつたであつた。





寛永二年(千六百五十五年)には島原半島の領主松倉重政が將軍家光の旨を受け、急に國老に命じて領内に航航することとを禁じた。

ソに航航することとを嚴禁し、特に吉利支丹たる日本人に對しては何れの地方たるを問はず一切海外にたる妻妾奴隸とを日本に留めて、悉く歸國せしめた。そして日本人に對しても一切今一切外人のや、幕府は之に貿易を禁じて歸國せしめ、且つ日本の各地に在る西班牙人に命を傳へ、日本人法を傳へて止まざるを以て自今通商を禁する旨を傳へて歸國せしめた。既に西班牙商船の渡す將軍家光は之を聞き、當時京都に滞在の長崎奉行長谷川權六をして之を室の津に迎へ、西班牙は邪勢の不可なるを見えて暫く鹿兒島に留つたが、翌寛永元年薩摩を發し長崎を経て上府の途に就いた。ルナポ・アヤマを使者として數千金の贈物を携へて日本に同薩摩向はしめた。一行は薩摩に上陸せし形勢の關係のみを維持せんと欲し、西班牙王フィリッポ四世の發するを名とし、司令官ポ・フエなるを悟り、マニラ大司教の協賛を経て、フィリッポの宣教師の一切日本へ渡ることとを禁じ、唯通商元和九年(千六百三十二年)マニラ總督府でも日本政府の意を察して布教の爲めに貿易の利を失ふの不可つた。そこで徳川幕府は先づ西班牙國の通商を禁ずるの必要を感じた。

航を取締つたけれども、西班牙領マニラでは之を怠つた爲めに、宣教師の入國は重にマニラからあや東洋貿易の根據地たる媽港では宣教師の日本人が貿易上の障害たらんと恐れて、その日本渡











長崎港全圖







基督教を奉せしめ、宣教師と軍隊の力に頼りて土人を威服し、千五百七十二年(元龜元年)ニマニラを占領しシコ市長レマスビスは總督の命を奉じて之を征し、先づマニラ王國に陸上して其王を降し、之を基班牙總督にフイリツベニ群島を占領して布教すべしと命じたので、千五百六十四年(永祿七年)スキリツベニ群島を發見して同國に東洋貿易の基礎を與へた。既に西班牙王リッポ二世は新西班牙を征服して新西班牙と命名し、總督府を置いて之を統治せしめたが、恰も同年にガリヤスエスはフロアを西班牙は千四百九十二年(明應元年)に大陸を發見し、千五百二十一年(大永元年)にはスキコ

年(天文二十二年)の頃には永久に港に船を使用するの權を得て極東貿易の策源地を此地に定めた。館を設け、千五百四十二年(天文十二年)には我日本を發見して之と通商の道を開き、千五百五十三年を獲て附近の諸島と交易を通じ、千五百十六年(永正三年)には廣東に達し、尋で寧波、厦門等に努め、千五百十七年(永正七年)にはマニラを占領して東印度總督の府を置き、尋でマニラ及び香料諸島等に葡萄牙人は千四百九十八年に東洋航路を發見して以來盛に大船を派遣して領土及び商權の擴張

## 第一章 和蘭船の初渡來

## 第二期 唐蘭貿易時代







護し、且つ之に信仰の自由をも許したので、彼等は依然としてその仲買業を繼續するところが出来た。牙と千戈を交へつゝあつたけれども、葡萄牙國王がリスボンに在るポールポに在るポールポの生命財産を保年（永祿十年）には遂に之に堪へずして反旗を翻すに至つた。それよりポールポ人は絶えず西班牙爾來新教徒たるポールポ人は政教の兩方面から非常な壓迫を受けることとなり、千五百六十七、聖教の保護者を以て自任せる西班牙王フィリポ二世がポールポに君臨することになり、千五百六十七、こを以て生業として大なる利益を占めつゝあつたが、千五百五十五年（弘治元年）に至りては、羅馬。即ち彼等の船舶はリスボンに至りて東洋の貨物を買入之れを歐洲の北部及び中部に轉販賣する。併しポールポ地方の人民は葡萄牙兩國の東洋貿易によつて間接に多大の利益を享有しつゝあつたので、何人とも雖ども東洋貿易には一指をも染むること出来なかつた。

洋航海を禁じて、之を犯すものは其船舶を沒收したるのみならず、乗組員をも死刑に處ネチャにも優る殷富を去るが如く右兩國は極力東洋へ航路を秘し、且つ其他國の船舶の東から歸り来る所の船舶は皆リスボンを入津したので、リスボンは世界貿易の中心として往時のヴェカくて葡萄牙、西班牙の兩國は東洋貿易を獨占して富強他に比するものなきに至つた。そして東洋年定期にマシコのアカポル港とフィリピン群島との官船を往來せしむることになり、定められた。て之を全島の首府と定めた。是に於て西班牙王フィリピン群島を新西班牙總督の管下に置き、毎









へからずと爲し、慶長十年四月西洋國渡航の朱印狀を受け、銀十五貫目を投じて一船を建造し、之を望しつゝあつたが、是に至りつゝ船長の歸國の許可を得たといふことを聞いて、好機を容易の業ではなかつた。平戸松浦鎮信は葡萄牙貿易を大村領に奪はれ、一切に外船の渡來を希し、蘭人の敵たる葡、西兩國の船舶のみであつたから、クワケサルが歸國の便を得るところは決してクワケサルはアダムスの斡旋によりて歸國の許可を得た。併し當時我國に渡來する歐洲船は和蘭國の允許を乞ふた。然る意外にも之は直に許さねた。時に慶長十年であつた。爲めにアダムスの材幹を愛して之を許さなかつたので、終に意を決して船長ヤコブ・クワケサルが爲め歸國の允許を乞ふた。然る意外にも之は直に許さねた。時に慶長十年であつた。爲めにアダムスの材幹を愛して之を許さなかつたので、終に意を決して船長ヤコブ・クワケサルが併し家康は望の情轉々切なるものがあつたので、屢々家に謁して歸國を許されんことを請ふた。併し家康はウイリヤム・アダムスは和蘭人等がバタニアに居留地を設けて日本人と貿易しつゝあることを聞いて居留地を設けて盛に東洋貿易を營むことになつた。

館を置き、その翌年にはジャガトに出張を設け、尋で馬來半島の東岸なるバタニア(太泥港)にも商を受けて東洋貿易に従事することになつた。かく千六百三年(慶長八年)にはジャバのバレンボリに聯合ネーデルラント東印度會社を組織し、その株の大半を政府の所有と爲し、政府より特別の保護に一方和蘭本國に於ては、各地に起りたる東印度貿易會社を併合して千六百二年(慶長七年)三月廿日になつた。







持を條件として二十二年の休戦條約を結ばんが爲めに、ヘーグに談判委員を派遣するところになった。維  
は到底和蘭國を再びその治下離服せしむるの望なきを看破し、千八百八十年（慶長二十三年）（現狀）  
ることを得たるのみならず、東洋に於ても亦西葡兩國人と對戦して之を苦しめたので、西班牙政府  
變動であつた。和蘭人は西班牙に對して獨立を宣言して以來、多年の戰の結果、西軍を國外に驅逐す  
その機を得なかつたが、慶長十年に至り至るの氣運が俄に熟した。それは蘭、西兩國間の關係の  
和蘭東印度會社は慶長十年頃から日本との通商を開始したといふ希望を持つて居たけれども未だ

## 第二章 平戸の和蘭貿易

で、遂にその素志を果たすに至らずして歸國した。餘り多くの歳月を東洋に費消したので  
あつたけれども、葡萄牙艦隊との戦争に性殺されつゝある間に、日本との貿易を開始する希望が  
の朱印狀を以てした。マタリフは意は大に動き、機曾だにあらば日本との貿易を始める希望が  
至り、マタリフの面會して日本貿易の有利なる説き、之に授くるに家康から貴た所の通商許可  
に至りてマタリフ・デ・ソンの率ある和蘭船隊がソングポル附近にあるの情報を得て同地に  
信の所有船に便して乗して慶長十年の秋マセヨル・サント・オスルと共に日本を去つたが、バタ  
ックケナルックに授けて蘭人の誘招を試みた。マクナルックは大に松浦氏の好意を感謝しつゝ、

商館長は葡萄牙商館長同様一年毎に交替すべしと命じた。蓋し日本人と懇親を結び、宗教上の感化を掲げある家屋の破壊を命ずると同時に、日曜日を守り、宗教の儀式を行ふことを嚴に之を禁じ、又平戸城内に招き、石造倉庫の破風に一六三七及び一六三九の基督紀元の年號を刻めるを責めて、之を門と共に平戸に出張して蘭館を視察し、翌廿六日商館長ヲソツ・カソソ以下主要なる商館員を心を寒からしむる必要ありと認めしにや、寛永十七年九月廿五日、井上後守は長崎奉行柘平右衛門を以て徳川幕府は平戸和蘭商館を長崎に移すには先づ平戸蘭館の堅牢なる倉庫を破壊して蘭人の

いたと思ふ旨を答へた。

ふと云ふ意見を述べ、且つ平戸には既に堅牢な倉庫も建築したる今日なれば、自分としても平戸に留まつた模様が無かつたので、カソソは長崎へ移轉のことはバタビヤ總督府の認可を得る見込がなからず、かつたけれども、松浦氏の猛烈なる引留運動が効を奏して、バタビヤ總督府は容易に之に同意し、商館を長崎に移しては如何と尋ねた。當時和蘭人中には寧ろ長崎へ移轉することを希望するものが多かつた。寛永十七年(一六六四年)四月平戸蘭館長ヲソツ・カソソの江戸に参府するや、老中は之に平戸の

### 第三章 平戸和蘭商館の長崎移轉

せしめて何時までも傍觀する程の大量を持たなかつた。

Canon

であつた。是に於て長崎人の平戸蘭館移轉運動が起つた。徳川幕府も和蘭貿易の利を松浦氏に專に  
 となつたけれども、朱印船貿易と葡萄牙貿易との禁止によつて失つた所の損失を償ふには餘りに貧弱  
 であつた。九州の各港に入津したる唐船は皆長崎に入津し、各地に留る唐人等も皆長崎に引上る港に限られ  
 て、長崎市中は火の消えたりやうな淋しさを感じた。無論寛永十二年に唐船貿易が長崎一港に限られ  
 て、公領たる長崎に於ては朱印船貿易の禁止に續いて葡萄牙の通商も亦禁せられ、島は空屋となつた  
 かくて平戸の和蘭商館は日に隆に赴き、平戸松浦氏は四圍羨望の標的となつた。然るに幕府の

て、日本人の海外航が絶に禁止せられ、同十五年（一六三八）年には長崎の葡萄牙貿易も亦嚴禁せられ  
 年（一六四二）年には西班牙人の本通商が禁せられ、同三十三年（一六六六）には朱印船貿易も亦廢せられ  
 に閉鎖せられたので、平戸の和蘭館は再び平戸貿易の利を專にするにやがて出来た。そして寛永永元  
 競争が行はれた。併し英國商館は收支相償はずして元和九年十一月十三日（一六四二）年に至り遂  
 慶長十八年（一六四三）年に英國東印度會社が商館を平戸に設くるや、蘭、英兩商館の間に一時猛烈な

す、却つて家康の感情を害した。  
 家康は熱心に蘭人の追放を迫つた。併し此蘭人排斥運動はその効を奏せなかつたのみなら  
 ざり、大守ロドリゲス及び西班牙王の使者と稱してバスターアサカノの二人





出島和蘭商館の圖

移轉に着手し、同年六月十七日、平戸を去つて長崎に向ひ、翌朝出島に上陸して甲比丹部屋に入つた。  
狀を觀察し、出島にも面會して若千の修繕を命じ置き、寛永十八年(千六百四十四年)五月四日、實  
ふへき旨を答へ、翌日飛脚を以て之を平戸和蘭商館に報じ、急き平戸に歸り、尋で長崎なる出島の實  
に、若し之に抗議するに於ては如何なる事變を惹起すやも測りがたきを知つたので、直に之に従  
平戸商館長ル・ムールは事の餘りに急激なるに驚いたが、昨年以來の經驗によりて、幕命の絶對的  
ふにあつた。

出島に移すことを承諾し、自今悉く長崎に入津するに於ては、從前通り通商を許して差支ないとい  
貿易の必要を感ぜざるも、和蘭人は權現様時代以來通商し居ることなれば、若し平戸の商館を長崎の  
が、謁見の禮了るや、老中は將軍の命を傳へて平戸商館の長崎移轉を命じた。その要旨は日本は外國  
寛永十八年三月三日、平戸の新商館長マキシヤル・ムールは江戸に參府して將軍に謁した  
即日倉庫の荷物を他に移し、その破壊に着手したので幸に事なきを得た。

に通じて居たので、直に平戸碇泊中の蘭船乗組員二百人を陸せしめ、近所の町人等の援助をも得て、  
候に兵を出さしむる計畫であつたといふのであるが、カローンは松浦氏の注意によつて略此等の事情  
之を殺し、館員も亦之を捕縛して自ら家屋の破壊を指揮し、萬一之に反抗するやうなれば、近國の諸  
日本人に及ぼす機会なからしめんとあつた。當時井上筑後守は商館長にして直に命に従はざれば

galeon  
2000  
2000  
2000







長崎の時、唐貿易の朱印船貿易

第五章

長崎の唐貿易の朱印船貿易

た、何となれば彼等はそれ以外には容易に外出を許さなかつたからである。

して贈物を爲さねばならなかつた。併し此等の伺候は出島在留者にとつては寧ろ喜ばしいことであつた。入は甲比丹始め僅に七八人に過ぎなかつたが、彼等は入崩、年始、其他の禮日には長崎奉行所に伺候乗して歸り、後任者たる甲比丹に出發の日前事を引繼ぐとした。蘭船の出帆後出島に留るに便し、月中旬から十一月の初めにかけて長崎を出帆することになつて居たので、當年交替の甲比丹は之に便し、物を献せねばならぬことになつて居て、之を江戸参禮と稱した。蘭船は毎年六七月の頃に渡來し、十出島和蘭商館長は之を甲比丹と稱し、原則としては毎年江戸に出で、登營して將軍に謁し、且つ方

月 十 卯

右條々堅可相守者也

- 一 斷なくして阿蘭人出島より外に出事
- 一 出島廻り榜示杭の内船乗廻事 附櫓の下船乗通事
- 一 諸勸進の者並に食入事
- 一 高野ひじりの外出家山伏入事

# 一 傾城の外女入事

## 禁 制

人の出入入を禁じ、橋畔の番小屋で嚴重に之を取締つて居た。

出島門には制札所があつて左の如き制札を掲げ、丸山及び寄合町の公娼と高野僧の外は一般日本館時代には毎年平均銀八十貫目であつたが、和蘭商館時代には減じて年額五十五貫目となつた。

出島敷の屋敷の使用料は之を埋築した二十五人の所謂出島町人に徴收權があつて、その金額は葡萄牙商け、又花畑や牛豚羊雞等の飼育場もあつた。

島内には商館長以下の住宅を始めとして、乙名部屋、通詞部屋、札塲、倉庫、番所等の建築物を設け、出入入するを禁じた。

番小屋を設けてその出入入を嚴に取締り、島外數歩の海中には十二三本の榜木を立て、その内には門を設けて荷物の陸揚げに便した。水門は荷物の揚卸の際の外は嚴重に閉鎖せられ、正門の橋の袂に戸町に向つた側の中央に正門が設けられ、そこに石橋を架して江戸町と交通の道を開き、西側には江十六間餘、南側即ち海に向つた方面は百八十餘であつた。島の周圍は總て高い板塀で取圍まれ、江出島の總面積は三千九百六十九坪餘で、東西は各三十五間餘、北側即その江戸町に向つた方面が九易はこつで營まれた。



伸ばさんとするのであつたから、粗暴放縱なる海賊的行爲は免れなかつた。そして之は永遠に我國威併し何れにしても多くは日本内地に於ける敗殘の武士がやる潮なき鬱憤を萬里の異域に思ふがまゝにあり、或は武を異域に輝かし覇を海上に稱して異域の民をして心膽を寒かしむるものがあつた。のあり、或は千石二千石の大船に銀球玉を滿載して異域の珍寶と交易し、一舉金を得んとするものあり、或は千石二千石の實は活躍は實に盛なもので、或は集團生活をして萬里の異域に新日本を建設せんとするものあり、我國民の容易に近よることは出来なかつたけれども、臺灣、呂宋、安南、東埔、暹羅其他南洋諸島に於ける商船は結果、絶對に我國の商船の沿岸に近よることは出来なかつたから、支那本州の沿岸には我々を見た結果、我が國から出掛けて行く唐貿易は實にすばらしい盛なものであつた。無論我國は多年倭寇に悩ま

を爲し、云々。とある如く小規模のものであつたに相違ない。

の儀四季よりす小舟にて銀高五六貫目或は十四五貫目ほどの荷物を積み、何艘も來りて相對の貿易無論元龜二年入津の唐船は葡萄牙人の儲船であつたうけで（。）併し此頃の唐貿易は「昔年唐船一時風波を避けた位であつたに相違ない。」と云はれた貿易の爲めに入津は元龜二年がまかりかと思はる。

かつたから、それ以前に入津した唐船があつたとしても、それは何の用で一寸寄港したのか、或は前章にも述べたる如く、長崎の港は元龜二年以前に於ては、何等の設備なき荒れはたつた漁村に過ぎな

ハトラマサキ（大村純忠なり）の新しい港に着いた。

時節到來して支那から商船(葡萄牙の帆船)とシヤンク船(唐船)なること明なり(と)か長崎でふどべ

白丁ある。

百七十七年（元龜二年）八月八日附、志發、イマルシキミ・パルス・スの報告に左の節があるので明本史料でないから確かには言えない。併しこれが證言であることは確である。それ五千根崎に渡來し、純忠が態々之を長崎まで出たのである。何れも事實らしくも思はるゝけれども、根崎の長老ヲラシユ・カブラルが初めて我日本に於ける基督教界の柱石たる大村純忠を訪問の途次長崎といふ記事がある。元龜元年云々と云へば長崎トマス・オサントス建立された翌年で、又耶蘇會入の爲めに横瀬浦を開いた年である。崎陽秘集には元龜二年（一五七〇年）に唐船が一一艘長崎に入津したとある。長崎に於ける唐貿易のはじめは、わづかに唐貿易といふ語を用いたのである。

支那貿易を云ふのであるけれども、その内には支那以外の商船との貿易も含まれているのである。支那貿易を奥船と稱し、共に之を唐船と稱した如きの類である。夫故に唐貿易と云へば九分通からは来る船を口船と稱し、福建兩廣から来る船を中奥船と稱し、暹羅、東京、東捕寒、六昆、（六分吧、<sup>ウラカ</sup>）江蘇浙江から来る船を口船と稱し、唐船といつたのは決して支那船のみを指すのである。たゞ例は江蘇浙江から来る

去りながら、さなきだに倭寇を恐れて我商船の通商を許さなかつた所の明國は、征韓役後益其の禁東印度會社が同じく平戸に商館を設けたので、我國の對外貿易は俄にに降昌に赴いた。

はして貿易することとを許し、同十四年には和蘭東印度會社が平戸に商館を設け、同十八年には英國の慶長十年三月には朝鮮との交通が再び開け、同年九月には呂宋なる西班牙政廳に毎年四艘の船を遣

入憑六を以て之に任じた。

になつたが、唐船も亦追々入津するやうになつたので慶長九年、初めて長崎に唐通事を置き、歸化明に近くて葡萄牙船と二百艘に近き朱印船とが年々出入することになつて長崎は俄に繁昌を極むるやうきに及んだ。

もあつた。そして其の數は慶長九年から元和二年に至る足掛三十三年の間に八十二人、百八十二通の多きが、その外に堂々たる國持大名や、權勢ある役人あれば、長崎に留る支那人や葡萄牙人など、朱印狀を貰つて海外貿易を營むものは長崎、大坂の商人が多數を占めて居たことは勿論である。送せられ、之に將軍の朱印が押捺されて、始めて其の効力を生ずるのであつた。

金地院崇傳がその後を襲いた。此等の長老が正純の命により作つた朱印狀は、一旦正純の手に廻り、慶長二十年十二月、承兌の後は圓光寺の長老が元倍がその後を襲ぎ、同十七年五月廿日、元倍の歿するや利の長老が之を掌ることになつて居た。始め朱印狀調製の任に當つたのは豐光寺の承兌であつたが、



朱印狀の交付に關するところは老中本多上野介正純が主として之を掌り、朱印狀調製の事務は京都の禮徳川家康は夙に心を海外貿易に用ひ、慶長九年（一六〇四年）頃から盛んに朱印船を海外に派遣した。れども蓋し征役後始めていふ意味であらう。

化明人憑六を通事として貿易の章定めた。長崎の舊記には「此時唐船始めて入津す」あるけ  
（一六〇六年）の秋に至り、一艘の唐船が長崎に入津して貿易を請ふたので、時の長崎奉行寺澤志摩守は歸文祿元年には征韓の役が始まつたので、支那から来る唐船は一時その影をひそめた。併し慶長五年によれば此等の船は皆長崎で造つた唐船型の大船で、而かも長崎から出帆したといふところである。美、六見、太泥、遼、羅、臺灣、呂宋、媽港等の各地であつた。これが朱印船の濫觴である。長崎、港、草のは長崎から四人、五艘、京都から三人、三艘、堺から一艘で、其の先行は東京、交趾、占城、東埔の京都、堺、長崎の富豪を揀抜して之に海外貿易特許の朱印狀を授けた。此時朱印狀を交付されたもなる方法をして海外との通商を盛にするところを獎勵し、以て國家の富力を培養せんことを期し、初め九二年に至りては更に積極的の方針をとて、大資本を有する富豪に海外貿易の特權を與へ、着實穩健五で急務と爲し、天正十六年七月八日、令を諸國に下して嚴に海賊を取締らしめ、文祿元年（一六〇五）豊臣秀吉は天下統一の業漸く其の緒に就くや、先づ内外の海賊を鎮定して海上往來の平安を圖るを海外に輝し、國家の富強を將來する所以では無論なかつた。

密通するものあり、或は其他の惡事を企つるものなどあつたので、元祿元年（一六八八年）幕府は唐船益々疑惑の眼を以て唐船を眺むることになつた。加之當時唐人等の風習る宜しからず、人の妻女が、我貞享元年に至り至りその禁を解いた爲めであつた。併し幕府に於ては内情を知る由もなく、等の沿海住民をして三十支那里内地に轉住せしめ、漁船商船の別なく一切出海を禁じつゝあつたの之内應したので、清國政府は我寛文元年（一六六一年）を以て遷海令を布き、江南、浙江、福建、廣東之七艘の多きに及んだのであつた。是は實は曩に鄭成功の臺灣に據るや、南支那の沿海の民が多く増し、從來は二十四艘に止まつたものが、同年には八十五艘、同年三艘、同年四艘、同年には百三艘、め之を燒棄した。貞享二年からは別には別な不思議な現象があつた。それは唐船の數に俄に激増した。貞享四年まで三十八種を發見したので、嚴にその舶載を禁ずると同時に、内地に散布せるものは集めた、貞享二年（一六八五年）に井兼丸が雲有に基督敎に關係ある記事があることを發見してから、亦唐船によりて輸入せられたことが發見せられた。基督敎關係の書籍の事は幕府は始め氣付かなかつた。其後唐船を買収して入國を企てた伴天連があつたのみならず、漢文で出版された基督敎關係の書籍も始め唐人の眼を以て唐船を眺むることになつた。然るに

は日本に於ける唯一の對外關門となり唐船と蘭船の出島に移されたので、寛永十八年（一六四一年）以來長崎禁せられ、平戸の和蘭商館も亦同十八年に長崎の出島に移されたので、寛永十八年（一六四一年）以來長崎

國政が益を歩を進めたるので、その結果として天主教國民たる葡萄牙人は寛永十五年を以て通商を  
崎に、和蘭船は平戸に入津することになつた。然るに寛永四十年には基督教徒の亂が起つて幕府の鎮  
られたので、爾來我國に渡來する者は和蘭、葡萄牙の二國と唐船のみとなり、唐船と葡萄牙船は長  
しが爲め元和九年（一六二〇年）を以て自ら閉鎖して去り、西班牙の通商は寛永元年に禁ぜ  
じ、葡萄牙人の血を受けたる女子は悉く之を放逐した。是より先英國の平戸商館は收支相償はざ  
を廢して日本人の海外渡航を嚴禁し、葡萄牙人は之を新に埋樂したる出島に移してその市内散宿を禁  
是に於て幕府は寛永十二年（一六三五年）先づ江戸に港を長崎一港に限り、翌年、朱印船の制  
に貿易の利を之が爲めに犠牲に供するの已を得ざるを悟つた。  
教師等を海外に追放し、爾來嚴にその入國を防止せんとしたけれども、その申妻がなかつたので、遂  
基督教の宣傳に就ては、大にその弊害を認めたるので、慶長十八年十二月、禁教の嚴命を下し、翌年宣  
對外貿易の隆昌は徳川幕府の固より大に歡迎する所であつた。併しなが、之と共に輸入せられたる  
復興して通商の道を開かんとを求めたけれども、遂に何等の返事にも接しなかつた。  
明商人周性如といふものが來りて家康に謁したので、之に福建總督宛の書翰を託し、勘合符の制を  
で、慶長十五年には長崎奉行に命じ、朱印狀を廣東の商船に與へて之を誘招せしめ、同年十二月には  
を嚴にした。さうすれば徳川家康は先づ朝鮮を介して交通の道を開かんとしたけれども不成功に終つたの



方形の島は新地蔵にして唐人の荷物を貯蔵したる所なり。



唐人屋敷

高き石段の上は大徳寺にして隣に竹柵及土堀等を以て圍繞せられたる地が唐人屋敷なり。

際に叙述するにす。

だ。無論貿易の方法や貿易額等に就いては種々變遷があつたけれども、之は貿易方法の變遷を述ぶるかくて唐貿易に對する各種制度は略一一定したので、その後餘り特筆すべき出來事もなく幕末に及んだ。

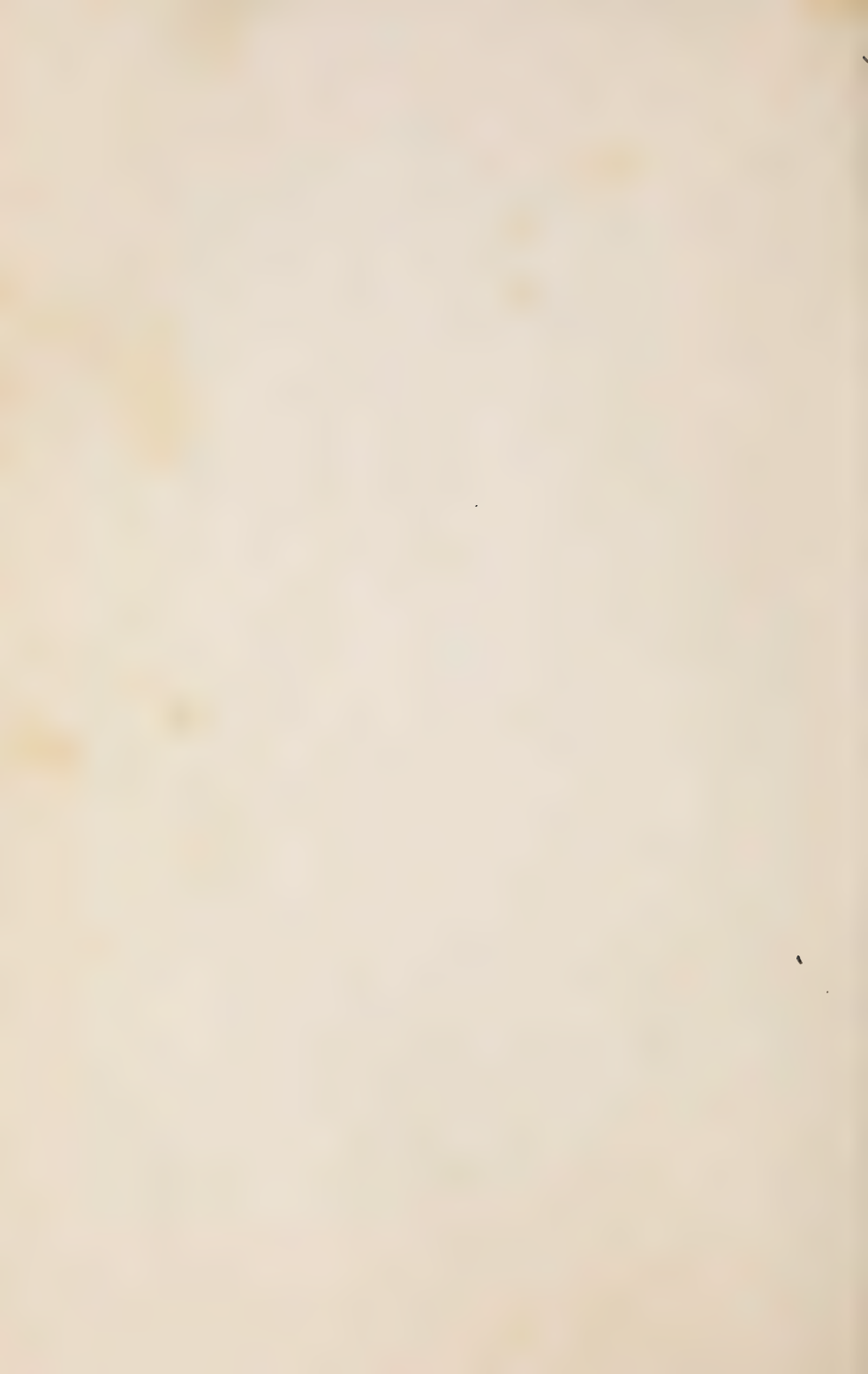
對して長崎會所は家屋賃料として商額百貫目に付二貫百九十匁宛を唐船から毎年徵收するに之に銀四百四十五貫餘を費したたが、内二百貫目は幕府から貴興し、自餘は市民の負擔として、之に唐の沖に埋築工事を起して倉庫を建て、元禄十五年に落成した。これが新地庫である。この工事に年一八九八年の大火で焼失し非常な損害を起した。そこで三十九人の商人が奉行の許可を得て、唐人はかくして皆唐人屋敷に移され、輸入貨物の倉庫は依然市中に在つたので、元禄十第に比すれば稍大であつた。

の唐人屋敷内に起居し、特別の場合の外は外出を許さなかつた、併しその取締りは出島の和蘭商に長市中散宿の唐人を悉くこに移した。それから唐人は幕末の開國の時に至るまで一高坪に足らぬに唐人屋敷を造せしめた。工事は元禄元年九月廿五日に始まり、翌二年四月十五日に落成したので、新、長崎奉行に命じ、松平主殿頭、松浦肥前守と立會の上、長崎外十善寺村の樂園に地を相し、なり、入津を一ヶ年七十七艘に限ると同時に、出島和蘭商館の例に據り、唐人を一廓内廓に隔離することにな

唐船の創立と同時に新に唐人番、唐人屋敷乙名、組頭等の諸役が設けられ、唐人外出の時は唐人番居た。大門の外を波止場又は廣馬場とも稱した。

外竹柵との間が千八百三十五坪七合四勺あつて、そこには五ヶ所の番所を設け、嚴重に館を守つて酒藥雜品等を賣つて居た。又土神祠、關常堂、觀音堂、納涼所、溜池、靈魂堂等もあつた。櫓壁の部屋は二階造りで、一部屋凡三間に九合四勺又は四間に七間のものも二十餘あつた。又商店が百餘あつた。間等があり、二の門の内は六千八百七十四坪あつて、そこは唐人の長屋が立並んで居た。唐人の役、大門番所、新番所、乙名部屋、大部屋、小部屋、二の門番所、土藏、雨覆貫屋、牢屋、拷役、人の外は燈版を持たぬものは出入を許さなかつた。大門と二の門との間が六百五十四坪六勺あつた。内には役人でも妄に出入するを禁ぜらるゝ外、大門と二の門との間が二の門と二の門との間を二の門と云つて之を圍み、内外の二門を設けて嚴重に出入を取締る仕掛になつて居た。中の門を二の門と云つた。以て銀六百三十四貫四十四匁と、三十四間なる今の館内の地に在つて九千三百六十六坪八合の面積を有し、その造營の費用に孤嶺と梅崎との間なる今の館内の地に在つて九千三百六十六坪八合の面積を有し、その造營の費用に五日に落成し、爾來幕末に至るまで支那人の居留地に充てられた所である。位地は大徳寺の左で、唐人屋敷は一一に唐館と稱し、前節に述べた通り、元祿元年九月二十四日に工を起し、翌二年四月十







右條々可相守之吾於違背は可爲曲事者也

一、出家山伏諸勸進のもの並乞食入事。

一、傾城の外女入事。

一、斷なくして唐人構の外へ出事。

### 禁制

貞享四年十二月

右所定如此、唐船諸客商皆宜承知、勿違矣。

則宥其咎、答且賞賜、可倍於彼重賄事。

一、耶蘇邪徒之書札、並贈寄之物、潛藏齎來於日本、則必須誅之、若有違犯而來者、速可告之、然

不匿赦之可褒賞事、

停止之、自今以後、唐船若載彼徒來、則速斬其身、而同船者、亦當伏誅、但縱雖同船者、告而

一、耶蘇邪徒天主教曰主俗、以罪深重故、其駕船舶所來者、先年悉斬戮、且其徒自阿媽港、發船渡之事、既

### 諭唐船諸人

することになつた。そして唐館前には左の制札が掲げられてあつた。

か必ず之をを護衛するることになつて居た。元禄六年に至りては更に堀の外に番所を置き、益警戒を嚴に



高下することとを許さなかつた。併し時に價額の騰貴したものは、割増値段を許し、下落したものは、高下するに據つたけれども、唐商品は寛永十八年の時價を不動價として之を本途値段と稱して叩り品的のきめ方であつて、之を持渡品と稱した。式になつて居たが、協議といふ名のみで、實は宣告を唐蘭商人に示し、協議の上で確定するといふ形になつて居たが、協議といふ名のみで、實は宣告會所貿易の方法は輸入貨物は總て先づ之を倉庫に入れ、積荷目録と本とで之を評價したる上、之に之を監督するのであつた。

品取引の時立會人となるのであつた。唐蘭貿易のことは總て長崎會所で取扱つたので、長崎奉行は單置く、役所番、筆者等があつて事務を分掌し、別に絲割符老、四個所宿老、諸目利があつて、商が之を兼務し、其の下に目付(享保元年)之を置く(吟味役)正徳三年之を置く(請拂役)元禄十一年之を置く(春秋帆が下ると同時に之を廢し、安政五年には頭役と改稱した。この調役は町年寄中の首席二人夫婦役と稱したが、明和天明の頃から調役と稱し、天保年間には一時調役を置いたが、高島四郎太の自治機關で、唐蘭貿易に關する一切は會所で掌るのであつた。其の首長は初め唐蘭貿易元禄十一年(一六九八年)には長崎會所が出來て、絲割符會所は廢せられた。長崎會所は長崎市民共有本貿易に對しては口錢を一分割き止めた。

目であつた。そしてこの私貿易は利益が多かつたので、之に對しては六七割の口口錢を徴せられた。







そのまゝくであつたから、唐商人も別に苦痛を感ずることはなかつた。

精神界に大陸の文化を傳へたばかりでなく、寛永十一年には酒屋町、麿屋町と目鏡橋式の石橋は、寛永九年（一六三二）年（唐三ノ僧如意と云ふもの）が長崎に渡來し、興福寺第二代の住持となつたが、彼は化は此等の人々によりて大に培はれた。

清の粟を食ふことを愧ぢて難を本邦に避け人々の内には、碩學高德の人が多かつたので、本邦の文に貢献したことも亦枚舉に遑なき所である。殊に清朝が起つて、碩明の社稷が將に危からんとする頃から高僧智識を始め、醫者美術家其他一技一藝に漢能なる人々の、親しく本邦に渡來して、本邦の文化に併しなから支那文化の本邦に輸入せられたのは、決して文によりてのみではなかつた。碩學鴻儒

科學も亦多く漢籍によりて本邦に傳へられた。

傳へられた。加之康熙帝の頃から泰西の科學の漢文に譯せられたものが甚多かつたので、泰西の偉大なる感化を興へたことは、今多言を費すの必要はないが、物質的文明も亦漢籍によりて多くつた。儒教と佛教とによりて天下の人心が支配せられた當時に於て、支那船載の書籍が我國の精神界を鎖國後に於て、本邦文化の向上發展に最も多く貢獻したものは、何といつても支那大陸の文化であ

## 第八章 支那文化の輸入

とがなかつた。

其後多少の増減はあつたけれども要するに頗る不振の模様で幕府は常に消極的政策を採つてゐた。其は寛保三年に定額外に銀千貫目に當る倭物貿易を許した。之は銅に關係がいかであつた。十艘輸出の額を百五十萬斤に減じ、蘭船貿易は一萬銀七貫目、眞目六十萬斤に減じた。併し唐船に斤と定めた。それから段々貿易額を減じ、寛保二年（一七四二年）には商賣半減令を發して唐船の定數を三十艘、商額を新銀四千貫目、有餘賣額を七百貫目に減じ、蘭船の數を二艘輸出を九十萬の我國に於ける銅の產出はその後益々面白からぬ様であつたので、享保五年（一七二〇年）には唐貿易の九州の各地に令を下して沿岸の唐船を據はしめた。

送番所を置き、その歸に際し遠く尾行して私購を監視せしめ、享保三年に特に渡邊外記を遣はし、入千貫目増加した。積鼠の密貿易を取締る爲めに、享保元年には長崎外木浦に唐船を見入を愁めたので、享保二年（一七二七年）には唐船の定數に十艘を増して信牌を與へ、従つて貿易額を銀が多かつた爲めに、密貿易が盛に起り、その取締が困難であつたと同時に、唐商等も亦制限解除が、多かつた爲め、新井白石も其の職を罷められたので、正徳の新例も之を廢せんとするの議があつたけれども、吉宗が親しく裁決して舊に從ひ勵行するの方針を聲明した。併し新例の施行の結果積鼠を命せらるゝ舟、新、宗が紀州から入つて宗家を繼いだので、諸事祖法に復するを旨とし、前代施された所は多く改廢さ、正徳の新例は始め萬世不易の定例とする方針であつたけれども、翌正徳六年四月には將軍家繼體として、





之を興福寺に訪問して敬意を表し、内外の道俗も亦相傳へて參詣を請ふた。就中廣島の僧鹿橋の如き隱元の來着するや、逸然等の驚喜して之を迎へたことは素より其所であつたが、長崎奉行等も即日隱元の渡來するや、名を性易、字を獨立と改め、その弟子となつた。

年に戴曼公といふものが長崎に渡來し、醫を以て業と爲し、特に痘科に妙を得て醫神の稱があつたが、前眉、獨知、獨淮、獨吼、惟一、無上、古石其他十餘人の弟子が禪師に隨つて渡來した。禪師の來の前承應三年（一八四四年）七月五日の夜入津の唐船に着し、翌朝上陸して興福寺に入つた。此時大亦長崎より到りて、日本國民の深く佛敎を敬信する實狀を述べたので、隱元も遂にその懇情に感じ、如きは長崎奉行の命を奉じてその東渡を請ふ形式になつて居たのみならず、木菴の弟子靈叟も力を籍りて禪宗の復興を圖らんと欲し、前後四回請啓を呈して懇に其の東渡を請ふたが、第四回その遺憾とし、その頃聲華普く中外に識れたる支那黃山萬福寺の住持隆元琦禪師を招聘し、そのける禪宗は臨濟洞の兩派共何れに將にその正傳を失はんとする有様であつたので、彼は深く之をまつた。併し逸然が本邦の文化に貢獻したことは決して繪畫の末技のみではなかつた。當時我國に於妙を得て居たので、渡邊秀石、僧若芝などが其の門に學び、その薈奧を極めて、長崎の漢畫が茲に始

正保元年（一八四四年）は唐僧逸然が渡來し、長崎興福寺の第三代の住持となつたが、彼は繪畫に

なくして一時錫を同地に留め、廣壽山福聚寺を開創した。それから法主四年の後、長崎に歸り、崇福山を辭して歸國の途に就いたが、途に小倉を過ぎて小倉侯小等原忠真の懇請に會ひ、之を辭するに由樂山を上つて竹林谷に入つた。併し彼は回唐の念切なるものがつたので、翌寛文四年の秋、黄葉から龍溪等と共に錫を助けて力を黄葉の開創に致した。即非も亦寛文三年の秋、黄葉の世に二甘露門と稱せられた。既に木菴は長崎を發して攝州に至り普門寺に投じ、寛文の年には同じく隱元の高弟即非も亦來して崇福寺に入り、一時共に長崎に留つて宗教界に活躍した。隱元渡來の翌年即明暦元年（一六五五年）には、隱元の高弟本菴が長崎に來着して福濟寺に入り、三萬福寺と稱した。

家綱に謁し、翌二年、地を山城の宇治に賜ふて寺基を開き、寛文元年（一六六一年）工事成を告げ黄葉山龍溪の請に應じて攝州に至り、先づ普門寺に入り、萬治元年（一六五八年）諸弟子と共に江戸に至り將軍宗教界を掀翻せんとするの勢を示した。隱元は長崎に留ること一年の後、明暦元年（一六五五年）妙心寺右の如き有様であつたから、隱元の渡來後末年ならずしてその道風は東西に傳はり、殆ど本邦の

たが、彼は隱元の江戸參府の時なども隨從した。そので、其筋の命を受け、果して眞の隱元なるかを確むる爲めに、率先して隱元に謁したものであつた。是れ先して遙々長崎に來り親しくし、隱元に謁した。虚樞は嘗て支那黄葉山に於てて隱元と共に費隱に師事



之を興福寺に訪問して敬意を表し、内外の道俗も亦相傳へて參謁を請ふた。就中廣島の僧座禪の如き  
隱元の來着するや、逸然等の驚喜して之を迎へたことは素より其所であつたが、長崎奉行等も即日  
隱元の渡來するや、名を性を易、字を獨立と改め、その弟子となつた。

年に戴曼公といふものが長崎に渡來し、醫を以て業と爲し、特に科に妙を得て醫神の稱があつたが、  
眉、獨知、獨淮、獨吼、無上、古石其他十餘人の弟子が禪師隨つて渡來した。禪師渡來の前  
承應三年（一六五四年七月五日）夜入津の唐船で長崎に着し、翌朝上陸して興福寺に入つた。此時大  
亦長崎より到りて、日本國民の深く佛教を敬信する實狀を述べたので、隱元もその懇情に感じ、  
如きは長崎奉行の命を奉じてその東渡を請ふ形式になつて居たのみならず、木菴の弟子靈叟も  
力を籍りて禪宗の復興を圖らんと欲し、前後四回請啓を呈して懇に其の東渡を請ふたが、第四回の  
遺憾とし、その頃聲華普ねく中外に識れたる支那黃葉山禪寺の住持隱元隆琦禪師を招聘し、その  
ける禪宗は臨濟曹洞の兩派共に何れも將にその正傳を失はんとする有様であつたので、彼は深く之を  
まつた。併し逸然が本邦の文化に貢獻したことは決して繪畫の末技のみではなかつた。當時我國に於  
妙を得て居たので、僧若芝などが其の門に學び、その繼興を極めて、長崎の漢畫が茲に始に  
正保元年（一六四四年）には唐僧逸然が渡來し、長崎興福寺の第三代の住持となつたが、彼は繪畫に



之を興福寺に訪問して敬意を表し、内外の道俗も亦相傳へて參謁を請ふた。就中廣島の僧虛樞の如き隱元來着するや、逸然等の驚喜して之を迎へたことは素より其所であつたが、長崎奉行等も即日隱元の渡來するや、名を性易、字を獨立と改め、その弟子となつた。

年戴曼公といふものが長崎に渡來し、醫を以て業と爲し、特に痘科に妙を得て醫神の稱があつたが、眉、獨知、獨湛、獨吼、惟一、無上、古右其他十餘人の弟子が禪師に隨つて渡來した。禪師渡來の前承應三年（一六五四年）七月五日、夜入津の唐船で長崎に着し、翌朝上陸して興福寺に入つた。此時大亦長崎より到りて、日本國民の深く佛教を敬信する實狀を述べたので、隱元も遂にその懇情に感じ、如きは長崎奉行の命を奉じて、その東渡を請ふ形式になつて居たのみならず、木菴の弟子靈叟も力を籍りて禪宗の復興を圖らんと欲し、前後四回請啓を呈して懇に其の東渡を請ふたが、第四回目の遣憾として、その頃曹洞の兩派共、中外に識られたる支那黃葉山福禪寺の住持隱元隆琦禪師を招聘し、そのける禪宗は臨濟曹洞の兩派共、何れも將にその正傳を失はんとする有様であつたので、彼は深く之をまつた。併し逸然が本邦の文化に貢獻したことは決して繪畫の末技のみではなかつた。當時我國に於妙を得て居たので、渡邊秀石、僧若芝などが其の門に學び、その蘿奥を極めて、長崎の渡畫が茲に始を架設して、石橋架設の術を我國に傳へた。



享保中費漢源も亦長崎に渡來して書法を傳へ、城肅明、揚君山、打橋竹雲、松浦東溪等がその門に世に行はるゝことになつた。

ものが多かつたが、神代續江(熊斐)の如きはその傳を得て秘奥を極めたもので、それから寫生書が大滯在した。彼の書風は設色麗寫生の微に入り、而かも品格風韻に富んで居るので、爭ふて之に學問享保十六年(一七三一年)には書家沈南蘋が招聘に應じて始めて長崎に渡來し、同年(一七八二年)の間

その書風を學んで南宗に入つた。

涉りて屢渡來したので、その書風大に傳はり、清水伯民の如きはその傳を得て大成し、池の大雅も亦享保十一年(一七三六年)には南畫の大伊牟九が唐船主として初めて長崎に渡來し、爾後二十餘年にたので、此方面に於ける第一世と爲し、崇敬かなかつた。心越は又書畫を善くし、篆刻にも巧であつた。

を營構し、請してその第一世と爲し、崇敬かなかつた。心越は又書畫を善くし、篆刻にも巧であつた。招聘し、始は小石川の別郎に居らしめたが、二年の後公許を得て之を水戸に迎へ、祇園寺(舊天德寺)に遣はして之を聘した。徳川光圀は大に之を遺憾と爲し、天和二年(一六八二年)七月、家臣今井小四郎を命ぜられ、至つた。甚しく、一時は長崎なる興福寺の二室に幽閉せられ、特に海外へ退去を命ぜられ、至つた。から京都の南禪寺に留るゝと月餘、大に曹洞禪の爲めめに氣を吐いて、黄髮僧等の之を排斥するこれに喜んで之を迎へた。心越は延寶六年長崎を發し、先づ宇治の黄栗山萬福寺に木菴を訪問し、それ

遺憾として居た。然るに曹洞派の高僧心越が渡來したので、曹洞禪を信奉し、あつた所の僧侶等は遺骸として居た。皆隱元の流を酌し、臨濟の僧侶のみであつたので、曹洞派の僧侶等は隨之から渡來したけれども、延寶五年（一六七七年）には、唐僧心越が渡來して興福寺に入つた。隱元の渡來後多くの僧が支那か記述するまでもない所である。彼は貞享元年（一六八四年）八十三歳の高齡を以て水戸に歿した。大日本史の編纂に従事した。彼が大日本史を通じて本邦の精神界に偉大なる感化を興へたことは今更來りて教を請ふた。舜水は長崎に留七年の後、寛文五年（一六六五年）徳川光圀の聘に應じて水戸に至り、舜水の窮乏は甚かつたので、かつたので、その俸祿を分つて之に贈り、慶長崎に邦にも渡來するところ前後四回に及んだが、遂にその爲すべからざるを知りて歸化したのであつた。時舜水は明朝の衰亡を悲み、外國の援兵を得て義旗を舉げんと欲し、東奔西席するに達あらず、本萬治二年（一六五九年）には、明の碩學朱舜水が、清の穀を食ふを愧ぢて長崎に來り、遂に歸化した。如きはその一人であつた。夫故に黄梨高僧等の渡來は我國の藝術界にも一大革新を促した。と共に彫刻の妙技を有するものも亦渡來して佛像等を彫刻し、斯道に大なる貢獻を齎した。范道生と云ふの妙技を有するものも亦渡來するものも亦少からざりしのみならず、彼等が輸入した所の書幅の類には就いて學ぶべきものも亦少くなかつた。彼等隱元渡來後、寛文十一年五月廿日寺に至り同寺に示寂した。





## 第九章 佛國革命の影響

は皆第二編に於て夫々記述するにしている。

右の外醫術を始め、各種の工芸等に就いても支那文化に負ふ所が多かつたけれども、それ等と云ふ文化元年（一八四〇年）には江蘇閩が始めて渡來したが、その後屢渡來したので、僧の鐵翁、木下逸雲がその門に學び、南畫の秘奥を極めた。

得る所があつた云々である。

出た。天明中には張秋穀も亦長崎に渡來してその畫法を傳へた。谷文晁の如きはその門に學びて大に

たので、國王カール第五世は英國に逃れ、和蘭の殖民地を英國に割譲するを條件としてその保  
なり、千七百九十四年（寛政五年）にはオーストリア領ネーデルラントを占領し、翌年大に和蘭軍を破  
た。それから佛軍は雷に列國の侵入を撃退したのみならず、更に進んで外國侵略を開始するに  
兵を徵募し、併に撃退せられた。併に其後佛國は今までの例になく、全國皆兵の制度を始め國民一般か  
到る所に死刑處したことは、歐洲列國を驅つて佛國に對する大同盟を作らしめ、佛國の侵略軍は一時  
國王カール第五世の末、大革命勃發後、佛國は兵を國外に出して盛に侵略を試みたが、その挑戰的行動と

帝の親書と贈物とを齎して通商を請ふた。大使は病氣であつたので上陸して療養を加へ、船体にも日に至り、露國軍艦ナシダグが渡來した。之には特派大使サノ伯爵が乗し居りて、露國皇帝の風説を傳へた。依つてゾフは艦渡來のこを長崎奉行に報告した。果して同年九月六日の巷となつたことを告げ、且つ本年は露國軍艦二隻が世界周航の途に在るから、必ず日本にも立寄る文化元年（一八四〇年）から、パタヤから二艘の蘭船が入津して、パヤミヤの和約が破れて歐洲が再び兵國しゾフが出島商館長となつた。

疑つた。兎に角二艘共和蘭人の抗議によりて貿易を許さずして歸帆した。是歲ワルヂナルーは歸を仕入れ、通商を乞はんが爲めに來たものであつたが、和蘭人等は英國東印度商會の派遣した品たる船が引き続き來した。此等兩船はその船長の自ら告白する所によれば、船長自身の費用で商たるが入津する間もなく、先年渡來したマスユルドの船長たる船と英人ゼム・ス・トルメの船長たる會社のマヤル・ダ・ヤリヤが號と共に入津した。翌享和三二年（一八〇二）には備米船レムカ年（一八〇二年）の三月にはアミヤンの和約成り、歐洲の平和が一時恢復したので、久々振りに和蘭東印度を報告して、審問を要求した。

その積荷は恒例に依りて之を賣拂ひ、アサヤセウツツ號に託して之をパタヤに送附し、その始

を欺いて巨利を獲んが爲めに渡來したのである。商館長ワルチナルとゾーフとはその奸計を看破し、入津した。彼は元來不徳義無責任なる冒險家で先年來の成功に味を覺へ、本年も亦無能なるマ崎もなくして曩にエリザベス船の長として渡來したるスチュアルドがゾフ・オプ・ジヤハブ船で長は新出島商館長ワルチナルと共に長崎に渡來し、力を協せて商館事務整理の任に當つた。其後幾二（一）和蘭政府は直接東印度會社を重ねて營業の繼續が日本貿易をその經營となつた。是歲ゾーフは之を如何にとすることが出来なかつたので、ゾフはバタビヤの上司に報告してその指揮を仰ぐは、之を如何にとすることが出来なかつたので、ゾフはバタビヤに引還した。

是時に當り和蘭東印度會社は多量の損失を重ねて營業の繼續が日本貿易をその經營となつた。是歲ゾーフは之を如何にとすることが出来なかつたので、ゾフはバタビヤの上司に報告してその指揮を仰ぐは、之を如何にとすることが出来なかつたので、ゾフはバタビヤに引還した。

達して居たので、如何にとすることが出来なかつたので、ゾフはバタビヤに引還した。

記として渡來した。そして書記は荷役に進んだ。併し當時商館の内情は前述の如く紊亂の極に達して居たので、如何にとすることが出来なかつたので、ゾフはバタビヤに引還した。

寛政十一年（一七九九年）には備米國船アラクソ船が津し、ヘンドリック・ゾーフが出島商館の書を了し、無事出帆することが出来た。

時長崎に滞留中なりし爲めに、その義侠心と機智の處置とによりて、翌寛政二十四年九月十九日引揚を當め、室息して如何にとすることが出来なかつた。併し幸にして周防の國艦の船頭村井喜右衛門が當船體を浮上らしめ、試みしものも、同船には澤山の樟腦を積み込み居たる爲に、潜水夫がその溶液の爲



俗に康平社と稱するものが即ちこれである。

その責任を明にした。長崎の市民は大に圖書頭志を憐み、その靈を諏訪社の構内に祀りてて圖書神明  
酬ゆることは出来なかつた。所以であつた。依て圖書頭松平は英艦出帆の翌朝、翌十八日未明を以て自己の責を任  
ずる。急に近國の大名に出兵を促したけれども、之も未到着せざる内、英艦は去つたので、遂に一矢をも  
残さる後、殘留するものは六七十人に過ぎなかつたので、如何にもすることも出来なかつた。依  
て松平中圖書頭は大に英人の無禮を怒り、直に各砲臺に砲撃を命じたけれども、諸番所の兵員は多く歸郷  
威嚇して食料品や飲料水等の供給を受ける後、蘭人入解し、十七日の書應ぜざれば長崎を砲撃すべしと奉  
らざるを知るや、出島和蘭商船を捕獲する目的を以て夫故に港内に蘭船の策として、長崎の中碇に泊る者あり、實は船長ハユルユーの指揮せる英國東艦フエント號で、佛國に隸する和蘭人を苦むるの一策と  
して、別三隻の武裝せる端艇を以て普ね港内を偵察し、翌朝に至りは端艇を卸して英國旗を掲げた。此巨虜  
館では大に喜び書き記し、遣人を遣はして之を出迎へしめしに、該巨船が悠々として長崎港外に來着した。出島の警報傳來へ傳られ、尋て英國國旗を樹上高く掲げたる巨船が悠々として早朝に至り、俄に異國船渡來  
の長をして蘭船の入津させざる理由書を差出した。然るに入十月十五日の早朝に至り、俄に異國船渡來

も人津せぬので、長崎奉行松平圖書頭康中は海上の見張を撤し、諸番所の人数をも減じ、出島商館  
右の如き次第であつたから、文化五年（一八〇八年）には、毎年六月頃來着する蘭船が七ヶ月を過ぐ  
難となつた。

で、バタビヤと日本との間を往來する蘭船は、大艦に脅威を感ずるやうになり、和蘭の日本貿易は益困  
百七年（文化四年）にはミント卿が新に英領印度總督に任じ、盛に侵略主義を發揮するやうになつた  
八三年には臺望殖民地在英人奪はれて、和蘭東印度實狀如何と顧みれば、千八百〇六年（文  
トをしてその王位に即かしめた。そして東に於ける和蘭國の實狀如何と顧みれば、千八百〇六年（文  
國皇帝の位に登り、千八百六年（文化三年）にはバタビヤ共和國を倒して王國と爲し、弟ルイ・ボナパレ  
是時に當り歐洲の形勢は如何であつたかといふに、千八百四年（文化元年）にはナポレオン第一世が佛  
が爲めに勘察に涉りて軍器を整へ、數次北邊に寇した。是から我北邊に漸く多事となつた。  
んだので、その部下たりしレゾサ・オスマ及びバタビヤ等の大に日本の處置を怨み、之に報復せん  
ので、三月十九日長崎を出帆して去つた。其後レゾサ・伯爵はシヤリヤを経る歸國の途中落馬して死  
受けなかつた。大使一行は大に憤慨したけれども、到底その目的を達するところの不可能なるを知つた  
見し、將軍の命を傳へて通商を謝絶し、露國皇帝の贈物も答禮をなすことと能はざるを理由として之を引  
亦大修繕を加へた。翌二年二月廿九日、目付遠山金山四郎が長崎に來着し、三月六日、大使を奉行所に引

却つてワルデナール等々を説得し、恒例によりて貿易を營むの權限をヅフに委託せしめ、その利益金をしたるころとあるを長崎奉行に告ぐべしと威嚇し、竊に五人の通詞にその事情を打明け、その助力を得て、待ちつゝあるを告げ、カツサにして強い彼に代らんとするに於ては英人が策を用ゐて入津を意圖さしめんと試みるや、ヅフはフエト號の狼籍事件以來日本人が英人を怨み復讐の機引繼を求むるや、ヅフは慨然として之を拒絶した。そしてワルデナールが食はすに利を以てその引繼を求むるや、ヅフは愕然として驚いたが尙ほ之を信すること出来なかつた。さればワルデナールが事務のた。カツフはゾフはゾフに代りて英人の爲めに出島貿易を經營せんが爲めに來りたるものなることを知つれ、品質して始めて本國は千八百七十年七月佛國に併合せられ、ジャバ島も亦千八百一一年英國に占領せらるゝに、ジャバ並に屬領地の總督ラフラスの名があつたので、ヅフは大に怪み、之をワルデナール及び、ハ。併しワルデナール等の舉動に何となく怪むべき點があつたが、商館長の書類を檢するに及へた。館長ワルデナールと蘭人フアラハム・カツサとが之に乘組んで居たので、ヅフは大に喜んで之を迎えを揚げた二艘の黒船が高鉾島の前以來着し、制規の手續を了して港内に進入した。そして元の出島旗があつたので、出島の蘭人等は皆飛び立つばかりに喜んで、翌日の午後一時頃には橋頭高く蘭國旗がかゝる所に文化十二年（一八三一年）六月廿七日の朝、深堀及び野母の遠見番所から黒船見ゆとの報が



「あつたと見えて、その回想録に「彼等は我等の窮迫を慰安する爲めにはその爲し得る限りを盡した」としめ、需むる所あれば悉く之を興へた。時の出島商館長ヘンドリック・キッツは深く之に感動し、之の供給した。長崎奉行は毎週三回は必ず人を出島に遣はして、何か不自由なものもなきかき得る限りの與へ得べきものは悉く喜んで之を許し、長崎會所は彼等の需むるものも何れにても出来得るものと對する態度は我國性は美德を遺憾なく發揮した。長崎奉行は荷も日本人の力を以て爲し得べきに靴に代へ、古絨緞を以てスボンを製する等の已を得ざるに至つた。併し此間に於ける日本人の彼等至りては爪哇より輸入したる食料品が全く盡き、靴衣類等も大抵破損して、日本の草履に毛皮を蔽ふかくて出島は全く孤立無援の境に陥り、文化七年以來商船の往來が全く杜絶したので、翌八年に歸し、ラッフルスは舉げられてその總督となつた。

月十八日、至り、蘭領印度總督ヤンセンが降伏したので、爪哇及びその附屬地は總て英國の領有にト一卿はラッフルスと共に兵一萬二千を率ゐてバタビヤに上陸し、八日バタビヤ市を占領したが、九月然るに千八百十七年(文化七年)七月和蘭國は遂に佛國に併合せられ、翌八年八月三日、英領印度總督ミッソが出来なかつた。

は英船に捕獲せられて長崎に達するところが出来なかつたが、翌七年には遂に一艘も長崎に入津すること一般文化六年(一八〇九年)にはバタビヤの和蘭會館は商船二艘を仕立てて日本に派遣したけれども、一



爪哇も亦再び和蘭國の領有となつた。

と稱し、英國は臺灣其他二三の要地を除くの外、臺灣に和蘭から奪ふた所の土地を悉く還附したので、臺灣にイギリス王ウイリアム第五の子オランダ王ジョージ第三が公歸國して王位に即き、ウイリアム一世に備ふる爲めに、和蘭とベルギーとを併せて新オランダに之を永中立國と爲し、爪哇總督を罷められ、千八百五十五年(文化十二年)にはウイソン會議の決議によりて佛國の他日の侵略に印度總督を辭し、卿の侵略主義は英國東印度會社の重役等反對によりて挫折し、ウイソンも亦八世の復古王政と和約を結びて歐洲は再び平和に歸した。一方印度に於てはミント卿が千八百三十一年に慘敗したので、英露等の四國聯合軍は千八百四十三年(文化十年)十月十九日、ナポレオン一世が本國の再興を祈りつゝある間に、歐洲に於ては千八百三十三年(文化十年)十月十九日、ナポレオン一世が再出島の急を救ふことが出来た。かくセント・ピット等が東の孤島に孤忠を守りて本國者たらしめんとしたけれども、ゾーは尙ほ頑として之を聴かず、また前年の例に據つて貿易を營み、文化十一年(一八二四年)にも亦ゾーは英船一艘を長崎に遣はし、カッサツをしてゾーの後任千九十三兩を支辨せしめた外に、彼自身二年分の役得料をも支拂はしめた。

ゾーは縦横の機略を振い、昨年までの商館の負債八萬二千六百九十九兩餘と本年の商館の經費五萬の内より文化六年以來出島商館が長崎會所に負へる負債の全部を償却することと承諾せしめた。かく





杉田玄白が解體新書を出版するに及では、西洋の研究實測の學の卓越せるものであるところを一般に  
 亦蘭書を讀むことを許されたので蘭學が段々熱心に研究せらるゝやうになり、安永三年（一七八七）に  
 野呂元丈に命ずるに和蘭の書籍を讀むことを以てし、延享二年（一七五五）には長崎の和蘭通詞も  
 希望して居るに記述して居る。その後寛保元年（一七四二）の頃、八代將軍吉宗が青木昆陽  
 んとするの意向を持つて居て、外國の歴史、醫術及び科學に關する知識を得んことを殆ど極端にま  
 らざる文明國民であつて、禮儀あり且つ知識を求むるに急なるが故に、自然に外國人と親しく交ら  
 に於て「日本人の性質中から其の自心とその好戰心を除く時は、彼等は世界の何れ國民にも劣  
 り、同年十月、我國を去つた所のヴェンデル・ケルン・エルが、既にその著日本歴史の序文中  
 日本人の知識に富み、外國の知識を求むるに急なることは、元祿三年（一六九〇）の秋、我國に來  
 してその選に當つた。果して當時の日本人は此の如く知識に富んだ國民であつたであらうか。  
 彼等一般に信ずる所であつた。そしてポルトガル・フランス・オランダの任を果たすに最適任者と  
 泰西の文化を日本に輸入して日本人の歡心を求め、その助力によりて研究資料を蒐集するにありと  
 所以でないことを彼等は能く知つて居た。可能性ある唯一の方法は博學識の學者を派遣し、  
 こと決して容易な事ではなかつた。金銭や威力を用ふることは日本に於ては決して此目的を達する  
 あることは勿論であつた。併しかなら當時日本は萬事秘密主義を執つて居たので、之を觀察研究する





泰西の新知識を獲得することを願ふものも亦多かつた。併しなから日本人の妄に出島に出入することば當  
が最も願著であつたので、この名聲は直に四方に轟き、來りて治療を乞ふものもあれば又教を請ふて  
し、請ふものあれば喜んで治療を施した。そして外科及び眼科は彼の最も得意とする所で、接せんと欲  
その職責は固より居留蘭人の疾を見るにあつた。併し彼は眼科及び外科は醫術を媒介して廣く邦人に接せんと欲  
に來着した。彼は來着早々から日本研究の事業に着手した。彼の本職は出島館の職員であつたから  
文政六年七月六日(一八二八年八月十一日)ポルトガル・フランス・オランダ・スペイン・ポルトガルは長崎  
我日本爲めには實に無上の幸福であつた。

を利用して日本の研究の資料を蒐集せんとしたのは誠に賢明な政策であつたといふべきであらう。そ  
當時の日本の先覺者が泰西の新知識を求むるの急なる以上述べたる如きものもあつた。蘭人等が之  
を當つたが、その多くは蘭語に通じ、皆新知識を得るに汲々たる有様であつた。述べて居る。

共に江戸に参禮した時のことを記して、彼等を訪問した日本人の内には多くは諸侯、家老及び學者な  
文政三年(一八二〇年)に出島館の第一員として渡來したフランス人は、文政五年(一八二二年)に  
興へたといふやうなことが書いてある。

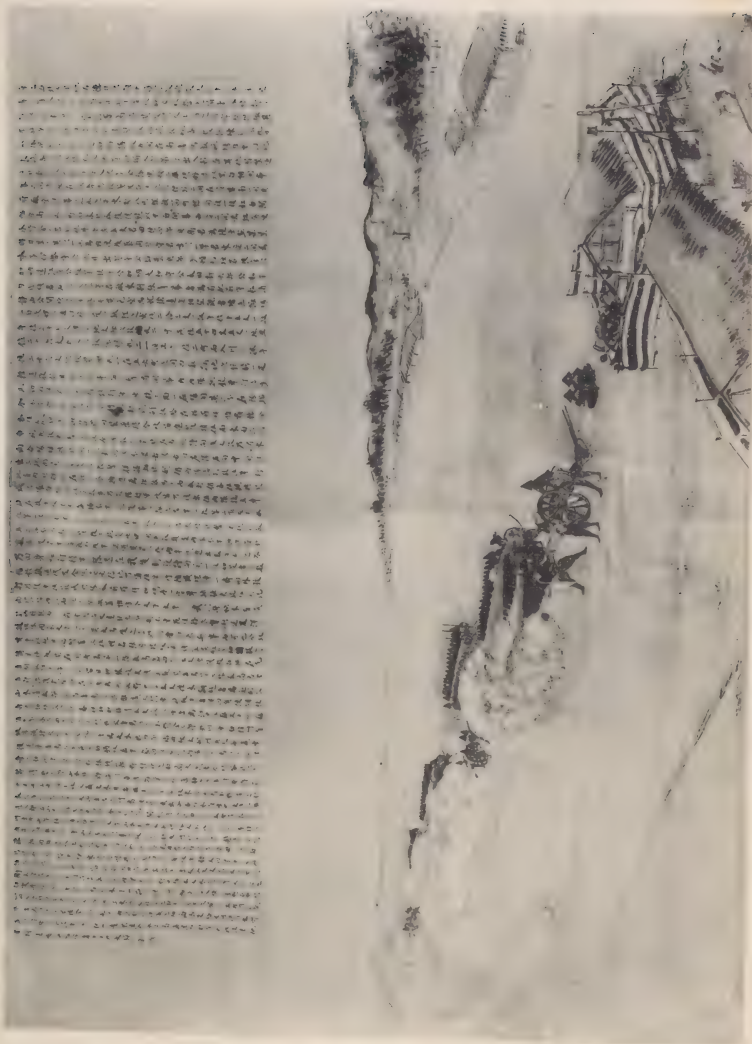
つたことや、重豪の次子、中津藩主奥平昌高の請にまかせてフランス・デ・リッパ・リッパといふ名を  
所望して、品川の薩藩邸前を通過の際、その幡幕を掲げしめ、家族及び家臣等と共に出て之を見送



445



武德州丸原に於ける砲術演習圖



高橋佐左衛門  
士生と碩  
日(本)米人

なる著述は我國の真相を世界に紹介し、幕末開國の際に及び多大の利益を我國に與へた。

勢を知ることを得せしめた。之と同時にシールポルトが歐洲に歸るのの後公にした所の日本に關する著辭

シールポルトの六年間の日本滞在は大に我學界に貢獻したのみならず、我國の先覺者をして世界の大大

十二月十八日(一月)に至り再渡を禁じて歸國を許された。

を始め三十八人の篤學者が此事件の爲めに死罪、遠島、改易等に處せられ、シールポルトは文政二十二年府の禁令に觸れたので、取調の結果禁制品は悉く沒收せられ、天文方高橋佐左衛門、侍醫土生玄碩等

幕府も此等の海防論に刺戟せられて稍戒心する所あり、天明五年（一七八五）勸定奉行松平伊豆守は寛政十年に西域物語及び經世秘策を著し俱に北方を防むるの急務たる所以を論じた。

明ものは續々とて輩出し、大原小金吾は寛政九年（一七九七）年北地危言、北海寓談を著し、本多利も禁錮せしめた。その事は焚毀せられ、其の身は幽死するに至つたけれども、その志を繼ぐ動するが如き弊もあつたので、寛政四年（一七九二）に至り、幕府は公儀を憚らざる所爲として藩に下動も忽にすべからざる所以を論じた。併し熱心の餘、其の言所往々にして詭激に走り、時に人を煽等に就きて海外の形勢を問ひ、頗る得る所あつたので、海國兵談、三國通志を著して海防の等が彼は北、蝦夷に遊びては親しくはなく露人南下の勢を觀察し、南、長崎に遊んでは蘭通詞及び出島の蘭人たれ、たので、國防を論ずるものが漸く現はれた。最も早く先づ之を唱道したものは林子平であつたを窺ふことが漸く露骨になつて來たと同時に、蘭學の研究によりて世界の趨勢も亦我先覺者に知られた結果、我北邊

## 第一章 洋式陸軍の濫觴と高島秋帆

### 第三期 幕末時代





將來に非常な危険が伴ふことは明であつたので、シーボルトの教育を受けて世界の大勢に通じたる將來に非常な危険が伴ふことは明であつたので、シーボルトの教育を受けて世界の大勢に通じたる國家に武裝を解除して來たのであつたから事なくして濟んだが、何時までも頭迷なる態度では國家に許さずして之を撃退したのは右の打拂令の結果であつた。モリソン號は平和的使命を示す爲めに、陸地へ來た。天保八年（一八三七）北米衆國政府が特にモリソン號を派遣して互市を求むるや、その上陸も地に渡來するところあらば、直に之を撃退すべしと命令し、據つて以て國家の安泰を期し得べしと考へた。牛を殺し、番人を砲撃するや、翌文政八年二月外船舶令發布し、異國船にして若し長崎以來の牧を以て彼等を拒絶し得るものもと考へて居たので、國防の充實に向つては餘り多くの注意が拂はれなかつた。そして文政七年（一八二四）即ちシーボルト渡來の翌年、英人等の一隊が薩摩の寶島に上陸して遣はして通商を請ふに至つた。然るに幕府の當局は未だ歐米各國の實力を知らず、微弱なる我海を遣はして彼等は薪水飲料を獲るの必要に迫られて、往々々に我が港灣に出入し、進んでは不便なつた。その事業が俄に盛になつたので、米國船を始め英國其他の船舶の我近海に出没するものが俄に多くなり、千八百五十五年（文化二十二年）の頃米國の捕鯨船が北太平洋に現れ、その有望なることが知られてから、唱した。

藩生君平等の如きは大力に攘夷論を唱へ、蘭學者杉田玄白の如きは世界の大勢を説いて大に開國論を主は、露人等は復讐的態度を以て我北邊に寇したので我北邊は益多事であつた。是時に當り平山行藏、

田玄白  
生君平  
山行藏

互市を請ふに至つた。そして其の使命を達せずして歸途に就き、サレソノが途中で死してから後第十九世紀に入りては露國人南下の勢は益盛で、文化元年(一八〇四年)には露使サレソノが長崎に來上人の慰撫と開拓とに着手した。

近藤重隆等をして蝦夷地を巡察せしめ、同十一年には松前氏の封地東蝦夷を收めて公領と爲し、相模、安房、上總の浦々々を巡視し、大に計畫する所があつた。ところが寛政五年沿海の諸藩に命じて警備を嚴にせしめ、自ら卓鞋を穿ち、辨當を携へて伊豆、國入ラッスマンが根室に來つて通商を乞ふたのも此年であつた。是頃松平定信が老中の首席であつた蝦夷地の經營の容易なるを知り、寛政四年(一七九二年)最上徳内をして蝦夷地を巡視せしめた。幕も水戸の儒臣立原萬が書を一橋保卿に上りて露人の憂ふべきを痛論したの頃であつた。幕も寛政の初めに至りては露國人の我北邊に侵入するもの益多く、千島に來往するものあるに至つた。端の時であつたからその建言は用ゐられなかつた。

其の患は測るべからざるものあらんことを論じた。併し其年に第十代將軍家治が薨し、内事多きは得撫島の近海までも來つて來つて恣に漁獵に従事しつゝある旨を復命して之が處置をなさるゝ露國人等は既に我が東加を奪ひ、内地に近き島々も追々に之を占領し、その南下の勢は益盛で、に命じ、その屬吏普請役山口鐵五郎等四人を遣はして蝦夷を觀察せしめた。翌年山口等は江戸に歸り

サレソノが  
長崎に來りて  
定信に  
上陸を  
請ふ  
事  
を  
知  
る



幕臣の一人に之を傳へしめたので、幕臣江川太郎左衛門、小曾根金次郎の二人がその傳を受けた。には守舊派の之に反對するものがあつて、直に兵制の改革を斷行するに至らざるも、尙ほ秋帆に命に泰西の武備を研究し、邦家の爲めに必要と認むるもあらば申立つべしとの命を下した。是時幕府内に供した。是に於て幕府は秋帆の心を火術に用ふる賞し、銀二百枚を賜ひ、尙ほ將來火術に限らずを携へて出府し、同年五月九日、幕命により武州臺徳丸原に於て洋式操練を行ひ、之を幕府の實見と爲し、同年二月大小の銃砲を持參して出府すべしとの命を秋帆に傳へしめた。

爲し、同年二月大小の銃砲を持參して出府すべしとの命を秋帆に傳へしめた。

守は之を然りと爲し、秋帆の意見書を老中水野越前守に進達したので、越前守も亦之を見えて理ありと臆を囁むも及ばざるの悔あらんとて、軍事の大改革を斷行するの必要あるを論じた。田中加賀主として兵器の古風に戦鬪に堪へざるに因る、我國も亦今にしてその兵器戦術を改めざれば遂に隣を呈し、清國が英國の爲めにくる大敗を受け、地を割きとふの已を得ざるに至りたるは、乞ふの已を得ざるに至つた。秋帆は之を聞て殷鑑の遠からざるを想ひ、長崎奉行田中加賀守意見書を呈し、是時に當り清國は阿片輸入のこより英國と兵を構へ、連戦連敗、天保十一年に至りては遂に和を苦心研精の結果漸く自得する所があつた。

め、或は出島の蘭人に就きてその疑しきしを質し、或は家録を集めて之が實地演習を試み、修繕たる

人に注文したる野戰砲二門を譲り受け、或は兵術に關する蘭書を購入し、通詞等を集めて之を講せし  
 同年奉行牧野長門守の許可を得て、新式忽發砲を求め、又同僚久松新兵衛より父碩次郎が蘭  
 年、時の長崎奉行大草能守の許可を得て、新式臼砲及び右打ケル銃數十挺を蘭人より購入し、  
 西洋兵術の最も所は火器にあるを知つたので、壯年の頃より篤く火技の研究に没頭し、天保三  
 年、蘭の兵術を研究するに及んで、その精妙なる、到底和漢の兵術の及ぶ所にあらずを覺つた。そ  
 流を研究したが、明の威繼光の紀効新書などを讀むに及び、並に地役人の範であつた。秋帆は始め  
 高島兩家は萩野流を以て、藥師家は自覺流を以て、並に地役人の範であつた。秋帆は始め萩野  
 政中坂本孫八郎の傳へた萩野流の術と町年寄藥師寺久左衛門が工夫した自覺流とが流行し、高木、  
 が多かつたので、夙に世界の大勢に通じ、國防の一日も忽にすべからざるを知つた。是頃長崎で寛  
 高島四郎太夫秋帆は長崎町年寄の家で生れ、早くから對外貿易の要衝に當りて外人と接するの機曾  
 端緒を開いたものがあつた。それは我長崎が産んだ偉人高島四郎太夫秋帆その人であつた。  
 研究の結果を幕府當局の實際に供して、遂に迷夢を覺せんことを期し、遂に我國に於ける洋式陸軍の  
 外の事を談するものなまでに至つた。是時に當り自ら巨資を投じて新鋭なる泰西の武器を購入し、實地  
 その目的を達せざりしのみならず、却つて奇禍を買ふて非命の死を遂にこれより天下復た公然海  
 高野英は、渡邊華山と共に書を著し、之を諷示し、要路の人々を覺醒せしめんとしたけれども、

高島四郎太夫秋帆は長崎町年寄の家で生れ、早くから對外貿易の要衝に當りて外人と接するの機曾  
 端緒を開いたものがあつた。それは我長崎が産んだ偉人高島四郎太夫秋帆その人であつた。  
 研究の結果を幕府當局の實際に供して、遂に迷夢を覺せんことを期し、遂に我國に於ける洋式陸軍の  
 外の事を談するものなまでに至つた。是時に當り自ら巨資を投じて新鋭なる泰西の武器を購入し、實地  
 その目的を達せざりしのみならず、却つて奇禍を買ふて非命の死を遂にこれより天下復た公然海  
 高野英は、渡邊華山と共に書を著し、之を諷示し、要路の人々を覺醒せしめんとしたけれども、

國貿易の開放を布告し、三名の商務官を清國に派遣することとし、海軍大佐サビーエル男爵を清國駐論が在清英國人の間に沸騰し、遂に之を本國政府に訴へたので、千八百卅三年(英保四年)英國政府は清論がその方法が餘り卑屈であつたので、之を一般に開放して大英國の權利を擴張すべしとの議たる勢を示した。今その由來を尋ねるに、英國の支那貿易は古來英國東印度會社の獨占事業であつたこととはなかつた。たが天保の未に至りては遂に兵力に訴ふることも、その目的を達せざれば止まざること、英國が我國との通商を希望したことはその由來する所は久しかつた。併しなから未曾之を強要し述せん。

に至りては、特に使を遣はして直接我に忠告するの已を得ざるに感ずるに至つた。左にその由來を略して總えず風説書を長崎奉行に提出せしめて我國の注意を喚起することゝ意なかつたが、天保の未に彼等が我國の開港を希望するところは年々益切なるものがあつたので、和蘭國王は出島館長を彼前節にも述べたる如く第十九世紀の初より、歐米諸國の船舶の我が近海に出没する者甚多く、從つて

## 第二章 和蘭國王初度の開港忠告

江川太郎左衛門の説を容れて秋帆を赦した。是に於て秋帆は再びその志を伸ぶることを得るに至つた。下の形勢は一變し、嘉永六年(一八二四年)來りて互市を迫るに及び、幕府俄に人材の必要を感じ、遂に



護送せしめた。爾來十有餘年の間秋帆は空しく縹緲の内に國家の將來を憂へつゝあつたが、その間に謀反の報告を得て之を信じ、天保三十年十月、長崎奉行に命じて秋帆を檢舉せしめ、尋で之を江戸に遣はし、鳥居耀藏に議するに秋帆に謀反の企あることを以てした。水野越前守は鳥居耀藏より秋帆に寄福田九郎兵衛は俄に彼の下の立たねならぬとてなつたので、嫉妬の餘り本庄茂平次を江戸町に認むる所となり、秋帆は與力格に進み長崎會頭取に任ぜられた。是に於て從來の上に立つた町かゝる秋帆の命令は天下に轟き、その火器の研究及び唐船商法の改竄に多年盡瘁したる功勞は幕府得るに至つた。

心は漸くこゝに報いられ、その多年の希望たりし我國の兵制改革の事業も亦漸くその曙光を認むるを術を研究し、子弟を教練し、銃砲を鑄して國防の策を立て、大に老の信任を得たので、秋帆の苦より人を遣はして秋を秋に請はしむるのあり、江戸に於ては、その門人江川太郎左衛門が藩雖も執心の輩に對しては勝手を傳授することを得せしめた。是に於て長崎に於ては各藩たので、天保十三年七月、黒船打令を廢すると同時に、秋帆に命を傳へ、直參は勿論、諸家の士であつたので、幕府も亦從來の如く頑迷なる方策のみにては、到底國家の安泰を保持しがたき覺て是時に當り東洋の風雲は益に急にして我國の如きも何時如何なる國難に遭遇するや測りかたき有様

夷秋と罵り、醜辱と嘲り、佛敵の外道と斥け、相競ふて此等の言論文章を公にし、社會の人心は之に敗れて以來、一人として公然海外の公談することゝを談する者なきに至つたので、一たび外人の名を耳にすればさう、蘭學者等は林子平が一たび海國兵に敗れ、高野英及び渡邊華山が再び夢物語及び憤機論に過ぎ、是時に當り我國の政論を指揮せしものは儒者と國學者にして、世情を支配したるは神佛の教義に過ぎ、若し開國に意あらば更に腹心の者を遣はして意見を陳述せしむべしといふにあつた。

めに圖るに、自ら進んで國を開き、英國をして乗ずるの機ならしむるに如かず、而して日本政府に支那に起りたる阿片戦争の顛末を叙述して、日本の開國の眞の已を得ざる所以を論じ、此際日本の爲、その親書と贈物とを受け、翌日之を江戸に轉送した。親書の大要は、先づ多年の厚誼を謝したる後、弘化元年七月二日（長崎に着いた。）是に於て長崎奉行伊澤美濃守は幕府の特命を受けて、弘化元年八月廿日（コラスは本國の命に接するや、七月廿一日バレンソノ號に座乗してバタビヤを發し、八月十五日めた。）

贈物とをバタビヤに送り、軍艦バレンソノ艦長ハーパー・コラスに命じ、之を日本に送らしに防がしめんとは、多年の厚誼に報ふる所以なりと考へたので、千八百四十四年（弘化元年）親書とに至らんことを恐れ、此大勢を日本の要路に説明し、日本政府をして自ら進んで國を開き、禍を未然に和蘭國王クルメルム第二世は此大勢を見て、日本が無謀にも英國と事を構へ、遂に清國の轍を履む





十月、幕吏を追跡せられて自殺した。是より公然外國の事情を述べて國策を論ずるものは殆ど其のしのみならず、華山は捕へられて獄中に死し、長莫は一時檢舉を逃れたけれども、嘉永三年（一八五〇年）のその結果の恐るべききを切言した。然るに二人は之によりて幕府の當路者を覺醒すること能はざりし、不得策なるを爭ひ、長英は夢物語を、華山は小説及び憤機論を著して幕府の處置の誤れるを諷し、擊攘するに決した。そこでシーボルトの教育を受けた高野長英及び蘭學者渡邊華山は之を開いて之を長崎奉行は之を幕府に報告したので、水野越前守の内閣は文政八年の外船打拂令を實行して之を先きモリソンの號の日本渡來の決することとするや、蘭人は直に風説書を作りて之を長崎奉行に報告した。そ兒島灣内なる山川港に入つたが、このうちでも砲撃せられ遂に空しく歸國することとなり。是より九月、幕吏は追跡せられて自殺した。是より九月、幕吏は追跡せられて自殺した。

へからざるを感するに至つた。

衆國は遂に大なる決心を以て開國を迫らんとするに至つたので、和蘭國王は再び忠告の勢を取らざる要路を動かすに至らざるしは既述の通りであつたが、その後日本開國の機運は刻一刻に進み、北米合和蘭國王が弘化元年（一八四四年）に特使を馳せて我國に開港の已を得ざる所以を忠告せしも、我國の

### 第三章 和蘭國再度の開港忠告

が如何に頭迷であつたかを物語るものである。

し、故に自今以後希くば音信を發する勿れといふ意味の文句があつた。この文句は如實に當時の幕府、その忠告を謝絶した。そして文中に和蘭國には通商を許すも、未曾て之に通信を許したることなて、和蘭政府宛の返信を作り、和蘭國王の好意は謝するも、祖法は之を變ずべからざる所以を述べて、和蘭國歸國せしめた。そして翌弘化二年（一八四五年）六月朔日、阿部正弘以下四人の連署を以て四日出帆歸國せしめた。その不取敢長崎奉行に命じて厚くバレンバレン以下を勞ひ、同年十月容守正弘が老中首席となりて天下の政務を綜理しつゝあつたけれども、天下の大勢は未だ開國説を容野越前守は去天保十四年に其の職を退き和蘭國國王の使節が來た際に開國主義に傾ける阿部伊勢水よりて陶治されつつあつたので、和蘭國王の忠言も却つて爲にする所あるもと疑はれた。されば水

て日本に使節を派遣するの議が決せられ、國務卿クエブスカーが千八百五十一年五月十日附を以て年)嘉永四年(アウクラクソフ號が漂流日本入の一群を救助し、桑港に歸港したので、之を送するを名と爲め、暴風等の際救助を受けるものが俄に夥しい數に上つたので、此等の人々が薪水飲料の供給を受けるかゝる米國人の極東に赴くものが増え、俄に夥しい數に上つたので、日本の開港は焦眉の急となつた。かかる所に千八百五十一年から、從業者の數も一萬人を下かつた。加之同じ頃から米國と支那との貿易も亦俄に隆昌に赴いた。これ、捕鯨業が好望の頂上に達し、米國の資本一千七百萬以上は極東に於ける捕鯨事業の爲めに投ぜられた。是時、北太平洋の鯨は殆ど盡され、北太平洋からオホシツク海にかけて眞甲鯨が澤山居る。

迫るの時機は既に到着した。そしてその手段は兵力を以て之を脅するをも得策とす」と述べてたゞ遂に之を引渡すことになつた。この成功により味を占めたタグリベはその復命書中に「日本に開國を託して送還すべきを以て、漂流民受領の爲めに特に船艦を派遣するところなかるべし」との條件で、之に應ずる色なかりしも、出島商館長が大にその間に斡旋して、「自今漂流民は總て唐船又は蘭船で内港入り、艦長タグリベは直に書を行奉りて呈して漂流民の引渡を要求した。奉りては怒りで四月十七日、タグリベは長崎に着し、外國船は總て港外に抜錨すべしとの規定あるに拘はらず、進





し。されば戦亂を避くる爲め、長崎の港を開き、こゝくに彼の國の重役を駐在せしめ、その居館を設けよ。要旨は「合衆國の今度の計畫には深き決心あることなれば、その目的を達せざる間は到底去ざるその旨は合衆國の今度の計畫には深き決心あることなれば、その意見を書を以て提出せしめしに、その是に於て長崎奉行はドッケル・キユルチウスをして、その意見を含め置き、委任は同入より高等法院参事官ドッケル・キユルチウスを出島商館長に任じ萬事を任せられたれば、委細は同入より聽取せられたことであつた。

高を破ることなくして禍を未然に防ぐことを得ん。依て特に穩健着實にして政治に馴れたる蘭領印度和蘭國王は多年の厚誼に感激するの餘り、貴國の爲め一に策を案出した。その方策に據れば貴國の國蘭領印度總督に旨を傳へ、此書を作り、新任出島館長をして之を日本執政の左右に致さしむる。ぬ所がある。和蘭國國王は之を聞て深く貴國の爲めに憂へ、多年の厚誼に對し厭止すべからざる爲し、遣する軍艦も蒸気船帆船等を取ませ多敷の由なれば、穩かに通商を請ふの考なるや頗る疑はざるを得不得し。日軍艦を貴國に派遣して通商を請はんとするもの如くなく、米元來武の國民にて其の派不詞をして之をを翻譯せしめたるに、その要旨は「近頃歐洲にて専ら風評する所によれば、北米合衆國は出島に着し、右に述べる覺書を書を長崎奉行に提出した。長崎奉行は幕府の特許を得て之を受領し、通スルチウスは千八百五十二年六月、バタヴィヤを發し、同年七月廿一日（嘉永五年六月五日）

1844年





於て露國と英佛兩國との間の平和が遂に破れたるの情報に接したので、急ぎ海上を發し十二月月上旬に味を認めたる書狀を遣し、十月二十三日、長崎を去つて支那に向ふた。然るにフーチン海に於て觀察するの必要を認め、再渡來の際江戸の委員は來着せずば、直に江戸に至りて談判すべしとの意を偶々露國と英佛兩國との外交關係が漸く切迫したるの情報に接したので、一旦清國に至りて形勢を露使フーチン海に在りて江戸より委員の來着を待ちつゝありしか、その未だ來着せざるに明年を約して去つた。

理由で、明年長崎に來り回答を待つべしと告げたので、ペルリは六月二十二日書翰の受領書を得たる後の物を受けしめ、且つ事極めて重大にして、而かも將軍に懼り急ぎに協議を遂ぐるに困難なりとの里濱に外資引接所を設け、六月九日浦賀を行田氏榮及び大學林健をして之を引見して圖書及び方ペルリ渡來の報あるや、幕府は諸藩に命じて沿海の警備を嚴にし、有司と會議の末、遂に相模の久保めた。

惠として開港を請はんにとするにあらずして權利として之を要求するの決心で、その態度は頗る峻烈を思ふ如く、我帝國の領土内に海軍根拠地を獲得せんとするの野望をもも抱懷して居た程であつたから、思ふ守と會見し、ク、運送船メシコ及びスクナー型汽船一隻を率ゐて長崎に來り、長崎奉行大澤豊後

と放言した。その後一ヶ月有餘を経て、七月十七日には露國海軍中將フーチャーヤチヤチヤ亦バルガ及び賀に渡來し、要路の大臣に見えに國命を達せんとを求め若し聽かれずば兵力に訴へても要求すべしルが軍艦サクスハフン及びシシツビ武裝汽船フヤマス及びサウトガを率ゐ、威風堂々として浦嘉永六年（一八五三年）は我國にとつては實に國家多事の年であつた。六月三日には合衆國水師提督へ

#### 第四章 親和條約締結

日暮、大砲を發射したので、上下震駭して色を失ひ、三百年來桃源の夢に至りて初めて醒めた。の時の時應接へた。然るに嘉永六年三月三日には米艦として浦賀沖に現はれ、十日江戸灣に入航、かすといふことに一致した。そこで正弘は竊に長崎から通詞の事に慣れたるのを召喚して米艦來航の始から護りて彼書を受け、一旦退去せしめて後、廣く群議を採り、國是を定めて再來に備ふる如をして處置を議せしめた。然るに衆議も亦祖法は改め難けれども、今直に抵抗して危を冒さるゝに顧みて開戰到底不可能なるを知るにつけても、敢て自ら發言せず、同僚牧野忠雅と謀り、諸有司を許すを得策とすべしといふのであつた。右によつて近く米艦の來りて開國を迫るべきことを知るや、阿正部は海防の薄弱と用度の不足をけしめ、貿易は江戸、京都、大坂、堺、長崎の五個所の商人に限り之を營まじむる等の程度に於て之

發、全權委員林に對して十七七發の祝砲を發し、天地も爲めに震動するばかりであつた。ペルリは林全  
へ、全權委員と共威儀を整へて上陸し談判所に入るや、米國艦隊よりは日本の主權に對して二十一  
隊の音樂隊とは端艇二十七隻に分乘して上陸し、海岸に整列してペルリの上陸を待つた。既にして  
愈談判開始の時至るや、九隻より成れる米國艦隊は横濱港内に戰列を作り、正装せる五百人の將卒と  
行澤政義、目付鶴殿、長銳の四人に應接を命じ、爲めに新館を建てしめた。  
遷延せ直に江戸に入りて政府と談判せんと主張した。幕府は大學頭林を、爲めに新館を建てしめた。  
艦泊所より江戸に近きところの碇泊所に碇泊した。二十五日、下六、八、十、十二、十四、十六、十八、二十、二十二、二十四、二十六、二十八、三十、三十一、の艦隊八隻の艦隊を發し、十日江戸灣に入り、前年  
かゝる所に安政元年正月（一八五四年二月）の艦隊八隻の艦隊を發し、十日江戸灣に入り、前年  
かゝる所から傾き、正面の開國の國を主張するもの始皆無であつた。  
又は制限を附して貿易を許すべしと論じたものは九藩に過ぎず、安藝、彦根の二藩は拒否を明言しな  
四藩は暫らく要求を容れ、軍備の整ふを待ちて拒絶すべしと論じた。そして要求を容るべしと論じ、  
薩摩以下の四藩は決答を延期し、軍備の整ふを待ちて拒絶すべしと論じ、宇和島、加賀、仙臺、肥後の  
一家は開戰を賭して拒絶して、各意見を示して、桑名等の強藩十  
有司に示し、二十七日、之を三及溜間諸藩主に示し、七月朔日、自餘の諸藩主を城内に召集し、



ビ、アームス大統領内閣の優柔不斷を罵倒せる書面を本國に送つた。

十四日第一回の會見を爲し、その後數回の會見を重ねたが、要領を得ないので、ブーチャチソは江戸の十せしめ、開港及國境劃定のことは三五年後まで延期するの方針をとつた。筒井等は嘉永六年二月書に對する返書を作り、之を筒井政憲、既川路聖謨の兩全權に授けて長崎に赴き、ブーチャチソに交付し、幕府は將軍家慶應に驚し將軍家定尚ほ効冲なるにより、老中連名にて露國の國

を派遣して我に通商を求めたことは既に述べ通りであつた。けれども戦争が、ヤミヤミと戦つてゐる、  
 英露の兩國は固より風に我の通商を希望し、露國の如きはバルトと始めて同時に、  
 する旨を通知した。

ことを説明し、日米條約書の謄本を交付し、下田、函館の二港に於ては和蘭人をして該條約に均霑せ  
 求に應じて許せし所は船艦の必需品を供給するに止まり、貿易は依然和蘭に限り之を許すものなる  
 米國との和親條約成るや、安政元年七月六日、幕府は出島の和蘭商館長にその旨を報じ、米國の要  
 を交換した。

十四年三月三十一日（一月）を以て條約に署名し、安政二年正月五日（二月二十五日）下田に於て批准書  
 已を得ざるものも認め、調印に決した。双方の委員は再び横濱に會合し、安政元年三月三日（千八百五  
 條約の内容が一定して、林等決を閣老に請ふや、齊昭を始め閣老等は頗る不満なりしも、遂に  
 第十一條には、調印より十八ヶ月の後に至り、領事を下田に置くことを承諾した。  
 取引すべからざる（といふ）規定して自由互市は之を許さなかつた。そして第九條には最惠國條款を設  
 と規定し、且つ「新水、食料、石炭、並に缺乏の品を求むる時には、其他の役人に取扱ふべく、私  
 合衆國の船右南港に渡來の時、金銀錢並に物品を以て、<sup>地</sup>入用の品、相調候を差許候」  
 を以て、長崎に代へ、尙來三年三月以後米船の箱館に入ることと承諾した。併し貿易の語は尙ほ之を用ふる

三



和蘭國旗の懸れるは出島和蘭商館なり。



長崎役所景

長崎海軍傳習所は此内に設けられたり。

保護した。かくる事情の爲めに日露間の和親條約の締結は大に遅延し、十二月十一日至りて漸く保た。依て幕府は戸田村で露人を助けて新船を造らしめ、使節一行は玉泉會館に止宿せしめて懇切に之をた。たので、戸田に至りて之を修復せんとて廻航中、伊豆御崎を廻りし際、艦内浸水して遂に沈没した。向つた。然るに同年十月四日、下田に大海嘯が起り、ブーチャーの乗艦デナサが艦底に損傷を生じ、川路の兩談判委員は下田に於て彼を待ちつゝありたいので、已を得ず危険を冒して下田、井、の襲撃を恐れ外國船の出入をせざる港灣を選んだのであつた。併し大坂では談判を拒絶せられ、露使ブーチャーは安政元年九月十八日乗て大坂に入津した。蓋し英佛聯合艦隊を開くことは之を許し、同年八月二十三日遂に調印を了した。

を興ふが爲めに日本を開くことは之を拒絶したるも、糧食新水の爲めに、長崎、函館の二港を督に其要求を書を面にて提出せんとを求め、爾來三回の談判を重ねたる後、戦争の場合に英國に便利八月八日、幕府は長崎奉行に談判の全權を委任したので、奉行は八月十三日第一回の會見を行ひ、提とするにあらつた。依てスターケングは貿易のことは請はずして日本に出入するの許可を求めた。めて長崎に入津した。その入津の目的は露國の軍の艦が若し日本に在らば之と戦ふの許可を得ん爲ることが出來なかつたが、安政元年七月十五日至り英國海軍提督スターケングは軍艦四隻を率ゐる右の兩國は絶えず交戦状態にありて、互に相警戒するを要したるが爲めに、米國の如く十分の活動を

[illegible]

第五 長崎の海軍傳習所と鐵所

○ 247 丁亥 時







かくて愈々海軍傳習方を長崎に設くることとなり、長崎奉行所の二なる西役所<sup>長崎縣臨時所在地</sup>の今に在

年八月二十五日受領の手續を了へ、後之を觀光丸と改稱した。

渡來した。軍艦二隻の内、一隻はスパーペンク、和蘭國王は之を日本政府に寄贈したので、艦で安政二年(一八五五)六月七日和蘭國の蒸汽軍艦二隻、長崎に入津し、招したる海軍教師が此軍艦を長崎に設くることとなり、教師の派遣方を和蘭政府に依頼した。

深く幕府の要路者を感動せしめたので、海軍創設の議は直ちに決せられた。そこで不取敢海軍傳習方を右に述べた出島商館長ドッケル、キルサス、ハルサスの忠告と、ヘグットの艦將フアビュスの意見書は、本政府にして若し海軍傳習に意あらば適當なる教師を派遣するも可なりと書添へた。

之に關する詳細なる意見書を徴して、之を添付した。フアビュスの意見書は懇切詳密を極め、且つ日着の曉には直之をを活用するの便あるべしとの意を述べ、更に軍艦ヘグットの艦將フアビュより、れず。故に軍艦來着前に蒸汽船の運轉法及び軍艦の指揮法を傳習せられは如何。さすれば軍艦來着あることを得べし。去りながら之を運用するの藝術を知らざれば軍艦來着するとも無用の長物たるを免る。見ること早く御希望に副はんことを熱心に考慮しつゝあるに到着し居らざるは事實なるも、和蘭國王は一疏し、更に筆を轉じて「御注文の軍艦が未だバタビヤに到着し居らざるは事情あることとを述べ、海軍輸入の運延を辯





景のむ望を崎長りよ所鐵製浦ノ飽崎長









北米合衆國がペルリを派遣して我に開國を迫らんとするや、和蘭政府はバタビヤ總督に訓令し、所

## 第六章 初度の日蘭條約

前身である。

事に着手したけれども、徳川幕府の政治中には竣工するに至らなかつた。是が今の長崎三菱造船所の造船所を改稱し、唐人番頭池邊龍右衛門等五人がその擔當を命ぜられ、金二萬七千餘兩を投じて工造船所の浦製鐵所も鐵製所も亦神戸操練局に附屬するところとなつて、元治元年（一八四四年）正月、軍艦製造所を餘の地を關いたけれども、文久三年五月、神戸軍艦製造局を設置すべしとの命があつた。文久年中立神郷に軍艦製造所を新設するの計畫があつて、地ならしを爲し、海面を埋立てて一萬坪にして大小數種の砲を製造した。

式を擧げた。それから阿姆斯特朗式鐵條砲を鑄造して舞臺御用となし、又は諸藩の需めに應じた。文久元年（一八六〇年）三月二十五日に至り、漸く先づ竣工したので、同二十八日を以て落成した。長崎製鐵所は右の如く幾多の困難に遭遇し、資金不足の爲め工事の進行も甚遅々として進まなかつた。浦製鐵所の副業として五金の器物を製作せんとすることを建議した。

て、財政上到底實行不可能であつたからである。故に萬延元年（一八六〇年）國部駿河守は新に銅山を採掘し、砲

から佐賀藩から献上した九萬兩の機械を据くるには少くとも四五萬兩を要するは疑なき所であつた。幕府の購入した諸機械類は原價一萬七千兩で、之が爲めに要した普請及び据付料に四萬餘兩を要した時、此命令は當時奉行の最も苦心した所であつた。何となれば奉行團河守の見込にば當時なる志を嘉し、機械到着の上は速に長崎製鐵所に据付け、事業を擴張すべしとの命令を長崎奉行に下した。また到着せぬ内に幕府に献上した一事であつた。幕府はその内情を知らずして之を受納し、その奇特の一方から湧き出でたそれは佐賀藩が曾て九萬兩を投じて和蘭に注文した製鐵機械を持てあまして、は製鐵所の工事は七分竣工して奉行等も稍安堵の思を爲しつゝあるの際、思ひ設けざる困厄が他崎奉行荒尾石見守は之を幕府に建議したけれども採用せられなかつた。延元(年一八六二)の春に至り建設は實際上大に必要であつた。併し經費約五千兩を要する大事であつた爲めに、安政五年四月長崎の時、幕府よりは觀光丸の汽罐に損傷を生じたれば長崎に於て修復すべしとの命があつたので、同時に浦の海濱に長三十二間、幅八間、水平二上間、水平下四間の船渠を設くるの必要を建議した。此計畫も亦思ふ程の利益を擧ぐることが出来なかつた。和蘭人は製鐵所附屬として飽も、是に於て鑄物製造所に於て鐵器及び銅類を製造し、其の利益を以て損失を填補せんとしたけれどもなかつた。

納金をもも使用し、尙その上に國幣より支出を仰がざるから始めるまでとなり、奉行の苦心は一通りで





軍歴史「に於て我國海軍の術、歐式に準據して興るもの、當時の執政及び要路に當る者の深く深く往來我が海軍の創設に就きて懇切なる注意、韓旋と深く我が當局を感動せしめた。勝舟海伯はその「海我國の爲めに致したる懇情は決して我國民の忘る能はざる所であるが、特に前に述べたる如く、感動せしめ、遂に自ら進んで各種の利權を彼に割譲する已を得ざるを感ぜしめた。抑和蘭國が多年かくて和蘭政府の期待は將に水泡に歸せんとした。我が和蘭國の我國に對する好意は深く我が當局を條約を締結するの資格なるを以て之を拒んだ。

應じなかつたので、更に長崎奉行と談判せんとしたけれども、長崎奉行も亦出島館長にはかゝるウスは此條約案を提出して幕府より全權委員の派遣を請ひ、之と談判を開始せんとした。幕府は之を凡そ日本と貿易せんとする他の各國にも、同一の條約を適用すべきものとした。ポ・ケル・ユ・キ・ル・ス下、從來定められたる五箇所商人と稱するの特許商人と貿易するの主義をとり、その第五條に於て、條約を締結せしめんとした。此條約文に於ては長崎を日本唯一の貿易港と爲し、長崎奉行の管理のル・キ・ユ・ス・ル・スをして日本府に談判し、出島の閉住と貿易上の煩瑣なる種々の拘束とを解き、新めたことは既述の通りであつたが、其時和蘭政府は開國の前提として別に日蘭條約案を作り、ポ・ケル・キ・ユ・ス・ル・スをして齎らして長崎に到り、開港の已を得ざるを説かしめ、同時に參考として條約案文を提出し、之を請ふ。記都督事記して覺書を作り、爪哇高等法院參事官、ポ・ケル・ユ・キ・ル・スを出島館長に任じ、





前に述べたる如く、英、露の兩國が我國に通商を求めんとするの念は甚盛であつたけれども、彼等

中互甲目 喜子

安政四年六月には條約の人民に長崎市中に上陸遊歩することを許可した。

前諸色賣込方へ持參致し代錢請取其段乙名共迄急度相屈可申候。

民へ左の如き布達があつた。

ては長崎市中に於て直に内地人の店舗に就き物品を購入することを得ることになつた。其時長崎市に至りして居る是より和蘭人は長崎市中心に出で自由に散步することを許され、翌安政三年十二月に至り十八條を議定せしめ、同月廿二日調印を了へた。是時の條約書の原本は今既長崎圖書館の所藏に屬する津する和蘭船に對する取扱を一變ずるの必要を認め、安政二年二月、島府は出住人及び長嶼に入下田及び箱館では既に外人から遊歩を許した前にもあるので、幕府の出住人と見做す以上、その上を出島在住の限内から通窮なる思想をなさむと亦決して出來なかつた。この邊りには日本最初の洋式海軍が來たのであるが、此等の教官をして従来島に閉居せしめた如く同様にして居るべき生活をするや否やは勿論であつた。そして一部の蘭人を優遇することに違ひなく、

(續)

を聘し藩人として就て學ばしめ、交深く米の文物武備に注目し、先に幕府の諮問に接するや、官爲とし、阿部老が正睦を推薦したの外は、正睦は陸軍の實用に適すると思ひ、蘭醫佐藤然爲とし、安政三年十月十七日、海防掛の外に外國貿易御取扱ふ官職を設け、堀田正睦を以てその長とし、是時に當り阿部老は病氣で劇務に勝へなかつたので、佐倉の藩主堀田備中守正睦を薦めて老中と反對した。

一、日(一八五六年八月二十一日)を以て下田に來着し、直接府の大官と談判せんとし、阿部閣老は海防掛  
 及び重立たる有司の意見を見せたるに、入府謁すること反對の聲が高かつたので、先づ井上清直  
 (信濃守)及び中村時萬を下田奉行に任じ、別に付岩瀨忠を下田に遣はしてハルスの言ふ所を聴か  
 しめた。ハルスは諄々として世界の趨勢を説き、日本の長計を論じ、自由市を公許するの實に已  
 むべからざる所以を辯明した。岩瀨は當時の有利中、最も善く西洋の事情に通じた人であつたから、  
 ハルスの説に賛成して、自由市の事は内議に歸りて閣老等を歴訪し、その意見を述べたので、閣老等  
 も皆其説に賛成して、自由市の事は内議に歸りて閣老等を略一決定したのであつた。併しなから阿部  
 閣老は人心を動搖せしめんことを恐れてハルスの入府を許すこととを躊躇し、徳川昭正は正面から堂々として入府を

するの全權を委任した。ハルマスはドッケル・キユルチウスが香港總領事ボツリツの傳言を傳ふるの總領事に任じ、外交事務官を兼ねしめ、且之に日本との條約を修正して完全なる通商條約を締結が漸く高かつた。是に於て合衆國政府は條約修訂の必要を感じ、クソツセン・ハルマスと日本駐在米だ通商を許すの規定なきを理由として之を拒絶したので、米國に於てハルリ條約を非難するの聲を奏して本國に歸るや、米國の商人等は通商の目的を以て陸續に田下渡來せしに、下田奉行は條約にかゝる所に合衆國から亦強硬な談判を持込んで來た。初め安政元年ハルリが我國との談判を効して通商許可の已を得るべきを論じた。

及び岡部駿河守(常)・ドッケル・キユルチウスは提案を進ずると同時に、各々内申書を閣老に呈目(前意)三和蘭領事の資格を以て一書を提出した。依て長崎奉行川村對馬守(修)・目付永井玄蕃頭(前意)十館長に對しては更に書面を以て要件を申出さしめ、通せしと通知し、ドッケル・キユルチウスは七月二十市を爲し得る爲めに日蘭條約に追加したきを申出でた。依て長崎奉行は之を幕府に上申し、且つ商を敷衍し、且つ本國政府の訓令に由り、出島に於ける從來の貿易法を一變して、同國人が自由互目(後七)其後七月二十日出島館長ドッケル・キユルチウスは長崎奉行川村對馬守に面會を求めて右の右の書面目でもあらし、また御用を勤むるにも都合がよいといふのであつた。

た。出來得べくば和蘭國の吹擧を以て外國通商を許さるやうにした。左様になれば和蘭國の面



けたことがない。和蘭人は多年渡來して之に慣れて居るから、左までも思はぬけれども、他國の人の折々外國に遣はさるる書翰中にも鬼角命令的文句があつて、依頼するやうな文句は曾て見受あることは西洋人等の評判となつて居ることであるが、日本人にも亦その癖があるやうに思はるゝ、其の人も英才で、支那國など及ぶ所でないが、併し東洋人は一体自分を尊み、他を卑むの癖がある。是迄の國法を變革して世界普通の法則に改められんことを希望する。然らざれば到底諸國は之に承伏するとはあるまい。正法の國とは決して申さぬであらう。元來貴國は東方諸國中最も富饒の強國で、その事であるが、さすれば世界の四大強國は悉く貴國と條約となつて譯である。〇〇貴國と條約を締結するであるけれども、之の感を欠く。右二國の外、佛國も亦近々貴國と條約を締結するに貴國の取扱振に不服である。右三國は世界の最大強國であるから、之を味方とすれば無二の後援に條約を結び、下田、箱館、長崎の三港は之が爲めに開かれた。然るに長崎來港の露國人等は皆大に出來ることになつて居る。かくては英國は條約を結んだ甲斐もないといふものである。〇〇又露國も以上は、米國と異なる所はない。然るに長崎の内港へは英國船の入津を許さるのみならず、陸は許されたいものといつても過言でない。又英國とも條約を結し、下田、箱館、長崎の三港を開か交易だ許されぬとは云ふ條「金錢を以て物品調、或は品替又は官吏の滞りも御免」ある以上は先づ交易を考ふるに、貴國は既に米國と和親條約を結び、之が爲めに下田、箱館の二港を開かれた。〇〇交易はま

ら多分清國から和議を乞ひ、英人の本意が立つやうになることを思はるゝ。然るに貴國のこの後、此度の一件は清國官吏の不明より起りたることにて英國人の理不盡の致方といふべきでないか。同十月十四日には廣東市内を砲撃して之を焼き盡すに至つた。キルチアス先づ此事實を語りた。遂に之を支那船なりと主張して應じなかつたので、勢の激する所、英船の廣東砲撃となり、清國ではより起りたる紛議であつた。英人は之を英船なりと主張して夫の返を求めたけれども、清國は八月十日（支那官吏數名、汽船アロー號に入來り、支那の叛徒に屬したるの疑ある水夫を捕したる等）再び清國に對して強壓手段を用ふべき機會を窺ひつゝあるに、ホウリソク總督及びバスクス領事とを約しなから、外人を單みて廣東城内に入らざるが爲めに、ホウリソク總督及びバスクス領事は先づアロー號事件の由來を詳細に説明した。アロー號事件とは清國が南京條約によりて五港を開腹なく言上したと申出でた。因て吟味役を奉行代理として出島に遣はしたにキルチアスは、今も清國に起りたる事件は日本にも重大の關係あれど、書面にては申述べたに因り、口頭を以て、かくる所に長崎に於ては同年三月三日、出島商館長トケル・キルチアスは書長崎奉行呈し、と自然なれば、宜しく彼等と應接すべしと諭したけれども、キルチアスは決して之に承服せなかつた。安政四年正月間老連名の書をハルマスの書をハルマスの書に送り、下奉行及び目付に申出づるは直接本官等へ申出づる、和親開港の説を主張した程の人であつたからである。併し堀田正睦も直にハルマスの出府を許さず、

加即手數料を收めて賣買仲繼を取扱ふ所となり、外國買易仲繼人の資格を有するのるかとなつた。そして

右の條約締結によりて從來五個所商人の特權たりし蘭國輸入品買入權及びビコム、フ、仲間の出島の商品賣込權は茲に全廢せられ、長崎會所は單に荷物引請人により、その品代銀の五分に相當する莫

右の條約締結によりて從來五個所商人の特權たりし蘭國輸入權及びマニラ仲間の出島への

[illegible]

外國人をして買物代に拂はしめ、毎月末長崎會所に於て正銀と引換ふることに定め、市民に發行し、

第の項を創り、外人へ賣渡禁制品、長崎會所限り外人國賣渡品の目定めた。此月長崎會所より銀行

であつた。是が外國人に自由互市を許した矢であつた。此の條約によりて献上物、進上物、八朔銀

あつたので、之を抑ふるの一手段として、先此日蘭條約によりて自由互市公許の程度を定めたもの

ら幕府に提出した公文によれば、其頃露國も亦再び長崎に來りて條約の修正を追うるの形跡が

許されたる日、即ち安政四年八月廿九日に至り談判が終つて關印を了した。此時長崎奉行及び目付

條約の附録に就いて、長崎奉行と和蘭領事との間に談判が續けられて居たが、ハルマスが入府拜謁を

かゝる間に長崎に於ては、安政三年七月廿三日、和蘭領事ド・シケル・キユル・チウ・マスの提案した日蘭初展

安政四年八月二十八日、ハルマスに對して入府拜謁を許可して、達した。

威嚇した。そこで堀田閣老は徳川齊昭を言えとめて、諸藩の主人に反對が多かつたにも拘らず、感謝

すべし、これに日本が米國の全權委員を侮辱したる結果ならば、米國は兵力を以て日本の罪を問ふてし





の率ゐた軍艦も亦下田に渡來して、英佛兩國の軍艦が日本に渡來することを知らせられた。幕府は依て井佛兩國が戰勝の結果、去五月清國と天清條約を締結したといふ情報に齊した。同時にフーチヤチヤチヤの延期を承認せしめた。然るに同年六月下田に入津した米船は先づ清國と事端を構へつゝあつた英、かゝる間にハルビンに再び江戸に來つて調印を追つたので、種々交渉の末七十七日まで調印のたれども、朝議は遂に動かすに由なく、四月五日京都を發して江戸に歸つた。

た答が下つたので、堀田閣老は若し交易を許さずば遂に國家の大患たるべきを述べて之を爭ふの勅令に至りては「貿易を開くことは國體にと拘はる大事なれば三家以下諸大名と歎議の上更に奏せよ」と至配し、攘夷論が大勢力を得て居たので之を動かすことは甚だ困難であつた。そして三月二十日を開港の已を得ざる理由を説いた。去りながら是より先き京都に集つて居る志士の遊説は公卿の議を岩瀨忠震の説かすとの命があらざるの命があつた。二月九日参内して通商條約の勅許を奏請し、尋て議奏を招いて國の事情を明せしめた。要領を得なかつたので、安政五年正月自勘定奉行川路聖謨、目外を近しむべからざるの命があらざるの命があつた。そこで堀田閣老は林大學頭、津田三牛郎等を京都近國に遣はし、外人たるに、同月傳奏より幕府に旨を達し、皇居の防禦手薄なるを理由として、畿内及び京都近國に外人めすべしと約して一旦ハルビンを下田に歸らしめた。

を告ぐる時は、其事甚だ面倒ならんとする形勢があつたので、幕府は勅許の無に拘はらず、調印を告ぐべからざる旨を告げしに、ハルマスは然らば將軍は眞の君主にあらざるかを問ひ發し之に眞相をかくして條約の内容一定し、調印の一段に至り、幕府の全權は列藩の意見を見聞き、京都の勅許を請は規定されて居た。

自由問題、江戸、大坂の兩都を神奈川<sup>しながわ</sup>（下川を開港はく）と長崎、新潟、函館、兵庫五港の開港等が自由問題、公使領事駐在問題、通商手続、貿易章程七則を議定した。此條約文の五年正月に至るまで十三回の交渉に接して通商條約四ヶ條、貿易章程七則を議定した。此條約文の功を奏し、幕府は下田奉行井上美濃守を直目付岩肥後守忠震を通商條約締結委員に任命し、安政し、合衆國の威力によりて、英佛兩國を抑ふるこゝの極めて得べきを述べた。此の遊説は臨に勝ち、戦勝の餘威を以て日本に開國を迫らば、日本の爲めに甚不利なるを以て、速に合衆國と訂約をせよと云ふ。世界の大勢を説き、今や英、佛の兩國は清國と戦ひつゝあるを以て何等發言する所なきも、不日之老中堀田備中守正睦を経を經て大統の書翰を將軍家定に捧呈したが、尋でハルマスは堀田邸に至りて懇し、江戸に於ては、安政四年十月二十一日、米國使節ウヰンセント・ハルマスが登營して將軍に謁し、

て安政五年正月に至りては輸入品買受代を即納するものは長崎會所に對する寔加金を免除せらる





設けた。港會所では今日の税關の事務の外、税關の事務の外に外交の事務をも掌つた。

年二八の九五年（一八五五年）五月、港會所（文島）の長崎三ヶ年の税運の上の改（後）を

右の如く安政五年には英、蘭、露、英、佛の諸國と通商條約が締結せられたので、長崎に於ては安政六

節（一）男と米國と同様な條約が結ばれた。

一日には露國の使節フーチャー、同十八日には英國の使節エルズル、同十九日には佛國の使

かくて日米條約が調印せられたので、同年七月十日には和蘭領事ドケル・キエサル・スマス、同十

三十二年に新條約が實施せらるゝに至るまで行はれたものである。

に起き其手續を了した。時に安政五年六月二十日であつた。此條約は明治二十七年に改正せられて、

調印せんことを欲せし事情の已を得ざるを知り、遂に意を決して調印せしめた。二人は乃ち神奈川

を上申したので、直弼以下諸老の間に可否の論があつた。直弼は成るべく朝廷の勅許を得て、然る後

うてハルマスと應接の結果を復命し、且つ勅許を待たずとも條約に調印するを得策とすべしとの意見

幕府に於ては安政五年四月二十二日、井伊直弼が大老となつたが、井上、岩瀬の兩使は神奈川より歸

余は貴國の爲めに周旋し、彼等なる要求をなさしめぬやう盡力すべしと言明した。是より先き

は戰勝の勢に乘じて不日必ず渡來せん、然るも貴國にして今我が要求を容れて既定の條約に調印せば、

上清直、岩瀬忠震の二人を神奈川に遣はし、ハルマスに應接せしめしに、ハルマスは英佛兩國の軍艦









たけれども、當時肥前藩は藩論が未だ勤王、佐幕何れとも決して居なかつたので、二氏は傍觀的態度に當り肥前藩大隈八太郎(後の侯爵大隈重信)及び肥前藩の副島二郎(後の伯爵副島種臣)の二氏も亦長崎に在つてあるからぬから、その動き出さぬ内に自らその屯所に赴いて之を鎮撫するの必要ありと認め、之を佐々木に謀つた。佐々木も大も之を然りと爲し、共に行いて遊撃隊に説かん云ひ出した。是時、ある間に遊撃隊が不穩の模様があるといふ情報があつたので、松方氏は奉行がでなことを命じ、いふ波止場役人を該汽船にやつて取戻すことにした。そして奉行も亦おとなしく之を返した。方氏も賛成した。そして奉行は米國の汽船に乗つて尙ほ港内に在るこゝがわかつたので、白木保三と松方が公金を持出すといふ法はない。之は一つ取戻すことにはどうやら「云ひ出した。之には松方が行所金を携へて米船に投し、長崎を去らんとしたのであつた。是時佐々木氏は松方氏に向ひ「奉」とが初めてわかつた。實は此日長崎奉行河津伊豆守は竊に長崎のこゝを肥前、筑前の藩士に託し、ら追々人が集つたので、金庫を改めて見ると少しも金が無く、奉行が之を携へて立退いたといふからす駆けつけて見ると、奉行所には佐々木氏が一人居るのみで、他には人の影もなかつた。それから直に西役所出るから、君もすぐ同所に出て貰いたいといふことを傳へたので、松方氏は時を移さ月十四日の夜に至り、佐々木氏は使を松方氏に遣はし「長崎奉行はどうぞやうやう退去したい故自分は何等かの情報を齎すところもあるとす、寸毫の注意を怠らず、不安の内に刻一刻を過でしたが、正



右の誓書中。肥州の所に大隈八郎と署名し、其上に貼紙して重松善左衛門としてあるから、其故「肥後、筑前、肥前、平戸、五島、島原、小倉の十人藩より各一名宛の署名花押がある」。筑後、筑前、柳河、越前、

「右」の月日の次に薩州、長州、土州、藝州、大村、宇和川、對州、加州、柳河、越前、筑後

慶應四年戊辰正月 日

して此向き如何様の紛擾相起ると雖、天朝之御爲に各鐵石之心を以て盟誓し、誠意を願はすもの也。

誓盟長大之事件就而萬世不易の國論を以て同盟する者、後事を問はずは、隔意を生ぜず互に併力補助

### 誓書

の衝に當るの必要を認め、遂に會盟して左の如き誓言を作つた。

は長崎に間、役屋敷を有する諸藩の重立ちたる人々を一堂に會し、一致同盟して長崎に於ける内治外交の事も亦尠くなく、何時如何なる衝突がその間に起らぬとも限らなかつた。是に於て松方氏等、間役と稱する今の領事の如き、役人を駐せしむるのみならず、勤王、佐幕兩方面の志士の來往するも、かくて右に述べた事件は治りがついたいけれども、長崎市中には勤王、佐幕の各藩が各屋敷を設け、不憚ながら割腹して罪を謝せしむるの外なしといふことと決し、翌日本蓮寺で自殺せしめた。

附するに於ては、薩、土兩藩士間の反目の因と爲り、遂に如何なる不祥事を惹起せぬとも限らぬから、過つて射殺したのを、そこで相談の上、過失とは云ふ條、武士一人を射殺した以上、之をを不問に

右の川畑半助が後を追ふて西役所に來たのを、土佐の海援隊の一入たる關雄之助といふものが、敵で  
ら其事情を取調べて見て見ると、松方氏が西役所に行くといつて出てきたきり、何時までも歸らぬので、  
おつ取刀で出て見て見ると、薩撃屋敷の留寄居川畑半助といふ若武士が奉行所の門前に斃れて居た。それか  
ら居る際、關の方々に當つて、ス、ペンと一發の銃聲が聞けた。遊撃隊が寄寄せたのではないかと、一同  
それから松方氏は右の一札を擔へて西役所に歸り、佐々木氏に逢ふて萬事好都合に運んだことを告  
云つて大笑をした。云々。

つた。何と云つたらすぐ拔打にやりをうな權幕であつたから、實の所とんと參つてしまつた。と  
程が顔にも出て居たと見て、後年白江に逢つた時、白江が「あの時の貴公の様子は誠に恐ろしか  
積りであつたから、談判最中にも鯉口をゆるめたため、刀を側に引つけて居たので、充分その決心の  
實際その時は決死の覺悟で遊撃隊の屯所に出かけた。先方若し萬一否と云はゞすぐやつける  
公は大正十年の春永山英に鎌倉の邸で左の如く語られた。

して命を待つ、云々。」「といふ意味の一札を認め、捺印の上之を松方氏に渡した。此時の事に就き松方  
要である故に、諸君の決心を一札に認めて貰いたいと云つたので、白江等は直に「隊員一同を鎮撫  
た。之を聞いて松方氏は「それでは安心した。併し海援隊も居るに、彼等を鎮撫するに必  
上何分の御返事を爲すべし」として下がつたが、漸くして白江龍吉といふ人が出て來て快諾の意を表し





用七改  
一  
分

寺久左衛門(花押)同

唐津藩 杉江會輔(花押) 大村藩 稻垣治郎左衛門(花押) 五島藩 奈留帶刀(花押) 土著 藥師

(花押) 對州藩 岩崎浪江(花押) 宇和島藩 井關齊右衛門(花押) 平戶藩 服部源五右衛門(花押)

薩州藩 松方助左衛門(花押) 肥後藩 宮村庄之丞(花押) 筑前藩 栗田貢(花押) 土州藩 佐々木三四郎

藏人(花押) 肥前藩 重松善左衛門(花押) 越前藩 木内甚兵衛(花押) 土州藩 佐々木三四郎

慶應四年辰正月十八日

り 取行候様可被相觸且貴國人民之儀尙又暴行者勿論不取之儀無之様有之度此段申進候謹言

合我國民共貴國人民江對し暴行者勿論諸事不取之儀無之様當致置候間聊無懸念交易是迄之通

今般長崎奉行退崎後公之事務朝廷より其任職之被差遣候迄之事件者在在崎之諸藩並土地之役々申

所は葡萄牙領事宛の書面で現に永見徳太郎氏の所藏に屬するものである。

日附を以て書簡を長崎に留在各國事に送り、從前と同様貿易を營まんとことを申込んだ。左に掲ぐる

を定めて事務を分擔し、西役所を改めて長崎會議所と稱し、之をその事務所とした。そこで正月十八

ふかくて長崎に於ける政治外交は同盟諸藩及び長崎地役人の合議によりて決行するところとなり、部署

ふとであつた。本書書は現に長崎圖書館の所藏に屬するものである。

を松方公に尋ねしに、大隈侯は其の當時未だ藩命がなかつたので、出席を拒まれた結果であつたとい

月二十日長崎に歸着した。

行々賊軍を敗り、遂に盛岡城に入り、十月十九日凱旋の途に就き、東海道を經て神戸より乗船し十二日井兵部、松平甚三郎の軍を防ぎ、苦戦連日、酒井氏降るの後、北畠盛岡を攻め、國見峠の險を攀ち、酒路遠征の途に就き、同月廿六日秋田に着した。そして八月八日から秋田朝舞口で酒井忠篤の將、酒

あつたので、振遠隊員三百六十六餘名は之に應援せんが爲めに出征することになり、四月十九日、海藩主佐竹義堯が獨り大義を唱へ、九條、澤、醍醐の三卿を奉じ、四面に敵の圍を受けて大に苦戦しつつ是時に當り會津城主松平容保が若杉城に據り、仙臺、米澤等の諸藩が之を援けて官軍に抗し、秋田嚮導、押伍等の役があつた。

振遠隊は之を六中隊に別ち、軍曹二人が長となり、各中隊には中隊令官、生隊令官、分隊令官。村六之助の二人が軍曹に、草野三郎が教師に任命せられ、英式により訓練せらるることになり、四月十七日遊撃隊は振遠隊と改稱せられ、石田榮吉、野村要輔の二人がその御用掛に、上原七次、の事務は之に引繼かれた。

間太等と共に來着し、長崎會議所を長崎裁判所と改稱し、内治外交の事を掌ることになつたので、總二月十五日九州鎮撫總督、外國事務總督兼長崎裁判所總督澤宣嘉卿が長崎取締大村後守、參謀上かくて正月十四日長崎奉行河津伊豆守長崎退去の後、長崎會議所が内治外交の要衝に當つたが、し、まゝり惡げに立去つたといふことである。以上は松公の直話である。

撃ちたる「とや」たので、佛國領事も遂に閉口し、言葉を変めて従前通り貿易を繼續すべきを約束する。併しこゝに静座し、胸を開いて君等の砲撃をお待ちする。サマでござい。何時でも何處からもお行為を許すものであらうか。自分等は何等の武器も人數も持ち合せがないから、御相手にはなり兼ね



追 補

第十	長崎料理と菓	子
第十	卓殊な料理	其他
第十	特異な行事	藝
第九	工	刷
第八	印	真
第七	寫	測
第六	象氣物	其他
第五	化學物	學
第四	博物	學
第三	醫學	學
第二	天文	學
第一	語	學



第一真品

また行はれた。  
らうと思ふが、泰西の標準語として葡萄牙語が一般に行はれたのであつた。また羅典語も或程度  
等東洋諸國の人々も来た船としたのであつた。それで長崎にては諸國の言語が行はれたであ  
ルに利人、阿蘭陀人、英吉利人、其他泰西人はもとより支那人、朝鮮人、其他東浦集、東京、暹羅、  
伊永祿の末長崎が南蠻人のために開港されてより鎖國時代に入るとは、葡萄牙人、西班牙人、伊

一六〇三年 慶長八癸卯年 には和蘭對譯辭書が長崎耶穌會の伴天連やマルベ等によりて編修された。

四 四 Vocabulary Da Lingoa De Iapam coin adequação em Portugues, feito por alguns padres, e irmãos da Companhia de Iesu. Com Licença do Ordinario, & Superiores em Nangasaqui no Collegio de Iapam da Companhia de Iesus. 蘭語訳語集

植書  
 Henri Cordier の Bibliotheca Japonica 及び Supplemento Deste Vocabulario impresso no mesmo  
 Collegio da Cōpanhia de Iesu Com a asobredit licença, & aparição. Anno 1604 日本書紀の編輯



石橋工事	九三頁
紅毛人訪神事觀覽	七八頁
金尾羅の紙鸞揚	七四頁
ピーロ吹き	六八頁
メサスマ	六〇頁
一六〇三年長崎和蘭字書	五四頁
上野俊之丞	五二頁
出島花畑	四八頁
ウイレム、チレム、ネ	四四頁
ボ、セ、フ、ア、ム、ル、オ、ル	三六頁
吉雄耕牛	三四頁
阿蘭陀屋敷外科醫の治療	三三頁
西玄甫醫術明書	二八頁
大陽距離觸本	二二頁
譯司長短話	一四頁

## 挿 繪 目 次

ものを翻譯したり、志筑孫兵衛などが蘭語にてした。めづられたものを翻譯した。一六七〇年  
 たやうに記してある。それは甚だ信じ難いのである。西吉兵衛が葡萄牙に長じ葡文にて記され  
 蘭學事始には長崎の通詞は阿蘭陀語を口頭から口頭へ傳へて來た位で洋書を讀むことができなかった  
 青天一抹の白雲の消え行く觀があるのに過ぎぬ。

然廢絶するに至つたのである。そして寛政の頃には葡萄牙語の發音のみしたくめたものはあるが宛も  
 蘭陀語がいよゝ行は別して正徳以降になつて南蠻語の研究は著しく衰へて蘭學の勃興によりて阿  
 めてある。しかし南蠻語は南蠻人渡りにも阿蘭陀語以外南蠻語の研究を怠らぬやうにと云ふ味でした  
 い。それから正徳の頃の訓令などにも阿蘭陀語以外南蠻語の研究を怠らぬやうにと云ふ味でした  
 うに思はれる。そして呂宋通事と云ふ役名へあつた。これは西班牙語の通譯であつた。と考へた  
 鎖國時代に入りても南蠻語はやはり行はれ、延寶の頃にも、阿蘭陀語に通達せる者は少かつたや  
 のは第二外國語として西班牙語を心得てゐた者もあつた。う。

から成立つてゐた。長崎の通譯官は概ね南蠻語の通譯官であつた。南蠻語の通譯官中には葡萄牙語、  
 十八年平戸の阿蘭陀商館が長崎に移された當時の通詞は従前長崎にゐた通詞に新に平戸から來た通詞  
 泰西の語として、葡萄牙語が専ら行はれ、通譯官として、日本人も居ればまた南蠻人もゐた。寛永

してある。これは一六〇三年長崎版和蘭辭書の補遺に外ならぬのである。

先は一五九五年文祿四年天草の耶蘇會學林に於て羅典語葡萄牙語日本語對譯字書が上梓された。あつたが、一六〇三年長崎版和蘭辭書は邦語の研究より觀て遂に有益なる書で、其頃迄に邦人に於て刊行された辭書がひものなほどは到底較つてぬ程あつてゐるのである。

それから翌一六〇四年慶長九年には耶蘇會の伴天連 João Rodriñez の著せる Arte da Lingoa de Iapam composta pello Padre Ioão Rodriguez Portugues da Cōpanhia de Iesu diuidida em tres Livros Com licença do Ordinário e Superiores em Nangasaqui no Collegio de Iapão da Companhia de Iesu.

Anno 1604 の題する書が上梓された。これは日本語の語法に關する著述である。

慶長のころから支那語の通譯官任命の必要もあつたと見え、明人馮六官などが通事となつた。そして皇政維新前まで唐通事の職制は連續として存続したのであつた。それから支那語は南京、福州、泉州、

泉州、などゝ區分され、南京の通事、福州の通事、泉州の通事と云ふやうな區別があつた。

なほ東語、暹羅語、モル語を用ふる必要もあつた。それで東京通事、暹羅通事、モル通事なぐ云ふ者がゐた。譯司統據れば暹羅通事の役は正保元年森田長助の暹羅通事に任命されたのを最初通事は重松初と爲し、東京通事は明暦年中東京久藏の東京通事に任命されたのを最初と爲し、モル通事は重松

十右衛門と中原傳右衛門のモル通事に任命されたのを最初と爲してゐるがそれは寛文のころであつ



投門各樣事體 都息是  
都事智道了 勝得了  
你家沒新樹 沒看也  
你得意把奇安有 一杆  
北全 投明遠了 息了  
建命時有 史是奇案

知識を授けた場合も少くはないかと思ふ。

尙ほ長崎の唐通事や唐語の知識饒かりし人々が他地方の學者に直接或は書面によりて唐語に關する

語便用は大に世に行はれたものである。萩生祖など冠山唐語の讀解を學びしと云ふ。

史小説概ね談破せざるなく特に支那語の造詣深くその著唐語纂要、唐譯便覽、唐音雅俗語類、唐

岡島冠山 享保三年正月二日没。玉冠山通稱。大澤、通稱。玉冠山。

は上野玄貞に師事して經史に涉り稗史小説を好み唐土の稗

ならぬ。

木榮之進（大澤）、檜林重衛その他の手引指教であつたの事を成就したことを決して遺却しては

もあるかやうに説く者が多いが、此等所謂蘭學開祖も實は長崎の名司、吉雄耕牛、西善三郎、本

を促したところから以後のことと謂はねばならぬ。そして今日でも蘭學の開祖は江戸方面の蘭學者で

極めて後年のことにして青木昆陽、前野蘭化、杉田玄白其他が中央方面にて蘭學を研究し洋學の勃興

但だ長崎の通詞以外地方の者蘭語を學ぶに至りしは、僅少なる場合を除き、大率に之を謂へば

法蘭西にも口の通辭はもとより蘭院文字の讀書なども精出し相蘭云々である。

蘭文を邦語に翻譯したことが記されてゐる。のみなならず正徳ころの蘭通詞法度書 奉例大行ば正徳五年阿蘭陀守年六

字南蠻文字之通何様之儀而茂無繕有體和解可申上事「とある。また延寶時代の風説書などにも

倫敦版 Atlas Japanensis にも見ゆ。且つ寛文十一年亥月晦日附蘭通詞起請文前書にも「阿蘭陀文









られた。そして同年六月五日には阿蘭陀小通詞並岩瀨彌四郎、同末吉雄六次郎の吉雄權之助等亦も亦も通詞並西吉右衛門、同末吉雄次郎、同末席吉雄佐十郎等、同末吉雄次郎及び英語の稽古修業を命ぜ尋いて文化六年二月廿六日大通見習本木庄左衛門、小通詞末甚左衛門小通詞格馬場爲八郎、小研究を命ぜられた。

左衛門、小通事彭城太次兵衛、小通事末席平井孝三郎、楊又四郎、稽古通事吳定次郎等は滿洲語の郎兵衛は語修行為の監督を命ぜられ、唐大通事神代太十郎、小通事顯川仁十郎、東海安兵衛、彭城仁めしめ、蘭學詞をして英語及び西語を學ばしむることになつた。同十年十一月寄島島四修艦エートン號事件は英國語の研究を促すに至つた。是に於て幕府は長崎の唐通事をして滿洲語を英—感悟され、ままた滿洲語の研究も決して閑すべからざるが看破られた。加之、文化五年の英尚は露西亞人との交渉はいよ—密接になつてゆく傾向があるので、露西亞語の研究の必要もす謂ふべきである。

Doelに師事して佛蘭西語を研究するさいを命ぜられた。是れ本邦に於ける佛蘭西語研究の嚆矢と本木庄左衛門、小通詞今村金兵衛、同並椅彦四郎、馬田源十郎等は出島阿蘭陀屋敷の甲比丹 Hendrik 究はしみみ感悟された。その結果文化五年二月六日阿蘭陀大通詞石橋助左衛門、中山作三郎、同見習佛蘭西の革命やナポレオン戦争の影響は極東日本の長崎にも亦波及したのである。佛蘭西語の研究



通詞が勤學することになつた。越て同月廿四日に付阿蘭陀大通詞西吉兵衛、小通詞森山繁之助の  
露語及び英語の兼學や言語和解の取懸掛しを命ぜられた。そして滿洲語は唐通事、露語及び英語は蘭  
嘉永三庚戌年九月十五日寄福田續之進及び高島作兵衛は唐通事及び蘭通詞若年の者共滿洲語、

尋いて一八二八年文政二十年、岡研介、吉雄、次郎及び吉雄權之助等は、シボルポルトの指導に

文政初年荒木豊吉及び菊谷米藏は Jon Cock Blomhoff の指導により蘭和對譯書を編修したが、等に命じ更に他書によりて校訂せしめ安政五年に至りて之を完成した。これを和蘭字彙と云ふ。

願出で遂に出版の許可を得た。是に於て桂川氏は安政二年に上梓の業に着手し、弟書策、橋堂以下門人ヲ許さなかつた。尋いて桂川甫周象山はこの蘭和辭字書と譯字書の流布をはからんやめ、上梓せしむるに熱心な云ふ。嘉永年中佐久間象山はこの蘭和辭字書をヅツ、ハル、道譯法兒馬、長崎ハルマナをなす。大事業を成就したのである。この蘭和辭字書をなつたものもゐた。但だ主任中山氏は終始貫員のうちには逝去したのもあれば、また新に編輯員となつたものもあつた。天保四年に至りて完成したのである。その間に編輯し、補さへあつた。その後はゆる／＼編輯に従事し、天保四年に過ぎなかつた。尚ほAよりTまでの間に編輯も補



が訂正蘭語九品集を作つた。それから大槻玄幹も亦文化十三年に蘭學凡、文政九年に西音發微を撰し  
 文化十一年三月には長崎の羽入栗洋齋が六格前編を著述し、同年九月には馬場佐十郎議員、由、誠、穀、里  
 觀がある。

をなし、特に語學的進歩を促したことは日本に於ける洋學發達の歴史に於て錦上花を添ふるの  
 したる末次忠助、吉雄權之助、馬場佐十郎、西吉右衛門、大槻玄幹其他が蘭學の研究上異彩ある活躍  
 斯く志筑氏が阿蘭陀の語法を説きしより蘭學は頗る著しき進歩をなした。そしてその門下に從遊  
 特色ある著述が世の光を見ることになつた。

礎を横へたもので國語文典の研究にも亦淺からざる影響を與へ、鶴峰天保四年刊の如き申の語學新書  
 當時蘭學者間に行はれた柳田文法著述年代不詳は實に鎖國時代本邦に於ける外國文典研究の基  
 地理學其他の研究に於て偉大なる貢獻をなしたが、いかに蘭語の研究に於て特筆すべき寄與をなした。  
 天明から享和ころへかけて長崎の蘭學者志筑忠雄あきむねは天文學、力學、光學、數學、語學、博物學、  
 も追々行はるやうになつた。

通詞を勤むるものが現はれた。そしてフルベッキは獨逸語を教へたのであつた。また佛蘭西語の研究  
 て長崎には魯西亞通詞の職さへ設けられた。尙ほ英語の流行の範圍がますます廣まつて行くで英語  
 それから長崎には露國の軍艦が繁々入津するやうになり、船佐は露人の第二の故郷となつた。隨つ



多吉郎、唐方諸立合大通事平野繁十郎、小通事鄭幹輔、額川藤三郎等が世話掛を命ぜられた。

是に於て天保のころより多少活氣薄らぎし觀があらつた語學の研究は再び盛んになつた。そして翌嘉

永四年八月にはエレン語辭書和解 [Engelsch en Japanch Wordenboek] 第一冊△之第一が脱稿された。それには嘉永四年八月附、西吉兵衛成量、森山繁之助、高直、橋林繁七郎、高明、名村五郎元度

入連名の序文が記載されてゐる。その後第七冊B之第三が安政元寅年に脱稿した。それで中止されてつたらしい。の英和對字書は H. Picard の著述に係る A New Pocket Dictionary of the English

and Dutch languages に據つたものと考へた。

それから同じく嘉永四年八月に翻譯滿語纂編二冊で清文鑑和解壹冊が脱稿した。その序文の末尾に「嘉永四年辛亥仲秋、清學考資馮璞、中野繁十郎、鄭昌、鄭幹輔、陳助、額川藤三郎、同謹識」ある。翻譯滿語纂編

の第十冊は安政二卯年十月に脱稿し、同時に翻譯清文鑑の第五冊ができた。爾後中止となつてゐる。その後米國提督ハリの來朝して以來時勢一變し異邦人の渡來するもの夥しく、特に英米の商船軍艦の入津いよ／＼激増し英語の研究の必要はますます感悟するに至つた。そして文久二年二月に幕府の開成所より堀達之助、高島太郎、高島秋帆の孫、箕作貞一郎、手塚節藏のち大體翻譯纂修に係

る英和對辭書が上梓するに至つた。この辭書の編修に主としてあつたのは長崎の堀達之助、其

入で、高島太郎も亦長崎人であつた。

ける天文学の發達に貢獻した最初の開拓者であつた。彼同時代にユルベリウスが天文学を以て歐羅巴に於て、また同時に日本に於て、基督教傳道の開祖であり、

## 第二章 天文学

運館にて教授をうけたことがあつた。

是に於て海内諸地方より長崎に來遊して廣運館に入學するもの踵を接した。西園寺公望公の如きも廣學はもとより泰西の新知識を傳へ國語の教授にも相當の注意を與ふることになつたのである。語ことになつた。そして漢學は聖堂祭酒たりし向井應之助宅に講習と云ふことになつた。要するに語學及び語學に注意を與へたのであつた。そして本學は當初神社宮司青木陸奥守宅に於て教授する月廣運館（たまたま廣運學校が設立され、）濟美館は廢止され、廣運館に於ては國學を本學と稱し吾邦の文學新町に移され新に濟美館と改稱され、そして語學以外諸學科の教授が始まつた。尋いて明治元年四月つた。應元年正月には江戸町に語學所の假舎が設立せられ、英佛露三ヶ國の語學が修めらるることになつた。ルベリウスに就いて獨逸語を學ぶ者もあつた。この洋學所が語學所の前身とも謂ふべきものである。二月にはまた之を江戸に移し洋學所と改稱した。そしてルベリウスが教師となつた。尚ほ

た。文久三年七月には更に立山奉行所に之を移し、何體之助、平井義十郎がその學頭となつた。同年十月、文久二年片淵郷組屋敷内乃武館のうち之を移し改めて英語所と稱し、中山右門太師がその學頭となつた。文久二年片淵郷組屋敷内乃武館のうち之を移し改めて英語所と稱し、中山右門太師がその學頭となつた。尋いでなり、蘭人サイハスル、蘭人デ・フ・オ・グー、英人ア・レ・ツ・エ等が相繼いでいて、教頭となつた。その取

また志賀浦太郎の親朋諸國繁之助などは先して魯西亞語を學び、諸國氏は魯西亞語の通詞となすを修めたのであつた。そして佛蘭西語の研究を始めるものもあつた。

通事鄭幹輔などは幕末に Dr. Macgowan が長崎に來遊して一時滞在した折に彼と共に就いて英達之助、柴田大助などは傑出してゐた。そのうち柴田氏のなつた。吉昌は英語に於て森山多吉郎の助堀た。それ英語通詞や魯西亞語の通詞さへ現るゝなつた。英語に於て森山多吉郎の助堀た。商船軍艦の入津するもの夥しくなつたので英語の研究の必要はいよ／＼深く感悟せらるゝに至つた。尙ほ幕末になると英國、英國、露國との交渉はいよ／＼密接になつてゆくばかりであつた。特に英米と、まず／＼進歩して行くのみであつた。



降つて元和期に入ると、池田與右衛門入道好運が元和航海記を撰した。この書の序文には元和四年  
 ちが天文學或は數學に關する多くの著述を發表して支那文化の開發に寄與したのであつた。

を見るに至りては餘り進歩しなかつたやうである。併し支那に於ては利瑪竇その他の天連た  
 ス南蠻の天文學は長崎に於て漸次發達して來たが、慶長十九年吉利支丹寺の破却、伴天連の追放  
 伴天連レマソクが觀測を司つた。

た。そして邦人もまたこれに參加した。またマカオに於ては天連ジュラス・マレニ（及び  
 日觀測が行はれたことがあつた。長崎の方では天連カルロス・アスビノラがこの觀測の主事者であつ  
 その後六年を経過し、慶長十七年晚秋即ち一六六二年十一月八日に至り、長崎とマカオ兩處に於て  
 するを得なかつたことを物語ると謂ひたい。

これは雜山に限らず、當時の儒者たちが概ね朱子の陰陽五行説なぐに捉へられ、天學の新説を信  
 それだけその天文學に關する知識は幼稚であつた。

地球圓形の説に對し極力これを否定しかつてもその惑ひ豈悲しからずやと述へ、マカソを憫みし程  
 見を交換したことがあつた。その事は羅山文集の排耶の一節に記載されてゐる。羅山はマカソの  
 慶長十一年六月十五日林羅山が長崎にて伴天連マカソと會見して天文學に關する意  
 に捉へられてゐた爲であつたとも考へてみた。

後にも加へる  
 云ふ價

説を新しく唱道したのであつた。斯く利瑪竇一派がトレミの天動説を固守したことは宗教上の弊見の舞見トレミは「地は静かなり、天は動なり」と云ふ天動説を唱へてゐるのに反し、コペルニクスの地動説は行はれず、依然としてトレミの學説が傳へられてゐたのであつた。

かも知れぬが、支那に於ける伴天連利瑪竇一派の天學説を考察してみると意外にもコペルニクスの説はシヤサイエエル以後渡來した伴天連たちはコペルニクスの學説の間もなく輸入したものと考へられる説を受け入るに餘りに珍しく或點に於ては殆ど荒唐無稽の説であつたやうに想像したい。

當時日本の天文學者がどれ程のシヤサイエエル天學説に耳を傾けたが明白でないが、無條件にそのでトレミの流れるものであつたらしい。

道に従つてゐたのであつた。それだけで日本に傳へた天文學は寧ろ新しいコペルニクスの天文學以前のもコペルニク스가その天文學に關する學説を發表した際にはシヤサイエエルは既に東洋に渡り印度方面の傳ハルニクスのより三十二年若く、コペルニクスの逝去より九年後に歿したことになる。尤も千五百四十三年ハルニクスの城に於て生誕し、一五五二年二月二日南支那の孤島で逝去した。それをシヤサイエエルはコラウエツプログに於て歿した。それからシヤサイエエル聖人は一五〇六年四月七日ナヴァアール國シヤコペルニクスは西暦一四七三年二月十九日アラブ國トルセンに生まれ、一五三四年五月廿四日同國の學界に活躍し天文學のために一新紀元を劃したことは見逃すべからざる事である。





その後明暦二丙申年の冬長崎奉行甲斐庄喜右衛門は通詞吉兵衛及び向井玄松に命じて右の忠庵譯

野思ヲ稱す。○フ・エ・ン・島。本五ノ町に居住して澤

要するに寛永二十年筑前沖に漂着した南蠻船に乘組める伴天連の所持せる天文書を澤野忠庵

乃以天文書進上井上筑後守基宗公、三二年之後基宗公令忠庵譯之譯功漸成進上其書即此篇也」とある。

武井筑後守基宗公之下於獄數皆自悔非謝罪改鬼利支端而爲我民俗破天禮長老有精天文者

狀聞焉其人有餘人皆蠻破天文禮鬼利支端之徒也筑前之太守源忠之令士橋提寄之長崎奉行所以達江

向井玄松の乾坤說の序文に「寛永廿年癸未筑之前州大島之海上卒然怪船漂蕩大島戍長忽視執之以

係ある歸化人岡本三右衛門その人であつた。

ヨセフ・キ・アラが天文學の書を携へてゐた。この人物は江戸小石川小日向の吉利支丹山屋敷に關

その後寛永二十年五月筑前の沖に漂着した南蠻伴天連のうち伊太利國シリ島バレル人の人

によりて好運が天文學や氣象學に相當の知識をもつてゐたことが多少窺はれる。

この著述の中にクルセローや他の天文學及び氣象學に關係ある文字が散見さるるのである。

と共呂宋に渡航したことがあつた。

著者好運は南蠻船長マエル・コ・サロに就いて航海術を修め、元和の初兩年に亘りマゼラン

八月とある。元來この著述は航海術の記録ではあるが併せてクノロギや天文氣象の學にも觸れて

京保二年八月將軍吉宗公は蘆艸拙及び西川如見の天文學に造詣深きことを聞き傳へ兩人を江戸に呼ぶとしては兩儀集說、右旋有無論、幹枝數源、天文議論その他を擧げておきたい。

に蘭通詞を経て長崎來船の紅毛人に天文學のこゝとを質した事もあつたうと思ふのである。その著述に天文學說を多少加味したものであつたらしい。もとより西川氏が同時代の蘆艸拙や向井成やうの天文古聖賢書暨先儒諸說並攷發老之所傳多發明「と述べてゐる。要するに支那の天文學說に秦西數由古如見も天文學者として世に識られてゐた。西川氏の天文學に就いて先民傳は「又講於天文曆西川如見の著述ではあるまいかと思ふのである。

と考へた。それで右の二書は蘆氏の著述ではあるまいかと思ふが、自餘のものは全部若くは大部分蘆艸拙の著述ではあるまいかと思ふのである。また紅毛譯和は長崎通詞の翻譯集であつたうに衛門入道好連の著元和航海記に該當するらしい。また南蠻人ノエロ・サロの航海術を傳へた池田良右のうちに航海錄は測量秘辭に據り考察するに南蠻人ノエロ・サロの航海術を傳へた池田良右の著述ではあるまいかと思ふのである。

目其他 蘆氏所藏 高麗氏所藏 航海錄など名稱が擧げてある。  
 曆補 渾天象數、航海錄など名稱が擧げてある。  
 目其他 蘆氏所藏 高麗氏所藏 航海錄など名稱が擧げてある。  
 曆法入式、推歩記、紅毛譯和、緯度  
 天文學を學んだ。それで三代は南蠻天文學を以てて識られた林吉右衛門の學統に屬するところが明瞭である。

そにかからぬのの子なる屋艸拙効  
號清名卯之助、轉賣た元敏、  
もまた小林謙員の高足蘭庄三郎に師事して

從ふて天文輿地運氣の學を修めたるのであつた。

邦に於ける本草の山斗も謂ふべき人物であつた事は世の善く識る所であるが、同時に小林謙良には本

述稿本なつてもあつたか？に發表しなかつたらしい。

彼はち小林謙貞に師事し、その推薦によりて長崎奉行牛込氏の恩遇をうけたのであつた。その著したものであつたのが先民傳にも見ゆる。小林謙貞は實した事が、航海術を主として天文學に従つたものと併してゐた。持つて多少の知識なぞはその高足弟子であつたと謂へよう。關氏は始めてカキや呂宋などにも渡航して南蠻文學の知識なぞは、三郎關氏から傳へられたといふ。

のたために傷けられ遂に十二月二十四日午古の人となつた。その著述原稿は家藏に満ちる程あつたが、彼は二十二年の牢獄生活から漸く脱却して悠々自適晚年を送つてゐたが、天和三年冬多々屋八郎右衛門であつた。

ちとし云ふ。そして遠近の人士笈を負ひ箕を擔ふてその門下に從遊した。天和三年小林謙貞は宣明暦を駁して天歩二日の相違あるべきことを指摘した。果してその言の通り



太陽距離測算第三圖

本朝ノ歲月第四圖五圖

本朝ノ來暦ヲ求ル時三月日ヲ記セシガ爲メ左様ヲ附シ右々

太陽距離曆解ト云ヒ天地ニ球用法ノ卷尾ニ引證ナク

十時

寛政五  
安永三甲午丑亥教且

本末良永誌

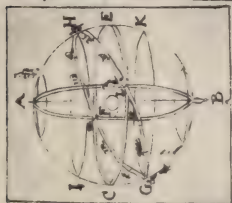
太陽距離曆解

本末良永評

松村元綱校

太陽距離總說

太陽ト赤道ト中間ノ直リ即太陽赤道ヨリ兩極ニ距ラ名テ  
判的印語ヲ稱シ合ハズニ和蘭語アフエイキト云



其距離ニ南北ノ二義アリ今太陽距離  
ノ用教ヲ記メ圖ヲ以テ是ヲ明ス  
此渾天圖ニA Bノ二字ヲ記スルハ兩  
極Aハ北極Bハ南極C D E Fハ兩極

中間ニ著ス赤道線ナリG D Hハ黃道Dトノ二點ヲ分テ









往時黒船の渡來し頃には、醫術に長けた南蠻人が少なくなつた。そして長崎のミゼコリアン

### 第三章 醫學

比へて遜色なき天文學は現れなかつたやうである。

本木志筑兩氏の開拓によりて爾後日本の天文學は著しく進歩した。しかし長崎に於ては爾後兩氏にまた長崎の吉雄南阜は天文學をよく西説觀象說を著述した。

（註譯は、號獨受）蘭學に精通し特に天文學に造詣深く數學物理学を能くしたことを附記しておきたい。

圖説、求力論、三角提要秘算、八間儀、奇兒傳、日蝕繪算等を舉げておきたい。その高足弟子たる末次忠助は志筑氏は日本數學、物理及び語學の歴史に於ても特筆すべき人物であつた。前記著述の外四維に於ける日本理學界の誇りとすべきものである。

の學説は泰西の天文學者フラスマスや哲學者カントなどの星氣説と併せ稱すべきもので實に徳川時代を尋いて寛政より享和へかけて曆象新書を發表した。そしてその著述に於て星氣説を述べてゐる。また志筑忠雄は天明二年に著せる萬國管窺（讀者所識志筑忠雄自撰稿本）に於てユウクトの學説に觸れ、撰した。

太陽距離曆解、日月圭和解、平天儀用法など著述がある。尚ほ吉雄耕牛と共に阿蘭陀永續曆和解を

た。就中木氏はその著太陽窮理丁解説に於て初めて我邦に地動を唱道した。なほ天地二球用法、幸作、松村安之丞、本、木榮之進(ちた夫)などは蘭國にて上梓され天文書を熱心に研究したのである。從事せし伴天連たちの天文書の陳腐であることも追々感悟せられたものか、長崎に於ては蘭通詞吉雄完全を意味すると共に天文曆數の發達の案外に遅かつことを諍明するのである。隨つて支那布教に貞享曆採用以後貞享補曆、寛延巳補曆、寶曆申戌曆、天保寅曆などの改曆頒布は日本曆の不尙ほ西川氏は寛延巳補曆にも關與した。

その後享保二十年に至り長崎の西川次郎は徳川幕府の天文御用を命せられ、尋いて延享三年に貞享補曆の重任にあたることになつた。そして同年草拙の門人北島見真も天文御用を命せられた。

多少の光明を與へたのに拘らず、日本の天文學は歐洲に於ける天文學と比較するに餘りに幼稚であつた。説を固守するものであつた。それで洋書の禁が弛められても、從前進歩の鈍かりし日本の天文學には長崎船齋を實現せしめた。併し利瑪竇一派の天文書などは教上の僻見に墜ち陳腐となつてゐた天動將軍吉宗の好學は支那に於て上梓され伴天連マオ、リツチ其他の天文數學地理に關する著述のを以て有名なレールが英國王立觀象臺長となつた。

洋書の禁制が弛められた享保五年即ち一七二〇年にはユートンが七十九歳の頽齡に達し、彗星研究













Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written on aged, stained paper. The visible text includes:

Handwritten text (top):  
Handwritten text (middle):  
Handwritten text (bottom):

### 南蠻流の醫術

のち大坂に至り名を慶友と改め醫術を業としてゐたと云ふ。葡萄牙人ハフタスが肥前國島原半島方面に居住してゐたが、彼は隨處に醫術を善くし最も外治に長じ、そして耶蘇教嚴禁の後でいへば長崎、大坂、堺その他の地方に於て行はれた。南蠻流の醫術が、耶蘇教の盛んに宣傳されたころ、廣く行はれたことは多言する必要もあるまい。ある。之に反して蘭醫方は文政元年蘭醫シハーポルトの來船以後著しき進歩を遂げ以て幕末に至つた。三たび渡來し、爾後唐醫は折々來したのであつたが特に名醫と稱すべき程はあつたが、考へたところからいへば、胡兆新以後文政の頃には唐醫陸品は蘭醫が盛んに流行してゐたので、唐醫方は隆盛でなかつたらしい。唐山名醫胡兆新の來はその後享和三年十二月唐醫胡兆新が來船し、文化二年四月で長崎に滞在した。享和前後のころきてより種痘術の研究に心を潜めたこと云ふ。斯くて支那種痘術はいよゝ行はれてゆくのであつた。それから筑前秋月の人緒方春朗は長崎に來遊し吉雄氏の人門となり李仁山種痘術のことなど聞る。宗鑑などが長崎に船齋され、他地方に行はれた。その書の中に唐土の種痘術のことが記してある。種痘術を修めた。そして唐通事野繁郎及び林仁山種痘和解を撰した。寶曆二年には醫李仁山が來船した。彼は特に種痘術を善くした。長崎の醫柳元隆や堀江道元などは李氏に師事して



吉田流の祖と稱せられた。そしてその門人にして義嗣となつた吉田自菴も亦名醫として景仰された。半田順庵の門下に従遊した者のうちで、吉田自休安齋、字は豊は最も傑出してゐた。すなはち

月十五日江戸に歿す。實に西流の開祖であつた。

の醫術をも修めたるのであつた。そして西流の一派を興した。延寶元年幕府の醫官となり、貞享九年九流を受け、南蠻流の醫術に達してゐたのみならず來船舶阿蘭陀人にして醫術を善くする者に就いて紅毛流業を授け、西交市通稱吉良衛は少くして番語を善くし、阿蘭陀屋敷の通事となつた。彼も亦澤野忠庵に従ひて業を得年七十七。杉本氏は幕末に至るまで子孫相繼ぎ醫を以て幕府に仕へた。

事により治療のため京師に赴いた。そして天和三年十二月十一日致仕し、元祿二年十月六日逝く。

六年十二月將軍綱吉に謁し、同年二月米二石を賜ふ。延寶六年六月十八日女院御所御不豫の文、杉本忠庵諱は元政は亦澤野忠庵に師事して妙方を傳へ、治療多く、當時世に重んぜられた。寛文

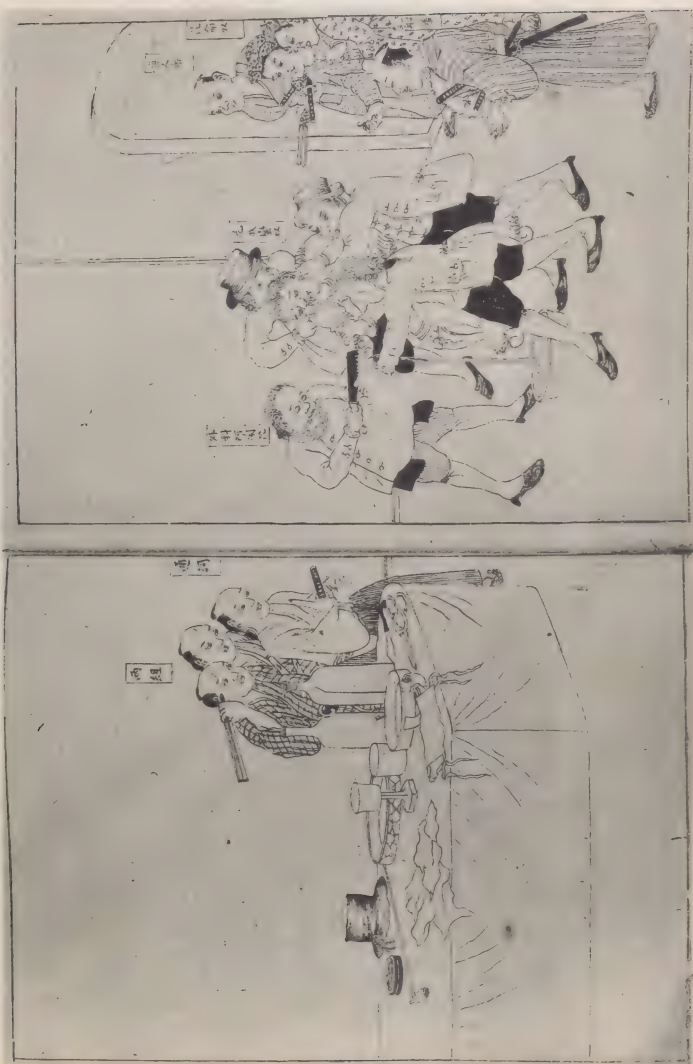
色し、歸朝の後名聲大に震ひ、當時名醫として景仰された。

半田順庵は幼時より瘡醫に志篤く、澤野忠庵の門に業を受け、そして阿媽港に渡りてその技を潤した。

トガ人にして、Christovao Ferreira と云ふ。耶穌會所屬の宣教師で、ちき教して禪宗を信奉せられ、澤野忠庵が醫術を心得てゐたことなどは慮干里の先民傳など記載してある。忠庵はホ



阿蘭陀屋敷外科醫の治療







栗崎道喜の醫術も元來漢醫方と南蠻醫方とを折衷したものであつたうと考へたい。それから栗崎  
ある

Y. Kesteloot と對談した將軍家の醫官 Coenisaeki の 見えが、それは栗崎道喜に外ならぬので  
後享保十一年四月二十六日致仕した。一七二〇年(元禄十五年)紅毛人江戶參禮紀行中に上外科醫長  
れ寄合に列す。正徳三年閏八月九日伊掃部頭青頭療養のため温泉に赴く時、命に隨行した。そ  
始めて將軍綱吉に謁し、同閏八月九日番醫となり、元禄十五年七月九日家業蘭情の康を以て番をゆる  
聲遠遁に馳す。元禄四年六月十九日幕府の辟に應じて侍醫となり、慶米二百俵を賜ふ同年七月二十八日  
就中、栗崎道喜有江戶正羽。保十一年七月廿日は、夙に醫に精しく長く其技すすむに及び、世に知られたのであつた。  
名であつた。即ち栗崎流の開祖である。爾後栗崎氏は世々醫術を以て世に知られたのであつた。

それから栗崎道喜は少時海外に渡りて醫術を修め、特に金瘡の術に長じた。そして南蠻醫方を以て有  
門下に從遊して瘡科に長じた。

畫を學び、林吉右衛門に就いて天文學を修め、更に盧艸碩に師事して醫を學び、また吉田自休の  
松丘宗順も亦吉田自休の門人であつた。宗順は肥前佐賀の産で、年四十四を驗るに、追ひてはじめて字  
廿二日逝く。得年六十。村山流の祖として世に知られた。

同年閏八月番醫となり、同七年十一月家業精蘭の康を以て番をゆるさる寄合に列した。寶永三年三月





つたやうに思はれる。

い。尤もケンペルの日本歴史附遼羅紀事に據れば、ケンペルは木氏より寧ろ梅林鎮山と親善であつた。この事實は元祿初年長崎に淹留したポルトガル人が解剖學に造詣深かりしことと考合せてみた。すべからざるである。この書はのち明和九年に至りて刊行され、題して和蘭金櫃内外分合圖と云ふ。本木良意（元祿十一年丁丑、十歲。父九郎、母十太夫。通稱十庄夫。）が阿蘭陀の解剖書に據りて解剖書を著述した事は注目

蘭語の讀書作文に於ては、いづれの蘭通詞に比へても決して遜色なく優秀であつた。

彼の長崎滞在中一青年が彼に師事して醫學を修めた。この青年はケンペルに就いて阿蘭陀語を學び、彼の研究し、日本歴史附遼羅紀事を著して我國を泰西に紹介するに頗る詳密であつた。

高かつた。彼は特に醫學や博物學なまでに造詣深く、また外國語や哲學なでも善くし、深く日本の事物を研究した。國の Königsberg 大學に於て學び、更にスウェーデンに至り、スウェーデンの大學なでも評判が、（Lemgow に於て生まれ、千七百六十六年二月二日同地に逝去した。）。オーストリアの Cracow 大學や、（元祿三年、一七〇〇年） Engelhart Kämpfer が長崎出島阿蘭陀屋敷の醫官として來朝し、同五年迄長崎に淹留した。彼は西暦千七百五十五年九月十六日を以てリッス伯 (The Count de Lippe) Westphalia

彼は蘭國ライプス大學に入り、Franciscus de la Boë Sylvius, Johannes Hornius Florentius Schuyt 等

學の指授を受けた。そして醫學に造詣深かりしに、より特に長崎に派遣されたのであつた。

道有なまは西玄甫のやうに南蠻流と阿蘭陀流とを併せ修めたものと思ふのである。

### 阿蘭陀流

阿蘭陀人の傳へた醫術を阿蘭陀流といひ蘭方と云ふのである。鎖國時代以前にも阿蘭陀流は行はれた。鎖國時代に入ると漸次南蠻流廢れて阿蘭陀流が行はるやうになつた。併し南蠻流にせよ、阿蘭陀流にせよ、いづれも泰西の醫學であつて、別大差はなかつたものと考へた。

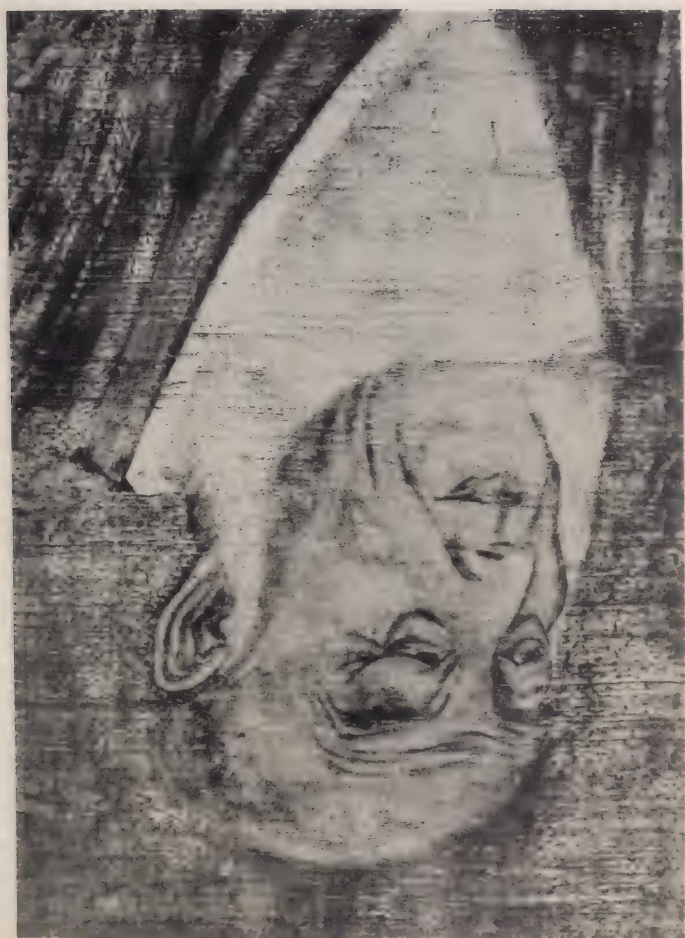
平戸に阿蘭陀商館の在つた頃、阿蘭陀の醫師がこゝでは彼と立つきつゝあるまい。寛永十八年阿蘭陀商館が長崎の出島に移る後、出島に阿蘭陀の醫師がゐたのであつた。

慶安二年の晩には四人の日本青年が出島の阿蘭陀屋敷に於て阿蘭陀人 Caspar Schambergen に就いて泰西の醫術を研究しつゝあつた。この紅毛醫師の後年カスバル流と稱した。彼は同年江戸に至り翌年迄彼地に淹留した。その際江戸にも亦醫術を傳へたのであつた。

猪俣傳兵衛、鳩野宗巴（後熊本に中住す氏）、河口良庵（は）は Caspar Schambergen の教へを受けたところであつた。

なほ西玄甫の如きも南蠻作天連して醫術を善くした者に就いて醫術を修めた事はもとより來船阿蘭陀人にして醫を善くした者にも亦師したといふは Constantin Ranst, Daniel van Vliet, Arnold Dirck

等連署の證明書（一六六八年二月廿日附）に徴して明白である。延寶二年初夏の頃（一六七四年）Dr. Willem ten Rijnne が長崎に來船し、二年間滞在したのであつた。







一月十一日を以て瑞典國 Jonkoping に生まれ、千八百一十八年八月八日ウプサラ近傍にて逝去した。彼  
安永四年には Karl Peter Thunberg が長崎出島の醫師として來朝した。彼は西暦千七百四十四年十

を刊行したことも日本醫學史上特筆するべきものである。

道意門人が森野元凱と共に刑囚の屍を解き、これを阿蘭陀解剖圖に對照し、明和九年に至りて解屍綱

杉田玄白等が小塚原にてて腑分を行ひしより一年前明和七年に長崎河口良庵の裔孫河口信任 長崎藩時

の検査を加へしは吉雄耕牛を以て最初となすべきものであると云ふ。

その著因液發備は診斷科に屬する著述で、小便の検査法を詳述せるものである。我邦の醫界で小便  
名聲天下に遍く、蘭學の開祖として將又阿蘭陀醫術の泰斗として崇められたのであつた。

所淺からざりしと思ふ。因液發備、蘭方書、紅毛秘事録、布斂吉微毒論、紅毛流膏藥方等の著ありて  
をうけて研鑽の功を積んだものと考えたい。別してツンベルグ Thunberg にも亦益を請ひ、得

二人に限つたものではなかつたと思ふ。醫術に心得ある蘭人が渡來すれば、その度毎にその指導  
阿蘭陀醫バプテスマの師としたりと云ふと蘭學事始に記してあるが、その師事した紅毛人は決して一

で讀ふたものである。

それから吉雄流の祖吉雄耕牛 二年稱、八月幸、十六日門、進、十七政、得、年、幸、後、 の言及のみ。吉雄耕牛は専ら







はクララ大學の出身で、リベンスの高足弟子であつた。醫術に精しく、特に植物學に通曉してゐた。長崎在留僅に一ケ年に過ぐさし、も長崎にては吉雄耕牛その他、江戸にては桂川甫周、中川淳庵など、その示教を受けて得る所淺鮮なうといひ、いゝを特筆しておきたい。歸國の後、歐羅巴、亞弗利加、亞細亞特に日本旅行記、日本植物誌 (Flora Japonica) 日本植物譜 (Icones Plantarum Japonicarum) 等の著述を發表した。

この後文政六年には Dr. Ph. Franz von Siebold が來船した。彼は西暦千七百九十六年二月七日、ワリア國ウエルツクに生まれ、千八百一十年十月十八日同地に歿した。彼は Wurzburg 大學の出身にして特に醫術博物學に造詣が深かつた。當時、天下の學徒その門下に從遊する者甚だ多く、湊長庵、平井海藏、美馬順三、高良、吉雄、伊藤圭介、日高涼臺、土生玄碩その他、天下英俊その指教を得て我國醫學界及び理學界の面目一新するに至つた。安政六年再び長崎に來船し、文久元年我國の外事顧問となりしが、間もなく歸國した。その著日本紀事、Flora Japonica, Fauna Japonica など著して周知されてゐる。

嘉永元年 (一八四八年) Dr. Otto Mohnike が來船した。彼は牛痘を我邦に傳へ、今日一般に行はれてゐる種痘術の基礎を強固に横へた。長崎の檜林宗建、吉雄圭齋などが、まきーニに就いて種痘術を修め、







貞享元年には向井元升の庖厨備用和名本草が上梓された。右の著述は加賀侯前田氏の老臣前田對馬  
 了。是に於て本邦の本草學は盛んに興るに至つたのである。

て瞻仰せられた。そしてその門下に従遊する者が少なくなつた。稻生永如はその高足弟子であ  
 福山徳順、一に徳淵、學を盧草頌に學び乃ち其傳を得延寶中、大坂に移居し當時本草學の泰斗とし  
 の門下より福山徳順が現はれた。

それから盧艸頌<sup>鹿和</sup>、元徳兵衛<sup>元徳</sup>、年長<sup>年長</sup>、謙次<sup>謙次</sup>、源<sup>源</sup>、も本草學に精通し藥性集要を著して名聲大に振ふた。そしてそ  
 類川藤左衛門が外國物産の品類、產地等を録したことを先の特筆しておかねばならぬ。

寛文時代に入ると、寛文九年に蘭譯司西吉兵衛が諸國土產書と題する著述を撰し寛文十年に唐通事  
 も亦少くはなかつた。と推測したい。

博物學に關する著述が數々輸入されたことであらう。尙ほ鎖國時代以前に於て長崎人の博物係著述  
 あるが、既に其頃には林氏に先じて右の書を冊を繕讀した長崎人もたゞであらうと思ふ。その外  
 慶長十一年林道春が長崎に於て李時珍の本草綱目を手に入これをも携へ歸りて幕府に獻したことか

## 二

猿などを自宅に飼ふてゐたことなどをも遺却してはならぬ。

には植物以外動物などかゝつたことなどを記しておきたい。尙ほ吉雄耕牛などかゝつたこと、類人

第四卷 博物志

1

それから御用の方であつた代官高木氏が生類草譜の動物飼養の任にあつたと、出島阿蘭陀屋敷にも一時鳴瀧にその外文間のシボルト博士が輸入した。その書籍が入る。關する書籍が輸入された。この外交年間にシボルト博士が植物學を許し得て、植物園を設け、幕末にあたりに再び折のであつた。その外籍に入ると。のみならず御藥園や出島の煙草が植物學者のために多大なる利益を興へたのである。書籍は本邦に於ける博物學の發達にも亦偉大な寄與をなした。**南蠻**の黒船や唐人船の渡來により長崎は本邦には相當の注意を興へられ、これと考へたい。また花園などの設備もあつた。そして鎖國時代に**入**主として唐や紅毛人が博物學の進歩に貢獻し、幕末になると紅毛人以外の人異邦人に對して博覽會造詣深き學者が折々來船した。尙ほ區域の動植物、礦物、植物が船舶齊集されたり、博物學に關する書籍が輸入された。のみならず御藥園や出島の煙草が植物學者のために多大なる利益を興へたに關する書籍が輸入された。その外籍に入ると。のみならず御藥園や出島の煙草が植物學者のために多大なる利益を興へたのである。

(二)

して泰西醫術の研究はいよいよ著しき進歩を見るに至つたのである。

又謂ふに、もて現時の長崎醫科大學の源流をなすものである。

に明治元年に至りて醫學校と改稱されたる。これ以後國以て降本邦に於ける泰西式に據れる病院學校の初め



延享元年には唐麴沈草亭が來朝し、同三年に歸唐した。

24

尋いてい享保五十五年には唐通事彭城次右衛門が官命によりて清國通商産物略記を撰述したのである

江戶に淹留したところ、  
[阿蘭陀]本馬場治方の書を  
翻譯して。これを阿蘭陀書と云ふ。  
紅毛人附添

享保四十五年九月十五日  
時江月著

その際右の紅毛人に隨伴せし阿蘭陀大通詞今村市

享保十四年馬乘阿蘭陀人ケイスルが官命によりて江戸に至り  
 九月十二日江崎善  
 享保十五年二月

九月十九日長崎着發

た。そして享保十八年劉經先と陳采若は歸唐し、沈大成は同年十月還つた。

享保二十二年六月には馬醫劉經先江南蘇州府人か射陳采若浙江杭州府人及び射騎沈大成と共に來船し

○なにとて。享保四十一年八月。歸し居たり。

同年十月には趙淞陽蘇州府崑山縣人高輔皇、吳宿來などが渡來して唐譯司河間八平次の宅に滞在する。あつた。尤も氷砂糖や三益糖の製造法に至りては餘り心を心得てゐなかつた。

享保十一年九月第六番厦門船主李大衝は煮烏糖法、黒砂糖製法、煮白糖法、白砂糖製法に就いて上申する所  
屋氏宅に宿するところになつた。周岐來等は享保二十五年五月唐した。

享保十一年九月第六番厦門船主李大衝は煮烏糖法  
黒砂糖製法 煮白糖法 白砂糖製法 白砂糖製法  
に就いて上申する所

享保十一年には周岐來の弟周岐興も來船した。そして兄の製薬手傳のため同年九月特に唐通事柳

享保十一年には周岐來の弟周岐麁も來船した。そして兄の藥手傳のため同年九月特に唐通事柳

や周岐來はは魚貝類百四十五種、植物三十四種、鳥獸三十三種の和漢名を考へて説明を興へ歸國した。○朱來亭  
朱佩亨はは蓂莢保十一二年二月歸唐し、朱子章は同年三月病死し、朱来亭は同年五月歸國した。○朱来亭

左衛門宅に宿泊するところを許され、尙ほ唐人孫輔齋が製薬手傳として同じく柳屋氏の宅に預けらるゝ同年六月には周岐來は儒士朱佩章、醫師朱子章、方宣、樊方宣、周維全等が渡來した。そして七七月に至り唐通事柳屋治同年六月には周岐來は儒士朱佩章、醫師朱子章、方宣、樊方宣、周維全等が渡來した。そして七七月に至り唐通事柳屋治同年六月には周岐來は儒士朱佩章、醫師朱子章、方宣、樊方宣、周維全等が渡來した。そして七七月に至り唐通事柳屋治同年六月には周岐來は儒士朱佩章、醫師朱子章、方宣、樊方宣、周維全等が渡來した。そして七七月に至り唐通事柳屋治

○たし畢回年七拾壹歳とし之。○たしと撰

同年七月唐朱來亭福井縣人が渡來して。そ。陳煥先採藥説と題して世に發表した。年陳煥先唐歸し享保七。

種二六十二  
種  
京保六年六月唐入陳振先が長崎に來船した。そして近郷山野の藥草を採集し、採集草木百六十二種  
寶永三戊子年上梓に係る西川如見の増補華夷通商考には華野の藥物産が記してある。

氏筑の前の説の「具探原用」と軒の「大和」の本の草に「散」も見往々ある向井。

しめこんどを欲し特に向井元升に委嘱して之を作らしめたのである。向井氏綱は東郷李本物の説に依りて李の参る。守が飲食の忽にすべからざるを感悟し能毒を辨じて庖厨の参考以供にして膳羞をして以て調飪の失なからん。

星權苗木亭萬本附千五百四十五本長崎村小島の郷内外各所に立見同植樹密附緑に  
森田郎兵衛が専ら育生の方世話を爲すやうに申渡さる。尙ほ同年九月には浦上村山内、同村村淵、  
安政四年七月御代官所長崎村内地の空地に櫛を植ふるべき旨の諭告があつた。そして同年八月  
説した。そこで永三嘉永三年拾品考一卷を著し、相思子、多麻度其他植物來十種のこゝを説いた。  
弘化二年野田源三郎唐船貨物中より相思子の種子を検出し、これを下種して其の生木を圖繪  
と解説がある。

鳥氏は和方醫術を能くし本草にも造詣淺からざりし人物であつた。天保十二年辛丑、石崎隱思は長崎古今集覽附録名勝圖繪を著述した。その下巻動物の部に象、唐、人、麋、風鳥、獅子、鑾犬、駱駝、馱鳥、マラカウ、マラカウ、阿蘭陀野羊、外國種羊、やまむら、阿蘭陀牛等

天保六年中島廣足は歷木辨一卷を作り筑後三池産の埋木に就いて考證した。比較的詳細である。中に

の探集に従事した。その間に於て川原慶賀はシボルポルトの委囑によりて動植物を寫生した。そして天保七年我國を去るに至る期間に於てシボルポルトに於て本邦と共に渡來のシボルポルトの文政六年シボルポルトの學の研究所を一新した。その文政二十二年我國はシボルポルトの門下たる美馬順三、二宮敬作その他は諸地方に至り博物年



文化十四年には饒田實齋通稱顯藏が海魚考を著述した。

文化七七年冬松浦東溪は外國集覽を著した。その著述には五大洲の物産などが記載してある。

來産物の漢名、蘭名、羅典等を考證し、來歴形狀效用等を解説した。

同年十二月藥種目利頭取にして御藥園掛の職を兼ねた中島眞兵衛は「舶來諸産解説七十七條」を撰し船

享和三年十二月には唐醫胡兆新が來船した。そして文化二年四月歸唐した。

天明二年仲秋筑忠雄は萬國管窺を撰した。その著述に於て彼は異邦の博物に就いて敘述してゐる。

種子を取寄るることになった。

り取寄せ本邦に時つて國益をはかり上申したの幕府は長崎滞在の紅毛人に命じて藥草蔬菜の

同年五月小普請組高力式部支田元雄は紅毛藥草の種、野菜類の種等紅毛人に託して異邦よ

翌明和八年季秋蘭通詞本榮之進は阿蘭陀本草を撰し、平賀源内にも一部の本を贈つた。

吉雄氏及び本榮之進のち太夫な實した。

明和七年平賀源内長崎に來遊し阿蘭陀大通吉雄幸左衛門の宅に寄進し、阿蘭陀の本草を

明和元年十月幕府平賀鳩溪の製する火浣布五枚を送り之を唐人に示した。

寶曆八年田村元雄が長崎に來遊して植物を採集した。市の南にその蘇を折いて「サ」で「イ」を採集した。

延享二年乙丑唐醫李性齋林姓本、名吳、仁學、山孔、號字、久、が聘に應じて來遊した。彼は種痘科を能くした。

4  
1  
7  
A  
•  
7  
2  
•  
1  
1  
\*



Stet. Jupp.

*Vivida me movet Effigies absentis amici,  
 Mentis ac exaltata pondus nulla refert,  
 Deteriam, ingenium, sedulum si mentis acumen  
 Vis scire in lucem profert ipse habet*

Joh. Groenevelt Med. Doct.  
 E. coll. Lond.

高濱村、野母村、日見村、古賀村、茂木村、川原村、樺島村等に於て櫨苗木貳萬八千百貳拾六本を植付くることになつた。尋いて安政六年八月には藥種目野田源三郎、松平肥守家老鍋島上総長崎屋敷家代たる竹林祐作の櫨苗木栽培の計企もあり、櫨後茶、橘等の栽培をも亦計企する者があつた。

安政五年には船竇綿羊を志望者にわちちて飼養せしむるころになつた。

それから安政六年には月輪驢に於て植物場が設立された。そして野田源三郎、竹林祐作、野村友次郎等が植物方勤務を命ぜられた。この植物場は五町程もあつたと云ふ。

### 三

延寶貳年（一六七四年）Dr. Willem ten Rijn が長崎島の阿蘭陀屋敷の醫師として來船して二年間海留した。彼は本の樟樹の枝や實を Danzig の植物學者 Jacobus Rreynius に贈り、添ふるに該植物の記事を以てした。

尋いて天和二年 Dr. Andréas Cleper が出島阿蘭陀屋敷の甲比丹として渡來した。彼は醫學に造詣深く植物學に長じてゐた。

そして一六八二年（一六八五年）Dr. A. Menezel が日本植物の繪千二百六十枚を贈つた。此等の植物圖は日本人の書いたものであつた。尙ほ彼が支那醫學を研究して一六八二年に Specimen Medicinae Sinicae sive opuscula Mebia を著述した。



在價に一、年一に於てしに、本日、つゝ。○

こは獨り醫學ばかりに止まらず尙ほ本草學の研究に於ても多大なる種益を獲たことと信ずる。彼は濟

本植物を研究した。當時長崎の名譯司として世に識られた大通詞吉雄辛作號耕牛其他長崎の蘭通詞な

たるリベンネ氏の高足弟子であつたので、リベンネ式の植物學研究を日本に紹介した。そして彼自身日

安永四年一七七五年にはK. P. Thunbergが島蘭館醫として來船した。彼は泰西植物學者の山中の山斗

記事によりて窺知るゝかである。

一七八四年版にも掲載してある。それから動物や礦物に關する研究の一斑はその著日本歷史附遼羅

*Amoenitatum Exoticarum* に於て發表した日本植物の名稱は K. P. Thunberg の著述に係る Flora Japonica

Sir Joseph Banks の上梓する所になつた。その外題は Icones Kaempferianae といふ。

研究材料は倫敦の大英博物館の所有となつた。そして日本植物畫集の四十九葉は一七九一年に至り

共大部分は長崎の阿蘭陀通詞の助力に依拠したものであらう。一七二六年彼の逝去によりてその蒐集

[Amoenitatum Exoticarum] 七  
大 異 國 産 珍 貴 品 一 覧 表 出 産 地 別 記 載 有 限 公 司 編 著 研 究 所 負 担 人 大 塚 秀 一 著 少

學にも亦造詣が深かつた。その日本植物の研究の結果は一九二一年レムズウェー版 *Amoenitates Exoticae*

それから元禄三年に Engelbert Kämpfer が出島蘭館の醫員として來船した。彼は醫學の外に博物

しなごみ記をてし









出島花畑



彼は Mackenzie 氏の紹介によつて蘭通譯として長崎の御藥園掛役たる北村元助に面會したといひ、北村氏が自口の名に因み植物 Hoya Motoskii に就きてのみ——自傳であつたといふべきを記載してゐる。そして動物なるに關する考察もある。

文久二年より同三年までの間に於て Richaad Oldham は長崎附近及び朝鮮に於て植物の採集に従事した。そして Prof. Oliver は Notes upon a few of the Plants collected, chiefly near Nagasaki, Japan and in the Islands of the Korean Archipelago, in the years 1862-63, by Mr. Richard Oldham, Late Botanical Collector, attached to the Royal Gardens, Kew. の題をもつて發表したといふものがある。

### 藥園

延寶八庚申年（一六九〇年）長崎奉行川崎津守在勤中小島の内十善寺村に唐船持渡りの藥草を植附するに至つた。その藥園は千七百六十坪程であつた。その後元祿元年に至り町宿の唐人を右の場所に移し唐人屋敷を設立するに至つたので従前植附に係る藥草木は殘らず之を立山奉行所内に移し植ゆるに至つた。

それから享保五庚子年（一七二〇年）小島郷のうち一天草代官役所地に

三合六才五拾一坪  
合數六千七百六十坪

に藥園を移し

れを御用藥園と稱したのであつた。

享保十乙巳年（一七二五年）には藥種目利藥屋徳右衛門が御藥園掛を命ぜられ加役料銀貳貫目の手當を



Willem ten Rijne, Andries Cleijer, Engelbert Kämpfer, C. P. Thunberg, Ph. Fr. von Siebold 其他

内に花畑と云ふ植物園が設けられた。其處には本邦の花卉草木や異邦の植物が栽培されたのであつた。寶永十八年阿蘭陀商館は長崎の出島に移された。之を阿蘭陀屋敷と云ふのである。この阿蘭陀屋敷

### 出島花畑

斯くて御藥園は慶文化七年に至りて西山郷へ移さるゝになつた。併し明治元年に至りて廢せられた。なにと云ふのであつた。

朝日をうけ八ツ時過ぎより陰になり、且つ土は黒土にて土性柔らかなれば何品を栽培して差支はるを植ゆるには不適當であるから西山郷へ移る可とする。西山の方は西北を塞ぎ東南に向ふてゐる。施しても暖地の草は育ちにくき憂あひり、且つ下雪尺程に下は赤土にて堅いといふ岩の如く一々體藥を夏分早の節などは往々草木の枯るにこもあひ、また冬季に入ると西北の風強吹きあつた故霜ひてをうけてゐるので正午過ぎより日暮まで日陰少く夕陽強き故陰地を好む藥草は育ちかね別して郷に藥園を設立すべき必要あることとを當路者へ建白したのであつた。即ち右の藥園を塞ぎ西北文化六年藥種目利頭取にして御藥園掛を兼ねてゐた中島眞兵衛は十善寺の村の藥園を廢して更に西山

年五百貳拾八坪の地所を買入れて藥園を擴めたのであつた。受くることになり尋いて享保十七年壬子年一七三三年八百屋久右衛門がその後任者となつた。そして同



當時長崎の出島には Dr. J. K. van den Broek が滞留してゐた。そして大通詞品藤兵衛、小通詞

出來得る限り盡力すべしとを建白した。

於て窮理分離學所取建方決着の上は微力及ばず乍ら右に入用なるもの海外より取寄せ方萬端に就いて  
 (三)幕府に  
 れたる(二)窮理分離學のため入用の器具等外國より取寄することを當面の急務となす(三)幕府に

出島附書面を以て長崎奉行村對馬守へ(一)長崎に於て窮理分離學の傳習速縮いたすやう計畫を立てら

安政二年長崎在留阿蘭陀國領事官 Donker Curtius は一八五五年十二月十九日 安政二年卯十一月十一日

眼には未だ幼稚なるものとより外に映しなかつた。

觀瀾廣義や京都廣瀬元恭の理學提なを擧げておきたい。しかし日本に於ける理學は來舶異邦人の  
 梓るれ。これにはダゲクロマ、汽車なをのこにも及してゐるのである。なほ川幸民の氣が上  
 かく此方面の研究はいよ盛になつて來た。そして安政元甲寅年には川幸民の遠西奇器述べた。  
 慶右衛門などはバクセヤに書面を贈つて Dr. W. Bosch に化學に關する質問をなしたこともあつた。

天保初年の頃には上野俊之丞などは化學の研究に心を潜めてゐた。そして嘉永二年には蘭通詞小川

を傳へたのであつた。

のであつた。それから數年後の帆足萬里は蘭國ライプツシヒの實驗物理學者シュツシヒプロクスの學說な  
 化學書として宇田榕庵の舍密開宗天保八丁酉年上梓なすが既に文政天保の頃世に行はれた  
 かな。



植物學に造詣深き紅毛人の來舶は出島の花畑をして日本植物學者の艶美せしむるに十分なる設備を有せしむるに至つたのである。

文政六年シホルトの渡來と共に出島の花畑はその面を一新するに至つた。そしてシホルトは

入縣右口立圖書館に遺存してゐる。

## 第五章 物理化學其他

長崎の名醫司吉雄耕牛、西善三郎、本木仁太夫其他の指教をうけた諸國の學者は少なくなつた。平賀源内の電氣治療器のことは世に周知られたのである。前野蘭化は翻譯運動法を草した。それは力學に關して力の平邊形多角形の理などを説いたものである。

長崎の蘭學者志筑忠雄は曆象新書、求力論其他を著述し、力學、光學、數學などに就いて泰西の學說を輸入した。志筑氏は文學、語學等に於ても亦造詣が深かつた。志筑氏の高足馬場佐十郎は泰西

七金譯説を作つた。上梓され七年に

物理化學に關する洋書も亦幾多長崎に船齋されて他地方に分布した。それ等の洋書を讀みて泰西の物理化學の學說を傳へた人も少なくなかつた。物理學書としてには青地林宗の氣海觀瀾文政十八年丁酉七月桂川國宗の序



り翌十日後に至る大風經過などの際には十分の観測を爲した。其後出島阿蘭陀屋敷に於ては氣象觀測留中の氣象觀測の表を載せてゐる。その後 Siebold も亦氣象觀測に注意を興へ文政十一年八月九日淹安永年間に來船した Thunberg 氏はその著歐羅巴、亞弗利加、亞細亞特に日本旅行記に於て長崎淹

## 第六章 氣象觀測

献をなした。

至り長崎小島の養生所に於て新に分離窮理所が設立され、Dr. W.K. Gratama が之を督し多大なる貢當の注意を興へたので日本に於ける理學はいよ盛んに研究するものになつた。越て慶元年に相するところ及び醫學校を設立するに百方努力してその理想を實現し得た。そして理學の研究にも独立であつた。尋いて Dr. Pompe van Meerdervoort 氏が來船したが、ホッペン氏は日本に於て病院を設立の欲するところに在つた。それで自然トフル・フ・フ・フ・フ氏は理學及び工學に重きをおいたをして理學や工學に關する知識を日本に普及する基礎を作らしめて日本文化の開發に寄與せんと醫師として來船した。來船したものであつたが時の阿蘭陀領事 Donker Curtius の志望は Dr. J. K. van den Broek 算術石炭坑鐵製造方其外の學科を研究するに在つた。フ・フ・フ・フ・フ氏は元來出島蘭館西慶太郎、本木昌造、梅林左衛門、小通詞並鹽谷種三郎、町醫師吉雄圭齋などが卒先して分離窮理測量
























# VOCABULARIO DALINGOA DE IAPAM

com adequação em Portuguez, feito por  
 ALGUNS PADRES, E IR.  
 MÃOS DA COMPANHIA  
 DE IESV.



COM LICENÇA DO ORDINARIO,  
 & Superiores em Nangafagui no Collegio de la-  
 PAM DA COMPANHIA DE IESVS.  
 ANNO. M.D. CIII.

長崎の久内田九一その人であつた。それから内田氏は明治天皇を撮影し奉つた。併し寫眞業の經營は當初容易なものではなかつた。明治初年東京に於て寫眞業で成功したのは幕末には江戸や神奈川方面に於て下國蓮林、清水、谷本その他寫眞をよくするものが少なくなつた。寫眞術を學んだ。

往來し蘭人に就いて寫眞術を修めたと云ふ。それから内田九一も亦吉雄主齋や上野彦馬に益を請ひて久二年には上野彦馬の撮影所が設けられた。その頃龜屋徳次郎、本姓阿部氏、長州人、は出島の阿蘭陀屋敷に文久二年に上野彦馬の撮影所が設けられた。その頃龜屋徳次郎、本姓阿部氏、長州人、は出島の阿蘭陀屋敷に寫眞の處を詳述してゐる。のち慶應二年江戸にて柳河春三の寫眞圖説なごも上梓された。二年壬戌秋には舍密局必携を上梓するに至つた。そしてその前篇第三卷の附録影術ボタカモリに於門に學び又蘭醫ボエン氏に就いて舍密學を修め寫眞術に關しては佛人シイエ氏にも益を請ひ遂に文久上野俊之丞の子上野彦馬天明七年八月廿七日生、天保八年五月廿七日歿、は漢學を豊後の廣瀬窓に、蘭學を大通名村八右衛邦人に化學物理の知識を與へ、寫眞術に就いても相當の注意を與へた。

邦人化學物理の知識を與へ、寫眞術に就いても相當の注意を與へた。それから Dr. Pompe van Meerdervoort 人シイエ氏は長崎にて人物山水其他を撮影したのであつた。それから Dr. Pompe van Meerdervoort 尋いて安政初年蘭人 Dr. J. K. van den Brock はオートグラフ式の寫眞器械を用ひて撮影するものゝあつた。尙ほ佛に載がある。それから川本幸民の遠西奇器述安政元年版、タムケタムの説明が載せてある。

文學などに關する書冊の刊行に着手したのである。そして長崎島原地方、天草に於て種々の書冊が  
耶蘇會の伴天連 Alessandro Valignani は泰西の印刷器械を輸入し西洋式活字を用ひて宗教、語學、

## 第八章 印刷

寛道その他は諸處に寫真業を開創し寫真術の普及に多大なる貢獻をなしたことを附記しておきたい。  
爾後日本に於ける寫真術は著しき發達を遂げ以て今日の盛況を見るに至つた。上野氏門下の中島

た。

それから明治十年西南戦争の際には上野彦馬や薛信二郎は從軍して戦地のさまを撮影したのであつ  
た。觀測を行ふた。その際上野彦馬、龜屋徳次郎などは金星經過觀測器械その他を太平山にて撮影した。  
測を行ふた。かつたが、同時の米國にギベツソ博士は大浦の太平山にて同じ金星經過觀測  
それから明治七年二月九日金毘羅山麓天狗山に於て佛人ジャソノ氏が金星の太陽面經過觀  
測を行つた。

板に改めたのは明治二十年九月のことであつた。要するに長崎にて乾板の行はるに至りしはその頃  
増してきた。薛氏は東京にて清水東谷に従ひて寫真術を修めた。薛氏の日記によるとき薛氏が濡板を乾  
なほ薛信二郎 弘治四年八月三十日生、清河磯次郎 日治三年八月十八歳六





はじめ長崎奉行所の經營にて印刷をつとけて行つたが文久の頃には出島にて印刷を行ふことになり  
や萬延元年麹屋町増永文治發行に係る蕃語小引などを舉げておきたい。

政六年下筑後町鹽田幸八の發行した A New Familiar Phrases of the English and Japanese Languages  
活版發行はるやうになつた。そして洋字・漢字・假名字を交へたものが上梓するに至つた。例へば安  
シールト著(なご)は眞事に見事な印刷である。斯く西洋式印刷の發達してきた結果、民間にても西洋式

その後文久元年のころには出島にて印刷を行ふてゐた。一八六一年出島版 Open Brieven uit Japan  
てくれたことを特筆しておきたい。

この印刷には蘭國ライチツペの人の G. Indermaur イペルマウは長崎の故郷にふにが監督となりてよく日本人を指導し

られた。蘭醫ボソペン氏は特に學生のために蘭語の醫學書を上梓した。  
白餘は壹部につき金貳歩にて長崎會所より賣捌いたのであつた。斯くて長崎にて諸種の書冊が印刷  
翌安政三年丙辰年六月には文法書シタシマス百貳拾八部が出来上つた。そして壹部を天文方に納  
入するやうに取計ふことになつた。尙ほ蘭國へ洋字の活字銅板などを註文するにこになつた。

御目付方時々見廻り印刷全備の上役々立會ひ検査の上印刷の届出をなして壹部をつつ天文方役所へ納  
關老阿部伊勢守は同年八月この建白を採用了。是に於て西役所内に印刷所を設け、御勘定方及び  
してある。

奉行所に於て摺方試み長崎會所に於て一般志望者へ賣渡したなら世上便利にもなるべきなぞが記  
入の持渡しし活字板を先勤長奉行の許可を得て蘭通詞共受所持せるを更に會所を以て買上此節  
て建白書を贈つた。その建白書には(一)近年洋書の需要著しく供給不十分なること(二)阿蘭陀通詞は別し  
て建白書を安政二卯年六月長崎奉行荒尾石見守は間老部伊勢守へ阿蘭陀活字板蘭書摺立方に就い  
るには餘りに僅少であつた。嘉永六年ハリ來朝の後には洋學の研究は寧ろ急務となつた。洋書の船齋は洋學者の需要に満足を與ふ  
た。

印刷の必要をしみじみと感悟し、都合よく西洋印刷機を利用して出版し着手する所存であつたと考  
郎は代銀半高づゝを負擔することにして右印刷機一式を受けいたのであつた。要するに彼等は西洋式  
郎、本木昌造、北村元助四人に應御用方より借受けが、同年十二月末頃品川藤兵衛と樽林定一  
その後約百四十年を経た嘉永元年蘭書植字判一式が船齋たるのを蘭通詞品川藤兵衛、樽林定一  
印刷術や銅版は全く廢絶してつた。

は銅版術も行はれたのであつた。併しそれは慶長十九年吉利支丹寺の破却以前のこと、爾後西洋式  
上梓られた。Satow 氏の The Jesuit Mission Press in Japan に掲載された分だけ可なりである。

とだけ事實であらう。

安藏や市九郎が果して元祖であつたか、其邊のことは判明せぬ。但た彼等は妙手であつたと云ふといふに過ぎない。

安藏、市九郎といふものを始とす。

玉細工並造り珊瑚珠 玉細工の外に造り珊瑚を拵ゆるは唐傳也。又蠻人より教へたるもあり。

### 玉 細 工

長崎夜話草に「玉細工 蠻人唐人にいづれも傳を得て上手也」とある。長崎地名考に云ふ。

### 鉛 細 工

鉛細工も色々あつた。就中鉛の指輪などは女兒の間に行はれた。

### 金 銀 細 工

長崎の金銀細工も亦行はれ、妙手も少くなくあつたと云ふ。筭、指輪、其他いろいろあつた。

### 螺 鈿 細 工

たて云ふ。卓子、手箱その他螺鈿細工の精巧なるもの多く遺存してゐる。





長崎古今集覽附錄名勝圖繪



八  
 十  
 二  
 八  
 十  
 二

綿弓経 唐人傳來。萬吉を根本とす。古は唐土にて牛の筋を以て造れり、末代鯨の筋にて作る。

綿弓るつゝ経は唐人の傳へたるもの、で、萬吉なまは、その製法に妙を得てゐた。長崎夜話草に云ふ。

### 綿弓弦

言葉は忘れられぬが、餘り行はれてゐないやうである。

南京正傳の長崎針と稱して世に行はれたものである。根本唐傳であるといふ。現時南京針と云ふ。

### 南京針

せてみなければならぬ。

明治に入り、艦甲にて外國軍艦なまの模型を作り、外國人に歡迎さるやうになつたことを考へ合

唐大船工 唐船又は紅毛船を小さく造りて賣つても多し。泉水なまにうめ置によし

やうである。長崎夜話草に云ふ。

唐人船や紅毛船の模型を小さく造りて賣つたものである。併し今日にてはこの細工は廢絶してゐる

### 唐紅毛船細工

たこを容易に想像し得るのである。

長崎夜話草に「造珊瑚珠、正真と見誤る事あり必ず吟味して求むべし」とある。餘程巧妙に作られ

### 造珊瑚珠

長崎人前田藤内が木像を善くしたことを附記しておきたい。

夜話草には唐入方三官の妙手なりしことを特筆してゐる。その外にも妙手は幾人もゐたと思ふ。また寛文のころ來舶唐人范道生が佛像を造るに堪能なりしことは世に普く知られてゐる。また長崎

### 唐 風 佛 工

と云ふ説がある。足袋、手覆など造りたるものである。往時南蠻人の傳へたものである。

メイヤスマタはメリヤスマ云ふ。メイヤスマは葡萄牙語に、meias メイヤスは西班牙語 merias にあ

### メ イ ヤ ス

れてゐる。

往時足袋は長崎名物の一つに數へられてゐた。明治時代では多少行はれてゐたが、現今には廢むかしの如くは買入多からず。

畦足袋 昔は諸國になし。ありといへ共長崎には勝らず。上方諸國より買者甚多かりし。近年は

夜話草に次の記事がある。

長崎足袋の江戸あたりに行はれたことは寛永年間の色音論にも見ゆる。また畦足袋に就いては長崎

### 足 袋

見得たり。





線香

加へてゐる。

初めその流傳あまた分れたりと云ひ傳へてゐる。長崎夜話草には「五島一官父子同名にて線香造りし長崎の線香はもと唐傳である云ふ。根本五島一官といふ者福州より傳へ來りて長崎にて造り

德の頃迄兩人あるのみ也」と述べてゐるが、大体に於て長崎夜話草の説に據り別に自己の説を附子唐紙等の種類なり本邑にて唐客の眞傳を受たるの一の外の入來たり實永正

附考

香月薰平翁はその著長崎地名考に染唐紙は青鼠色、水色、桃色種々ありて、地紋色に切箔入りのものもあつた。

染唐紙及び紋唐紙

なくし。手形證文に用ゐる紙なり。

瀝こな。此外清帳紙多し、他國には比類なしと見へたり。殊外つよきかみにて虫く事す

襖紙

云ふ。

本紙屋町を單に紙すき町または紙屋町とも云ふ。兩紙屋町は長崎製紙の本場であつた。長崎夜話草に

紙類

香、吹玉、色々「とある。

唐風珠數も亦行はれた。長崎夜話草に「珠數、唐風色々望次第、紫旦、黒旦、白旦、護神香、降神

珠數

長崎の諸人敬崇し常に參詣絶すして祈願吉凶の籤を取人々皆靈驗あらふ事なし。

容儀端正なる事他の像に異なり。此外には同作なし。此像甚だ靈驗にして唐人はいふに及ばず

今七十七餘歲猶存せり。三官の作は福濟寺の法堂の本尊觀音の像則其作なり。長五、六尺、其

次男も醫を好みて人を救はる多し。二人共に學才有てて次男は殊に書を能し草書殊にすぐれたり。

ひに父の名を辱かしめんとて父死して後つゝおに佛工を拾ひて男は醫術を好みて人を惠み

の傳を得たりといへども佛工は甚身を勞し又其心を用ゐる事深からざる時は靈像全き事を得ず<sup>な</sup>慈

唐風佛工 方三官を元祖とす。三官は福建漳州の人にて佛工の妙手なり。其男二人、皆父

方三官に就いては、長崎夜話草に次の記載がある。

書畫を能くす。寛文十年一月二日長崎にて逝去す。得年僅に三十六、崇福寺境内に埋葬す。

范道生は一に范石甫として知らる。寛文のころ長崎に來舶し長崎唐寺の佛像を作つた。また詩文

附考

長崎夜話草に「唐金鑪物、花入、卓、香爐の類皆唐風也。根本道助といふ者廣東國へ渡りて習ひ傳

唐金鑿物

象眼を入る事に長じてゐた云々。

へたが、後ち清左衛門といふ者のこの工細工を習ひ得て隨ころ塞をれしく鑄器に堪能なる唐人ありて他の傳

工  
田  
部

象眼鐙 勘次を根本とす。其祖靈國に渡り傳へ來り漢南（なんなん）鍾繻（しんそ）本も靈流を傳へたる者なりとぞ。

彼地に於て其法を傳へたるものなり云ふ。○長崎夜話草に云ふ○

勘次は刀劔飾具鐵鑢に金銀銅の象眼をおくところ巧妙なりと稱せられた。勘次の祖が異邦に渡海し

象眼鏡

ある。堆朱の製りものとては印籠、根附、香合、盆の類が行はれた。

ては、朱、堆、屈、沈、金、青、貝、色、時、繪、そのほか種々唐風漆物道具は大に行はれた。就中、堆朱に至り

塗物

ころ臺灣にて紅毛人を屈せしめ武勇の働ありし人物であつたことを附記しておきたい。



に妙を得てゐたことは事實かも知れぬ。ついで乍ら濱田彌兵衛は武藝の達人、砲術の名人で、寛永の  
かし必しも濱田彌兵衛が眼鏡細工の元祖と謂ふべきものであると考へられなない。但彼がこの細工  
鑑造り様を習ひ傳へ來りて生島藤七といふ者に教へて造らしめたるより今にその傳なり「とある。  
近視眼鏡など色々あつた。長崎夜話草には「長崎の住人濱田彌兵衛といふもの壯年の比蠻國へ渡り、  
眼鏡細工は往時長崎の特技の數へられつた。鼻眼鏡、虫眼鏡、數目鏡、破目鏡、透目鏡、透目鏡、眼  
併し往時久し行はれた造花は現今にては餘り行はれてゐないやうである。

### 眼鏡細工

ならべて見て見れと見分けがたし

造花 根本唐人より傳へたり。多くは蠟花にて、又望ある時は通草をもつて造る物あり。生花に  
つた。通草は長崎にたゞ、木といひ、俗に山灯心と云ふ。長崎夜話草に云ふ。  
もと／＼唐人より傳へたものである。概ね蠟花であつた。また望により通草をもつて造るものとあ

### 造花

香を善くしたものは他に幾人もゐたことであらう。

は線香製造に妙を得てゐたものであらうが、必しも長崎線香の元祖と云ふ譯にはゆくまい。唐風の線  
は子一官にて後清川某と日本名に改む國姓爺が友としてて福州へ往し者也。「とある。要するに五島官

受て仕立しなかり「なごどある。萬屋町の空の鋒の垂れは刺繡は魚介類を極めて巧妙に現せるものにて往々  
崎地名考に「其後在勤奉行より紅府進献の事ありに後には年々と調進の事となり本邑の職工命名を  
少趣を異にせる點あり一つの特色を持つてゐたので長崎繡と世にもはやされたのであつた。  
刺繡は唐人によりて傳へられ著きき發達を遂げたのであつた。長崎の刺繡は關東や上方のそれと多

### 刺 繡

ない。

ある。中村氏は蒲池子明の前名であらう。彼は寧ろ自己の嫌みとして製してゐたので佳品が少く  
な。鵬ヶ焼は文化のころ長崎の人中村吉秀が稻佐の鵬崎にて作りはじめたので、し稱するの

### 鵬ヶ焼

たか失敗に終つたが、作品は決して失敗ではなく正しく成功と謂へやう。

や來船唐人の下繪などあり、その精巧なるは世にもはやされたのであつた、要するに經營は  
神氏を援助した。唐の經營は失敗に終つた。併し木下逸雲は陶器には木下逸雲はじめ當時の名士文人墨客  
なるほど、龜山燒の經營は失敗に終つた。併し木下逸雲は陶器には木下逸雲はじめ當時の名士文人墨客  
了遂に慶應元年に至りて借財處分の仕方その他を當路者に一任するところになつた。

甚五平の手許仕入れ云ふになつた。大神氏は霜雪苦陶器製造の維持に努めたが、結局失敗に

安政六年に至り官營となり御用陶器所と稱した。併し經營困難なりしたため文久元年に至り二代大神主として染付陶器の製造に身を委ねたのであつた。これらを世に龜と山燒と云ふ。

甚五平が一手に引請けて經營してゐたが、出費多く引合ひ兼ねて色々と工夫した結果文化十一年戊辰蘭陀人向きの水瓶製造を思ひたち長崎伊良木郷字垣根山において陶器製造に従事した。その後大神文化元年のころ長崎八幡町の大神甚五平、山田平兵衛、古賀嘉兵衛、萬屋吉四人のものが、阿

### 龜山燒

時廢絶す。

花毛甌は花卉羽毛などを入れたもので、長崎夜話草には「モサル人傳來也大小色々ある。現

### 花毛甌

た。

甌女は櫻馬場の鑄工周悅の女なりと云ふ説がある。その作物は世におの龜の作と謳はれたものであつ

後ち益精巧となり、其業に達し世に奇工と稱す。其後カメといふ女此業に巧にして其名世に高し。

鑄物は花活、香爐、大花瓶、手爐等皆唐風也。道助といふ者廣東に渡り於彼地習ひ得て歸朝す。

長崎地名考に云ふ。

「た」である。





る。長崎夜話草に云ふ。

ビトロ細工は南蠻人の傳へたものであると云ふ。トロと云ふ言葉そのものが明白に物語つてゐ

### ビトロ細工

々のものが製作さるるのである。

型の如き精巧なるものを作るやうになつたと云ふ。現時婦女裝飾品の外煙草入箱、手箱、其他種々様細工の海外に於ける販路は漸次擴げられ、以て今日に至る。それから明治七年の頃は軍艦模安政開港の頃から長崎の甲能辨五郎などが長崎に來る露國人に之を賣込みしより以來、艦甲れた。そして現今にても長崎の特技として周く世に知られてゐる。もとの唐傳なりと云ふ説がある。

艦甲細工は徳川幕府時代に於て著しく發達し、艦甲製の筭、櫛、簪などで婦女の裝飾品として行は

### 艦甲細工

國時代に行はれた刺繡とは全く趣を異にしてゐるやうに思はれる。

の如きは頗る精巧なものが少なくない。但た外人向きの刺繡は外人の趣味に適應するやうに作られ、鎖今日にても多少需要がある。この種の刺繡は邦人には、餘り歡迎されないうである。軍艦の刺繡など外國人向きの刺繡、例へば國旗、軍艦、花鳥、其他の刺繡の如きは明治の初ころより販路を擴げ、時長崎刺繡の盛んに行はれたことを證明する遺品と謂へよう。

あれば唐土風より一變したのもある。銅壓跡や樓町の算盤屋にて作りたる算盤は名高いものであつた。算盤は元來唐傳である。のち長崎の職人工夫を凝らして長崎特有の算盤を作るに至つた。唐土風のも

### 算盤

星圖、地球圖の類は大に行はれたのであつた。

それ天文道具の製作は早きより發達してゐたのであつた。日尺、星尺、圓規、日晷、天渾天儀、長崎は南蠻人や紅毛人の天文學の傳はりたる土地柄なるにより、隨つて幾多の文學者を産した。

### 天文道具

そして今猶ほ遺存せるピロロ細工の作物に昔をしのぶのである。

長崎のピロロ細工は往時天下と謳はれたものであるが、今日に至りては全く廢絶して丁つてゐる品は花木鳥獸介種の形様を造りて近世いいよ精なり。

硝子 蠻人傳なり。びいごうに造る白石他國にはなし。長崎近き海邊にあり。諸の器物玩好の諸

長崎名勝圖繪に云ふ。

あり。茶磨石の宇治に有が如く不思議の事なり。

一の器物紅毛の細工に勝れり。此扱びいごうに造る白石他國にはなき石なり。長崎近き海邊にあり。是も蠻人長崎にて教へて造り初しより今其傳統絶す。還てむかしより今上手で成てさす

硝子  
シロコガラ



唐木細工は紫檀、黒檀、鐵刀木唐土製のものより上なる唐土製のものを用ひたのでなく、尙ほ吾邦の唐木細工とて知られたるものもある。唐木細工は紫檀、黒檀、鐵刀木唐土製のものより上なる唐土製のものを用ひたのでなく、尙ほ吾邦の唐木細工とて知られたるものもある。

唐木細工

キ、ヤ、ハ、櫛、筭、エ、ツ、の、類、硝子器、花草彫物。國傳のり。

マシ細工と云ふ。長崎名勝圖繪に云ふ。

硝子にて造れる筈、  
 コップ、其の諸器に花卉、羽毛、其種々をまゝの模様の彫刻するものや

工聯公司

或は何程にても望みに造つたものである。これらは根本選羅人の傳へたもの云ふ。長崎夜話草參照

長崎にて花御座云々。蘭を赤く染くため打つたので。長は五間、七間、廣さ一間、二間。

花 筵

其後傳  
924

風狂子

二代 若君之臺左衛門  
三代 若君之長右衛門  
四代 若君之臺十郎

蘭溪君芝、河村氏が唐僧木庵より傳へて得て象眼縁頭目貫鏤小小柄等を作り世に君芝の作と嘆賞されて云ふ。



るこゝにないとしてとて顯る世にもはやられたのであつた。

もので、手拭のみに限らず衣服の料にも充てたのである。長崎の紺屋にて染めたものは容易に剝落する。長崎地名考には「花手拭」は唐傳也「とある。金巾木綿などに花鳥唐艸其他種々の模様を染め出した

花手拭 南蠻傳。花鳥の形をしぼにせられたるものなり。長崎に一人は造る者なし。

長崎夜話草に云ふ。

## 花手拭

それから廣瀬氏や猪俣氏の製作に係る缺も亦長崎缺と稱して珍重されたとを記しておきたい。は南蠻流、猪俣は紅毛流である云ひ傳へてゐる。

外科道具を以て有名であつたことは周知のことであるが、尙ほ猪俣氏も亦著しく世に知られた。廣瀬が外科道具を以て世に謳はれた。随つて外科道具なども長崎製は流行はれたのである。廣瀬氏が

外科道具 南蠻紅毛傳、廣瀬を根本とす。

長崎夜話草に云ふ。

## 外科道具

併し今は廢絶して、概ね他郷にて製れる算盤を用ひてゐる。

名匠かゝたが、その後餘り行はれぬやうになつたらしい。

た。之を用ふれば火影隨る鮮明であるので甚だ珍重されたのであつた。元來唐傳にして文政の頃まで羊角細工は羊の角を煎て薄く紙の如く製したるものにして燭臺または燈籠の風覆ひとして行はれ

### 羊角細工

るものは又巧みなる業也。

至て美麗なるものにして江府進献品の内なる書皿紗といふ様々の模様を形に押さずして書きた皿紗染の法種々あり。南蠻人より法を傳ふ。人物花鳥の染形又は金皿紗書き皿紗等也。金皿紗は

長崎地名考 香月壽中著 に云ふ。

頃長崎の伊東善平次の金書入れ皿紗なぐは見事なものであつた。

長崎にても皿紗を製つた。南蠻人より法を傳へたと云ふが、黒坂も亦傳へたものと考へた。明和

chitraを以て母語となすべし云ふ。とびちウリヤト字書参照。

chites(復)ひつゝ綴じた。そのち chintz を綴つた方が今なほ行はれてゐる。此等の言葉は印度語

紅毛人はいわをsits, ehits, chintsといふ綴じてゐる。また英國人は chint, chints, chince, chintz,

を述べてゐる。母語となすべし云ふ説を採つてゐる。

Viana. Apostilas, I, p. 347.

て造り、或は吾邦の木材を用ひて唐土風の細工を施したるものもある。

### 唐風竹細工

唐風竹細工は斑竹、黒竹を以て巧に曲録、卓案、書棚、茶棚、籠・煙艸盆などを造るのである。入郎平と云ふ者が名匠であつたを云ふ。これも亦今廢絶してゐる。

### 唐硯細工

唐土風の硯の細工も亦他郷に評判されたものである。彫刻の刀法太だ巧であつた。特に黒川正英の作は有名である。併し唐硯細工は現時に廢絶してゐる。

高濱村より産する青雲石は硯材として評判された。その質美にして蒼黒なるを以て一時行はれたものである。また印材として用ひられた。

### 更紗

ササは麻紗をかいである。また更紗と云ふ文字も行はれ、今日にては一般に更紗と書くやうである。元來ササは東印度の各産で、その名稱の如く東印度のササより葡語に輸入されたものである。葡語にては sarasa çaraça, sarassa, saraça といふ。Dalgado 氏の著 *Influencia do*

Vocabulario Português en Linguas Asiáticas に於て

Saraça ("tecido estampado"). Conc. saras, Jap. sarasa De origem malaia, sarásah. Vid, Gonçalves

金毘羅山の紙鷹揚げ

熊山  
神宮寺



長崎古今集覽附錄名勝圖繪



繪 照

しきに亘りて行はれてゐた一つの特色ある宗門改の儀式であつた。その初期に於ては轉教證明即ち吉繪照は羅馬舊教徒に非ざることを有効に證明するたために定められ、寛永より安政に至る百餘年の久

第十章 特殊なる行事

枕土圭、根付土圭、袂土圭、尺土圭、押土圭、管絃土圭その他色々あつた。

時計と云ふ文字よりも、土圭、土景、斗景、景、自鳴鐘など云ふ文字が古いやうである。そして振土圭、

に於ては確に優秀なる技能の持主であつた。

長崎の時計師は器の製作にも餘程苦心した。そして時計細工に附随する裝飾、からくり細工など

往村山等安後代官なにも時計細工に妙を得てゐたと云ひ傳へてゐる。

時計師のうちにも、幸野氏、上野氏、御幡氏などは代々時計細工を以て聲譽を馳せたのであつた。

をなすためと云ふ。

時計

本邦に於ける時計製造の中心地たる觀を呈した。往時長崎に時計師といふものも江府進献の公用時計は南蠻人の渡り來りし頃既に實行はれたることは多言を要せぬ。そして鎖國時代に入ると長崎は

ら三月に入りて春の深みゆく頃までの期間は大人も小兒も紙鳶揚げに熱狂するの自然三月と紙鳶揚げである。徳川幕府時代に於ては正月頃から兒童たちが小な紙鳶を街に揚げて始め二月の下旬まで歐米でも喧傳された。元來紙鳶は行事附屬の遊技と稱するより寧ろ春の季の遊技と謂ふべし遠く長崎の紙鳶揚げは往時既に唐土、阿蘭陀、東印度などより來り舶した異邦人によりて東洋はもとより遠

### 紙鳶揚

市史風俗類參照。

くであつた。九日には銅座跡で繪踏があり、それから代官領や九州諸地方にて繪踏が行はれた。長崎の例年繪踏は正月三日町家内の繪踏を以て始まり正月八日まで市中一般の住民の繪踏が續いてゆく。云ふの繪板は意文九祐年佐の係るもの云ふのである。

踏む所の繪板と云ふ意味にも用ひられた。繪板は「板の踏」と繪踏とに分類された。そして單に繪踏は長崎方言言に於ては繪板を踏むことを繪と云ふのであるが、文書などにはよく踏繪とある。踏繪は年中行事中最も異彩ある特殊の行事の一つとして了つた。

云ふ事實を立證するに止まり、儀式の發達するにつれ、それに附隨する諸種の慣習發生し、遂に長崎を公然言明する者皆無となり及びて自然轉教證明の意義を失却し單に耶穌教徒に非佛教徒なりと利交宗門を棄て轉じて佛教に歸依する事實を證明するを主としてゐたが、年所を經て羅馬教信仰



刻頃より行厨を携へて臺所に至り西の刻頃を待て燈を塔前に挑く。一所の點燈或は三十或は四十、同十四日種種の佳饌を設けて朝夕靈前に供す。僧徒棚經の聲晝より一夜に繼ぎ且家々女女申の

ふして撤す  
是亦一説なり

にす。或は云衆僧を經に誦經に向ひて棚經に向ひて誦經する故なり。

て誦經す。名つけて棚經と云。是各若干の布施物を利するにあるのみ。

又棚經と云事あり。雲水の僧諸宗比丘尼等親陳檀線を募るに足す。家々に突入して靈前に向ひ

姫の輩は實に者十萬里の淨土より難具嘗て來ると思ひ種々の辭迷ふに足る者多し。

婦人女子圓圍佳饌の備なし門には大なる紙燈を挑け深更に至る迄戸を鎖して之を待。老

婦人女子圓圍佳饌の備なし門には大なる紙燈を挑け深更に至る迄戸を鎖して之を待。老

婦人女子圓圍佳饌の備なし門には大なる紙燈を挑け深更に至る迄戸を鎖して之を待。老

婦人女子圓圍佳饌の備なし門には大なる紙燈を挑け深更に至る迄戸を鎖して之を待。老

婦人女子圓圍佳饌の備なし門には大なる紙燈を挑け深更に至る迄戸を鎖して之を待。老

## 盂蘭盆會

人たちによりて長崎に輸入されたと考へた。い。

往時は舊曆七月十三日より十六日まで盂蘭盆會が行はれた。尤も十三日と十六日とは初盆の家々のみにて臺前點燈をなすのであつた。そして十五日に精靈船流しがあつた。長崎名勝圖繪に云ふ。



その前後に行はれれば自餘の季節には決して行はれぬことは古今同一轍である。ペーローの發音は扒龍船が長崎に輸入した風習の一である。そして今猶ほ盛んに行はれてゐる。尤も午の佳節を中心としてペーローはボートレースの如く船の進行の遲速を争ふて勝負を決する競技である。往時南支那の唐人

## ペーロー

曆を陽曆に換算したものではない。

要するにも舊曆三月を太陽曆の四月に改め舊曆の日數をそのまゝ太陽曆の日數に爲したけで舊

四月廿五日	合	戰場	四月廿八日	準提觀音祭	準提觀音址
四月十五日	風	頭	四月廿一日	弘法大師祭	城の古址
四月三日	祭	風	四月十日	金毘羅祭	金毘羅山麓

がある。

爲の數は長崎の晩春の太空中から日増しに減りゆくのである。現今にては次の順序にて紙鳶揚會の催しその月中紙鳶揚は最も盛んに行はれ、五月に入り夏初夏の暑が漸を追ふて肌にて紙鳶揚の催しがある。それよ現今の紙鳶揚は三月頃より始り四月三日雛祭の節句當男風頭にて紙鳶揚の催しがある。それよあるで節句の紙鳶揚げと云ふ稱さへ行はるに至つたのである。

げとは互に相離るべからざるもの如く思惟せられ特に三月三日雛祭の節句に男風頭に紙鳶揚げが

長崎 内田榮四郎氏所藏屏風の図一



紅毛人歌訪事隨觀圖





歴代の長崎奉行は諏訪神事に重きををおいた。そして毎歳の神事に參加する御供町へは相當の經費が傳へられた。

### 諏訪神事

唐人の間には諏訪神事は九使廟祭、九使神會など稱せられた。そして紅毛人の著述によりて遠西に傳へられた。

現時は太陽の七十月十五日施餓鬼供養を以て盆祭が行はれてゐる。初盆の家々にては十三日より點燈を始める。そして十六日は燈籠と稱してやはり墓前點燈をなす。

同十五日の夜唐三ヶ寺にて施餓鬼供養あり。名つけて饑口云々と云通俗エキベヨウと稱す。

(中略)

新死の家は若輩と號し舉家名残を惜て五更に至る。前後の賑ひ曉に天に至りて輟ぬ。通衢觀者群をなす。扣き鉦を鳴し同音に佛名を唱ふ。泉聲雜沓して乳兒之が爲に睡を覺すに至る。通衢觀者群をなす。隣約を結び巨船一艘を製作して相共に供物を積む。呼んで催合船と稱す。之を送るに途中双盤を送り洋中に漂ふがごとし。通俗之を呼んで聖流と云。町々下賤の輩は毎に船を造すして近岸の海濱に送りゆく。素具の設けあり。風に任せて颺し水面上に飄出ゆ。船子順風を乗らして湯園菓實の属ひ悉く壇上より撒き散らし積船體には數十の竹筒を設けて線香を立てる。種々燈籠繚繞の上を赫然たり。吏人商賈の家は奴隸緑之を肩に華門賤の者は父子兄弟之種々所を以て大書しし四更の鐘を聞て皆若者を煎し靈魂に供ふ。通俗之を三番茶といふ。將供するなり。須臾





そのものより一層特色あるものとになり、長祿料理の生命となるに至つた。  
唐人によつて長崎に傳へられた卓祿料理は、年所を經るにつれて、漸次日本化し、遂には唐土料理  
ではならぬ。

それから卓祿料理の精進もたのむる普茶料理が長崎の唐寺を中心として市民間に行はれた事を意却し  
てはならぬ。

食物飲料の供給が長崎程でなかつた事は確に失敗の重なる一因であつたと言へやう。  
地方に於ては餘り成功せざりやうに思はれる。それによつては種々原因があつたが、卓祿料理  
の本場となり、享保の頃より卓祿料理は京、大坂、江戸方面にても亦多少流行するに至つた。併し他  
としてみれば、三十五六人の元祿二年唐人屋敷設立後は、唐人屋敷が日本に於ける唐土料理  
元祿初年のころには唐土風の料理を心得、料理人として唐人のため調理を爲すことを以て職業

### 卓祿料理

達してみても考へた。い。  
きて唐土の卓祿料理の御馳走をなしたものと認めねばならぬ。それで長崎には早くから卓祿料理は發  
達してゐた。招

暹羅記事の神事に關する分は特に詳密である。

來船唐人の著述に諏訪神事の記事のないものは絶無である。就中 Engelbert Kaempfer の日本歴史附

の棧敷に至り、また紅毛人の一部は阿蘭陀屋敷前で之を觀覽した。

た。唐土風なものもあれば、また紅毛風なるものもあつた。それから唐紅毛人の神事、見物のため御旅所  
と十一日は踊奉納の日であつた。明治五年以後は七月九日。參差が仕出され、種々様々の踊が奉納され

六月中御供町踊町にあたる町々にては思ひ／＼に吉辰を選び小屋入りの儀式を行ふ。九月九日  
奉納踊は花美に行はれた。

ないやうに行はねばならぬと云ふ心持もあつたやうに思はれる。斯うして諏訪神事は盛んに行はれ、  
日本の神事を代表すべきものとなつてゐた。それで一般市民は異國に對しても諏訪神事を見苦しく  
また長崎は鎖國時代に於ては異邦人の來する日本唯一の大湊であつたので對外的には諏訪神事は  
一掃しその浸入傳播或は再度の勃興を未然に防ぐには究竟なる方便の一つであつた。

崎の鎮守となり市民は悉くその氏子となつた。そして諏訪神事の特別獎勵は確に耶蘇宗門を長崎より  
木賢清の勢力によりて諏訪神事を長崎一般市民の神事と認定したものと考へていた。即ち諏訪神社は長  
があつたので往々その弊を除く爲めに訓令が發布され、たつた。寛永十一年長崎奉行は青  
貸出された。これを拜借銀と云ふのである。御供町の奉納踊は動もすれば餘りに花美に行はるる傾向

朝夕恒のシッホ。家は私の貧富に應じて是を爲す。

[illegible]





エヨリウスマス、長崎夜話卓、はまたヒリヤウスマス、飛龍子、飛龍頭など書いてある。葡萄酒の

はれた。

テンテラウと云ふ言葉はひとり日本ばかりでなく、東印度にても亦行はれてゐる。また支那にても行

がテンテラウと云ふ言葉より後に行はれたか、其邊のこゝには判らない。

往時行はれたとすれば、それはテンテラウの詠り該當するものと推測したい。テンテラウ言葉が  
テンテラウは葡萄牙語テンテロ tempero に該當するものかと考へたい。果してテンテラウと云ふ言葉が

ラはテンテラウの略稱であると言へる者もある。

それはより遙か前に近松門左衛門はその唐船今國姓爺にテンテラウと云ふ言葉を用ひてゐる。テン  
・ 現今物語トイトル上リノ内ニ天麩羅ノ事見エタリと述べてゐる。

齊藤月琴はこの説を駁して、「天麩羅ハ天明中ニ始リテラズ、安永十年正月豊竹東治ノ芝居

である。

麥粉のうすものをかけた云々也」と云つて説いた。それが天麩羅と云ふ言葉の起源である云ふ  
りて創る物故天麩羅也是に麩羅と云ふ文字を下したるは小麥に作る羅はうすも字也小  
つけあげを賣出した際に、山東京傳がこれを天麩羅と命名し「足下は天然浪人也ふらりと江戸へ賣來  
岩瀬京山のテンテラウ語源の説は面白くない。天明の初年利助と云ふ者が大坂より江戸に下り魚肉の

ラベ、ラウ、ラモの調理の方法が西洋料理法に據つてゐる。そして發音そのものが南蠻の言葉らしく聞

葉がある。やはり葡萄牙語の同じ意味を持つてゐる。

形容詞としては英語の minced の意味を持つてゐるのである。尚ほ西班牙語にも picado と言

ピカドは葡萄牙語の picado に該當する。之を英譯すれば minced meat になる。そして picado は

には、よくピカドを作りて食するのである。

併し骰子形の身や大根甘諸などは是非必要である冬の寒ささびしき日特に雪のちうちう降る時な

である。家々によりて多少料理法を異にするところもある。例へばフロロ汁をつくらぬところもある。

之を交せて鍋にいれ、それに甘諸をおうしてフロロ汁とさし醤油にて味をつけ、之を十分に煮るの

長崎にてピカドと稱して、骰子形に切りたりたる鰯の身と、同じく小さく四角に切りたりたる大根及び甘藷

の言葉は葡萄牙語の odo の外ならぬのである。西班牙語にては pan と綴るのである。

例へば、先づ第一にピカド云ふ言葉を擧げねばならぬ。ピカドは洋食に缺ぐ可からざるものである。

生存してゐるのである。

し、今日に於ても猶ほ南蠻の匂ひを遺してゐる。そして南蠻料理に關係ある外來語が長崎方言の中に  
南蠻人の風俗慣習は長崎人のそれに淺からざる影響を及ぼした。そして南蠻料理の如きも早く發達





filhoses 該當す。西班牙語にては fillos といふ。酒は葡萄酒の vinho 飲料として、チャタ酒は餘程日本間に珍重せられたものである。葡萄酒は葡萄酒の語に輸入して、vinho 葡萄酒にては阿蘭陀人がこれを長崎に輸入して

た。大淀三千風の句に

西都に菊あつてちんたんの玉江壽けり

といふがある。

異國日記には南蠻酒、チャタ酒など云ふ言葉が見ゆる。當代記にはインニヤ酒と云ふ名稱が載せられてある。

それからコッパン云ふ言葉が今猶ほ用ひられてゐる。葡萄酒には copo といふ言葉がある。

また飲料をいうコッパンも葡萄酒に外ならぬのである。西班牙語にては frasco といふ言葉を用ひてゐる。なほ長崎にて西洋料理に用ふるインニヤをコッパンと云ふ。この言葉も亦南蠻料理を聯想せしむるのである。

インニヤは葡萄酒の faca にならぬのである。阿蘭陀のインニヤ言葉もインニヤの代りに用ひられてゐるが、それは寧ろ料理のインニヤでなくして醫術に用ふるインニヤを意味するのである。インニヤは風味最も佳良に

第二十一

ビスケット biscoute の言葉も住時行はれたが、今日は廢絶して、その代りに英語のビスケットと言ふ言葉が普く用ひられてゐる。

その外、いふ南蠻料理や菓子に關する言葉が行はれてゐたが、今日にてはその大部分は忘れられてつたやうである。

# タ ー フ ル

卓袱である。併しタルタルと言葉は食卓と云ふ意味から更に轉じて洋食と云ふ意味を持つに至つたのである。それでは長崎で謂ふ所のタルタルは阿蘭陀料理を意味するものとねばならぬ。

現今にても長崎ではタルタルと言葉は用ひられてゐる。それは阿蘭陀料理と云ふ特殊な意味を脱却して一般洋食を意味するのである。

阿蘭陀料理に關する言葉を少く擧げてみよう。阿蘭陀語の brood 併しフロードと云ふ言葉は蘭葉間に多少行はれたこ

とあつたが、一般長崎人間には舊に依りてバソと云ふ言葉が行はれて今日に至るのである。フロード 阿蘭陀語の brood 併しフロードと云ふ言葉は蘭葉間に多少行はれたこ





にては阿刺吉、荒氣なものを書いたものである。蘭領印度の Java 島、特に Batavia 島の酒は最良のものであつた。

ネーデル蘭語では jenever 或は genever といひ、佛蘭西語にては genièvre 葡葡牙語にては genebra といふ。英語にては gin といふ。蘭國の各地方の酒を Hollands Geneva といひ、更に Hollands といふ稱してゐる。ネーデル蘭國の Schiedam, Rotterdam, Delft 其他に於て製

造る古來阿蘭陀名産の一に數へられてゐた。

ユーピーー蘭語にて loofij といふ。いねを詠うてユーピーーと稱するに至つたもので、鎖國時代に於てユーピーーといふ言葉は行れてゐた。

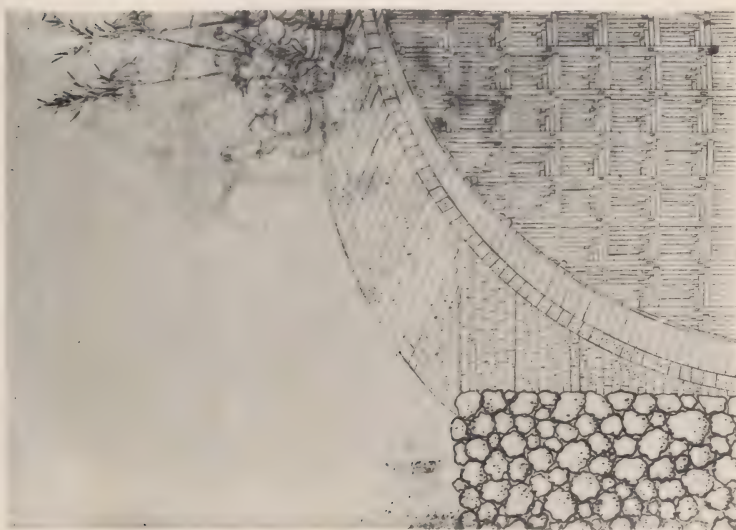
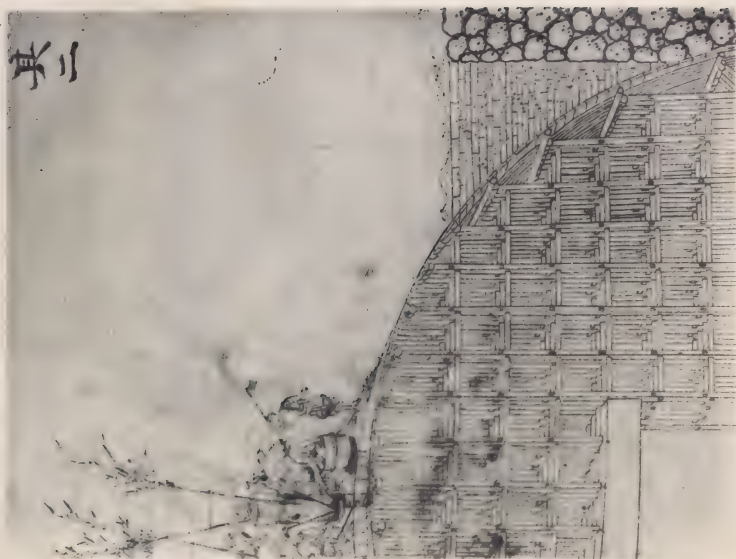
阿蘭陀菓子の名物は色々ある。タルタート ユピーー oblie (obliekoek) サネー ユピーー kaneelkoekje

タス sees ユピーー サス qoffertjes といふ等を擧げておいた。

幕末には福屋七が西洋料理を創業した。尙ほ自遊亭丈吉なども西洋料理を以て有名であつた。

爾後西洋料理はいよいよ行はれて今日に至るのである。

石 橋



追従するばかりで斬新が薄らいでゆくばかりである。菓子の場合に於ても亦同じ云々。  
長崎人の自主的精神が薄らいでゆけばゆけば、長崎の特色はうびてゆくばかりである。そして唯だ  
長崎の桃饅頭など、今も猶ほ行はれてはゐるが、とても昔のやうな結構なものは行はれなない。  
だか、ラッラだけは今も現存して、善く世に認められてゐる。

てゐた砂糖蜜漬、ヘルメ細工など、今猶ほ多少行はれてゐるが、到底昔日の盛觀を有してゐない。但  
となつた。現時の菓子は往時の特長を著しく失却したもので、謂はざるを得ない。往時長崎の誇りとし

月には筑前屋敷に於て同じく模範型汽車運轉を行ふた。その後英人もまた大浦居留地に於て模範型汽車運轉を試み、同五をを懇望して手に入れた。尋いて安政二年四月には筑前藩士が出島にて模範型汽車の運轉を試み、密なるもまた嘉永五年鍋島更公は長崎出島蘭館の甲比丹 Pieter Albert Bik の船齎せる汽車の詳なるもそれから西洋式建築も亦居留地を中心として漸次行はるやうになつた。

幕末になると長崎に製鐵所、造船所なごの基礎は強固に横へられ、港外高島の炭坑は日本の模範炭坑となつた。

鐵橋の嚆矢と謂ふべきものであつた。明治元年八月一日濱町の鐵橋が成就した。それは長崎製鐵所の打建<sup>チケン</sup>に係るもので、實に本邦に於ける

崎の石橋工事は長崎自慢の一つに數へらるるに至つたのである。

その特長は力學をよく利用してゐる點に在る。唐人が石橋架設法を長崎人に傳へ、後には長崎の如きは寛永十一年興福寺住持唐僧子如定の架設したもので今猶ほ長崎の誇りとする石橋である。長崎には石橋が少くない。その重なるものは往來唐僧や唐人が架したものである。就中眼鏡<sup>メガネ</sup>

### 石橋、鐵橋其他





英社 藤木博 藤木博 所 印

長崎市榎津町八番地

平 喜 木 藤 者 刷 印

長崎市榎津町七番地

長崎市役所 編輯 行纂 者兼

大正十五年四月二十日發行  
大正十五年四月十五日印刷

編者 古賀 十一郎 識

編修に係る下編に於ては此等の事に就いて別に記載を與へなかつたことを附記しておく。  
永山英氏の編修に係る本書上に於て軍事、美術、造船、製鐵事業等の敘述があるのである。  
た。

を打つ試みを行ふた際に、長崎の阿蘭陀通詞名村五郎が主として米人を輔けたことを特筆しておき  
なほ、一八五四年三月二十二日ハルリ提督一行のものが神奈川附近に於て機關車の模型運轉と電信  
。併し幕に至るまで鐵道敷設は四圍の不利な事情のため到底實現する見込がなかつた。  
轉を行ふた。そして佐賀藩以外長州、薩藩などゝに於てても汽車や鐵道には相當の注意を與へたものであ





○ 耳 聾 之 症 一 月 餘



97



日-1932





